仙台市文化財調査報告書第170集

仙台平野の遺跡群XII

平成４年度　発掘調査報告書
山田条里遺構発掘調査報告書

１９９３年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第170集

仙台平野の遺跡群XII

平成４年度　発掘調査報告書
山田条里遺構発掘調査報告書

１９９３年３月

仙台市教育委員会

序　　文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて12年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、昨年度に引き続き長町貨物ヤード跡地において、遺跡の範囲確認調査ならび性格究明のための発掘調査を実施し、その報告と、平成元年度より3ケ年にわたり発掘調査を実施した山田条里遺構の本報告をそれぞれまとめたものであります。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。またそれに伴い民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々や有識者の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

これからは、もっと広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、教育委員会が先頭に立って調整、努力することを誓うものであります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒英

例　　言

1．本書は平成４年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山・佐原：1973）を使用した。

3．本書中で使用した地形図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１「仙台南西部」・５万分の１「仙台」の一部である。

4．実測図中の水系高は標高である。

5．実測図、本文中の方位は山田条里遺構が真北を、長町貨物ヤード跡地が磁北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約７°20′である。

6．本書作成・編集は、渡部弘美、長島榮一、稲葉俊一が行ない、執筆者は文末に記した。

7．遺構番号を次の通りとした。

ＳＡ　材木列　　ＳＢ　建物跡　　ＳＤ　溝跡

ＳＩ　住居跡　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　性格不明遺構

8．石器の材質は東北大学教養部 蟹沢聰史氏に鑑定していただいた。

9．陶器・磁器の産地同定は文化財課 佐藤　洋が行なった。

10．本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。

11．今年度事業は平成４年４月に着手し、平成５年３月に終了した。

本　文　目　次

序文
例言
Ⅰ．仙台平野の遺跡群平成４年度発掘調査報告……1
　１．調査計画と実績……1
　２．発掘調査報告……2
　〔１〕　長町貨物ヤード跡地 ……2
　　１．調査経過……2
　　２．調査内容……3
　　３．まとめ……15
　〔２〕　郡山遺跡 ……23
　　１．位置と環境……23
　　２．調査概要……23

Ⅱ．山田条里遺構……25
　１．調査に至る経過……25
　２．調査要項……25
　３．遺跡の位置と環境……26
　４．調査の方法と経過……28
　５．基本層位……31
　６．発見遺構と出土遺物……32
　７．プラント・オパール分析……95
　８．総括 ……104
　９．まとめ ……106

Ⅰ．仙台平野の遺跡群平成４年度発掘調査報告

１．調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、700箇所に達している。これらの遺跡は先人の具体的な生活の様子を現代に伝えるものであり、博物館などに収蔵、展示されているものと同等の文化遺産である。私たちの世代にはこれらの文化遺産を次の世代へと継承していく責務を負っている。しかし仙台市は周辺の市町村との合併や政令指定都市に移行して以来、都市化の方向に大きく拍車がかかり、遺跡の中には破壊の危機にさらされているものも多いのが現状である。

当市教育委員会では、これら失われていく遺跡の範囲と性格究明を事前に計るとともに、個人住宅建設などの小規模開発に対応するため、昭和56年度より国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。12年目をむかえた今年度は、長町貨物ヤード跡地、郡山遺跡で発掘調査を実施した。

１．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

２．調査面積　1,055㎡

３．調査期間　平成４年７月～10月

４．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課

課長　　白鳥　良一

調査第一係　係長　加藤正範　　主任　結城慎一　　主任　木村浩二

主事　長島榮一　　教諭　稲葉俊一

管　理　係　係長　菅原澄雄　　主任　村上道子　　主事　佐藤正幸

調 査 実 績 表

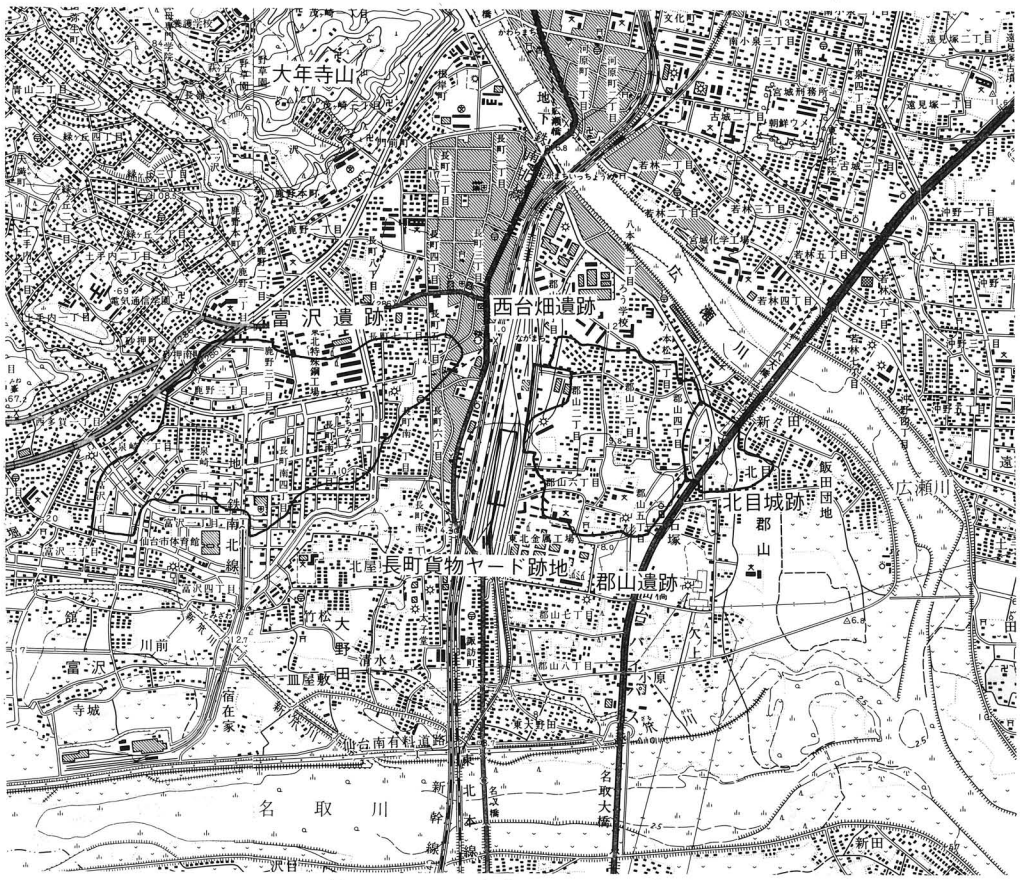
調 査 地	所 在 地	申　請　者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
長町貨物ヤード跡地	太白区長町六丁目地内	仙台市教育委員会 教育長　東海林　恒英	試掘調査	40,000㎡	1,055㎡	平成４年７月16日～10月９日
郡山遺跡（第95次）	太白区郡山二丁目14－18	太白区郡山二丁目3-5 伊　藤　仁　郎	個人住宅建築	220㎡	12㎡	平成４年７月25日～７月29日
郡山遺跡（第97次）	太白区郡山五丁目地内	仙台市道路管理者 仙台市長　石　井　亨	道路工事	600㎡	114㎡	平成４年10月15日～10月30日

2．発掘調査報告

〔1〕 長町貨物ヤード跡地

1．調査経過

仙台市では、太白区長町地区を新たな副都心とする「長町地区新都市拠点整備計画」を進めている。この地域の中にあって国鉄清算事業団の所有する土地は130,000㎡にのぼり(註1)、その中でも長町貨物ヤード跡地は84,000㎡の面積がある。この地は郡山遺跡、西台畑遺跡と隣接しているが、これまで遺跡の発見等がされなかった所である。しかし新都市拠点整備計画が進められるにおいて、遺跡の存在の有無、範囲を把握する必要があるため、平成2年より文化財課、都市整備局区画整理課、長町都市整備室、国鉄清算事業団と協議を重ねてきた。平成3



第1図　長町貨物ヤード跡地位置図

年度には遺構の密度、様相、基本層序などを観察する試掘予備調査を実施することになった。

平成3年度の調査ではヤード造成以前の旧地形が、標高8～9mの水田部分と標高9～10mの畑地部分からなることが確認された。旧地形の標高が高い畑地部分からは、竪穴住居跡6軒、溝跡などが検出されている。また須恵器、ロクロを使用していない土師器、弥生土器などの遺物が出土しており、この地に遺跡が存在することが確認された(註2)。

平成4年度は昨年度の調査成果を踏まえ、遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施した次第である。

2．調査内容

(1) 調査区の設定

調査は昨年と同様に長町貨物ヤード跡地内の96×420mの範囲に限定して実施した。これは周辺に東北本線や貨物線があり、その運行に関わる信号ケーブル等が未だに埋設されているためである。この範囲の中で平成3年度に遺構を検出したのは、以下の通りである。

E－3トレンチ　溝跡1条、ピット
E－4トレンチ　竪穴住居跡2軒、溝跡、ピット
E－8トレンチ　溝跡1条、性格不明遺構
C－2トレンチ　竪穴住居跡2軒、溝跡、小溝状遺構
C－3トレンチ　竪穴住居跡1軒、小溝状遺構
C－4トレンチ　溝跡、小溝状遺構
W－4トレンチ　竪穴住居跡1軒、溝跡
W－8トレンチ　溝跡1条

以上のような状況から調査した範囲の東側については、北端のE－1、2トレンチを除いて遺構の広がりは全面に渡っていると考えられる(註3)。

今年は昨年の成果をもとに①～⑥の調査区を設定し、発掘調査を実施した。なお調査の方法は6×6mのトレンチを基本とし、遺構の上面を確認するのに留めた。さらに土層の観察を必要とする箇所については、補助トレンチを設定した。

① 遺構を検出できなかったC－1トレンチをC－1aトレンチとし、竪穴住居跡を検出したC－2トレンチの間にC－1bトレンチを設定した。

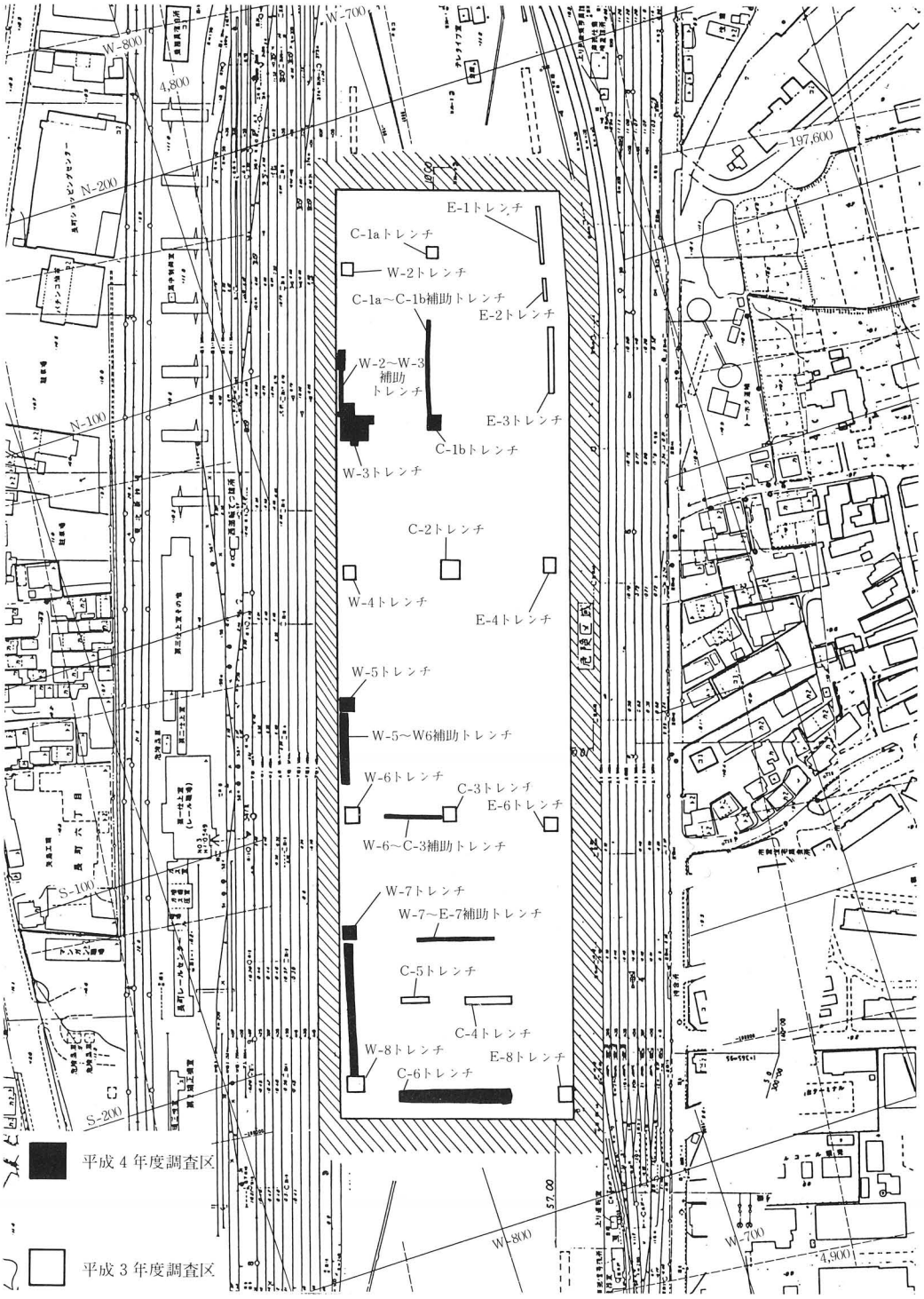
② 遺構を検出できなかったW－2トレンチと竪穴住居跡を検出したW－4トレンチの間に、W－3トレンチを設定した。

③ 竪穴住居跡を検出したW－4トレンチと遺構を検出できず、河川跡のみ検出したW－6トレンチの間にW－5トレンチを設定した。

④ W－6トレンチと溝跡を検出したW－8トレンチの間にW－7トレンチを設定した。

⑤　W－６トレンチと竪穴住居跡を検出したＣ－３トレンチの間に補助トレンチを設定した。

⑥　溝跡を検出したW－８トレンチ、Ｅ－８トレンチの間にＣ－６トレンチを設定した。



第２図　調査区配置図

(2) 基本層序

昨年度調査分と合わせると以下のようになる。

Ｅ－１、２、３、４、６トレンチ

Ｃ－１ａ、１ｂ、２、３、４、５、６トレンチ

Ｗ－２、３、４、５、６トレンチ

Ｉａ層：10ＹＲ5/2灰黄褐色砂。粘性、しまりなし。小石を多量に含む。線路のバラス。

Ｉｂ層：7.5ＹＲ2/1黒色。石炭の燃え滓。

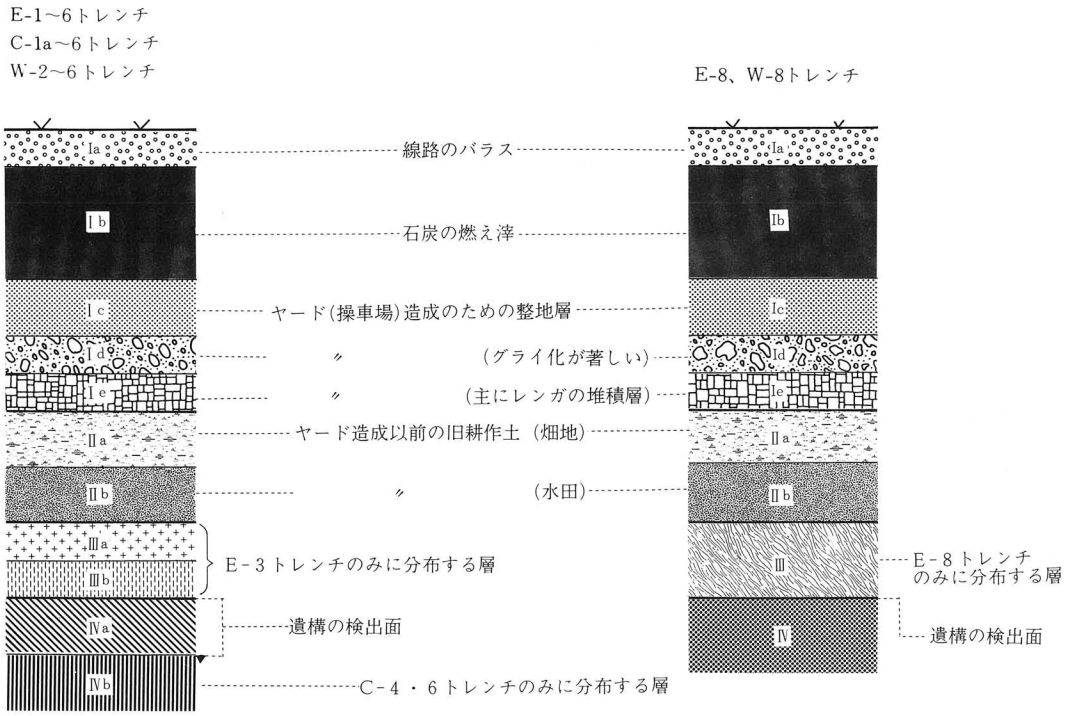
Ｉｃ層：10ＹＲ5/2灰黄褐色シルト質粘土。粘性なし。しまりやや有り。ヤード造成の為の整地層で、各トレンチごとに色調のバラつきがある。

IIａ層：10ＹＲ2/3暗褐色シルト質粘土。粘性、しまりやや有り。ヤード造成以前の旧耕作土(畑地)。

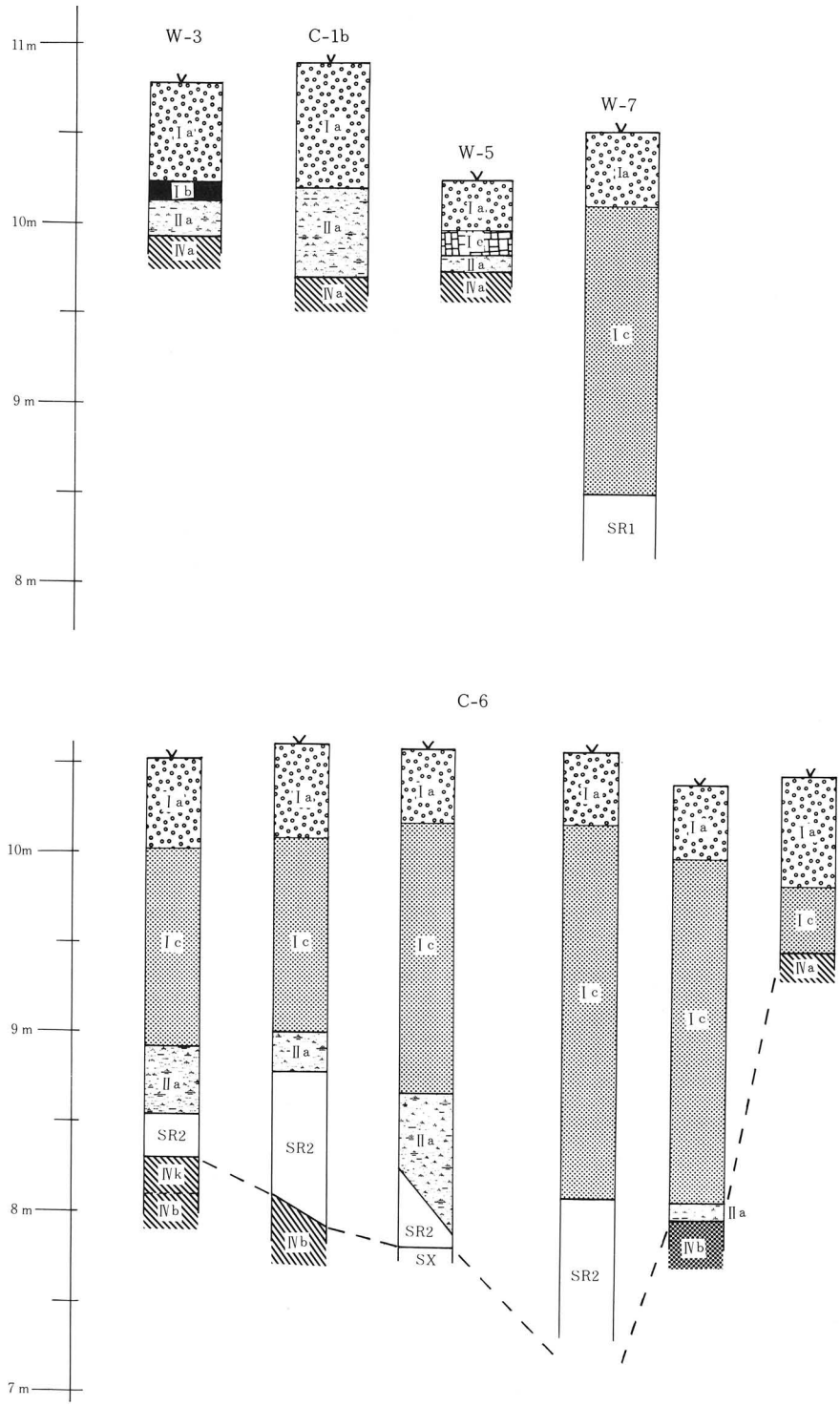
IIｂ層：7.5ＹＲ4/1褐灰色粘土質シルト。粘性有り。しまりなし。ヤード造成以前の旧耕作土(水田)。

IIIａ層：10ＹＲ3/3暗褐色シルト質粘土。粘性、しまり有り。Ｅ－３トレンチのみに分布。

IIIｂ層：10ＹＲ4/3にぶい黄褐色シルト質粘土。粘性、しまり有り。Ｅ－３トレンチのみに分布。



第３図　土層柱状図



第４図　調査区断面柱状図

Ⅳａ層：10ＹＲ7/8黄橙色粘土。粘性、しまり有り。郡山遺跡の官衙と同時代の遺構検出面と考えられる層（以下、遺構検出面と言う）。

Ⅳｂ層：10ＹＲ5/6黄褐色シルト質砂。粘性なし。しまりやや有り。Ｃ－４、６トレンチなどに分布する遺構検出面。

Ｅ－８、Ｗ－８トレンチ

Ⅲ　層：10ＹＲ5/2灰黄褐色粘土。粘性、しまり有り。酸化鉄、小石を含む。Ｅ－８トレンチのみに分布する。旧耕作土水田。

Ⅳ　層：10ＹＲ8/6黄橙色粘土。粘性、しまり有り。マンガンを多量に含む。遺構検出面。

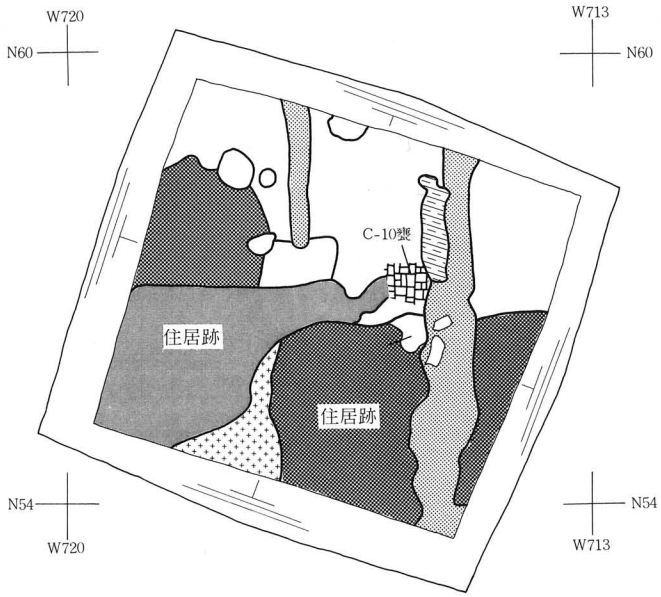
(3)　検出遺構と出土遺物

今年度の調査は２(1)で述べたように、昨年度の調査で遺構の検出できたトレンチと検出できなかったトレンチとの間に新たなトレンチを設定して実施した。遺構の検出にあたっては遺構検出面での上面プランの検出に留め、遺構の掘り込み等は一切行なわれなかった。したがって遺構の隣郭が他の遺構との重複や残存状況から、一部不明瞭な箇所がある。これについては、この調査がきわめて広い地域に対する範囲確認調査であるため、今後本調査の必要が生じた時に改めて検討する。

Ｃ－１ｂトレンチ

竪穴住居跡２軒、溝跡３条、ピットなどを検出した。調査区内で遺構の一部のみを検出したので住居跡の規模等の詳細は知り得なかったが、東側の住居跡が西側の住居跡を切っているようである。東側の住居跡は北壁の方向でＥ－３°－Ｎで、北壁中にカマドのソデの一部が検出された。溝のうち調査区を南北に横断する溝は、Ｎ－３°－Ｅの方向で延び、住居跡を切っている。

遺物は、遺構の検出面上より土師器Ｃ－９坏（第10図10）、Ｃ－10甕（第11図２、写真６）、須恵器Ｅ－８甕（第10図６）、Ｆ－１丸瓦（第９図６）などが出土している。



第５図　Ｃ－１ｂトレンチ平面図

これより北方のＣ－１ａトレンチでは、基本層位が著しく変

化し、遺構は検出できなかった。C－１ａ～C－１ｂ補助トレンチを設定して調査した結果、C－１ｂトレンチから北へ40mの地点まで遺構を検出できるⅣａ層が延びていることがわかった。補助トレンチのⅣａ層上面から土師器C－11坏（第10図７）が出土している。

W－３トレンチ

当初６×６ｍの調査区を設定して調査したが、掘立柱建物跡の一部を検出したため、調査区を拡張した。その結果、掘立柱建物跡２棟、竪穴住居跡７軒、溝跡３条、ピットなどを検出した。

ＳＢ１建物跡　南北２間、総長4.1m（柱間寸法180～220cm）、東西２間（南柱列は３間）、総長4.1m（柱間寸法110～220cm）の建物跡で、方向は東柱列でN－20.5°－Wである。柱穴は40～60cm×40～80cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径が10～20cmである。

ＳＢ２建物跡　桁行６間、総長13.9m（柱間寸法　推定230cm）、梁行３間、総長６ｍ（柱間寸法180～220cm）の南北棟で、方向は桁行でN－９°－Wである。柱穴は60～110cm×90～150cmの隅丸長方形あるいは不整形のものが多く、柱痕跡は直径20cmである。重複する遺構が多く、不明瞭な箇所がある。

ＳＩ１住居跡　南北４ｍ、東西４ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡で、北壁に煙道を有している。方向は煙道でN－18°－Wである。

ＳＩ２住居跡　南北2.5m、東西3.2mの隅丸長方形の竪穴住居跡で、東壁中にカマドの痕跡がある。方向は西壁でN－14°－Wである。住居の南東端が他の遺構との重複により、一部壊されている。

ＳＩ３住居跡　南北２ｍ以上、東西2.7m以上の竪穴住居跡で、北壁に長さ1.4mの煙道を有している。方向は煙道でN－17°－Wである。

ＳＩ４住居跡　南北3.7m以上、東西3.7m以上の竪穴住居跡で、北壁に長さ1.4mの煙道を有している。方向は煙道でN－31°－Wである。

ＳＩ５住居跡　南北4.5mほど、東西6.5mの竪穴住居跡で、南壁中に長さ1.7mほどの煙道上の張り出しが確認される。方向は南壁でE－３°－Nである。

ＳＩ６住居跡　南北4.5m以上、東西5.2mの竪穴住居跡で、他の遺構との重複があると考えられる。方向は南壁でN－26°－Wである。

ＳＩ７住居跡　南北３ｍ、東西１ｍ以上の竪穴住居跡である。方向はN－３°－Wである。

ＳＤ１溝跡　　上幅40～50cmの東西方向に延びる溝跡で、方向はE－０°－Ｓである。

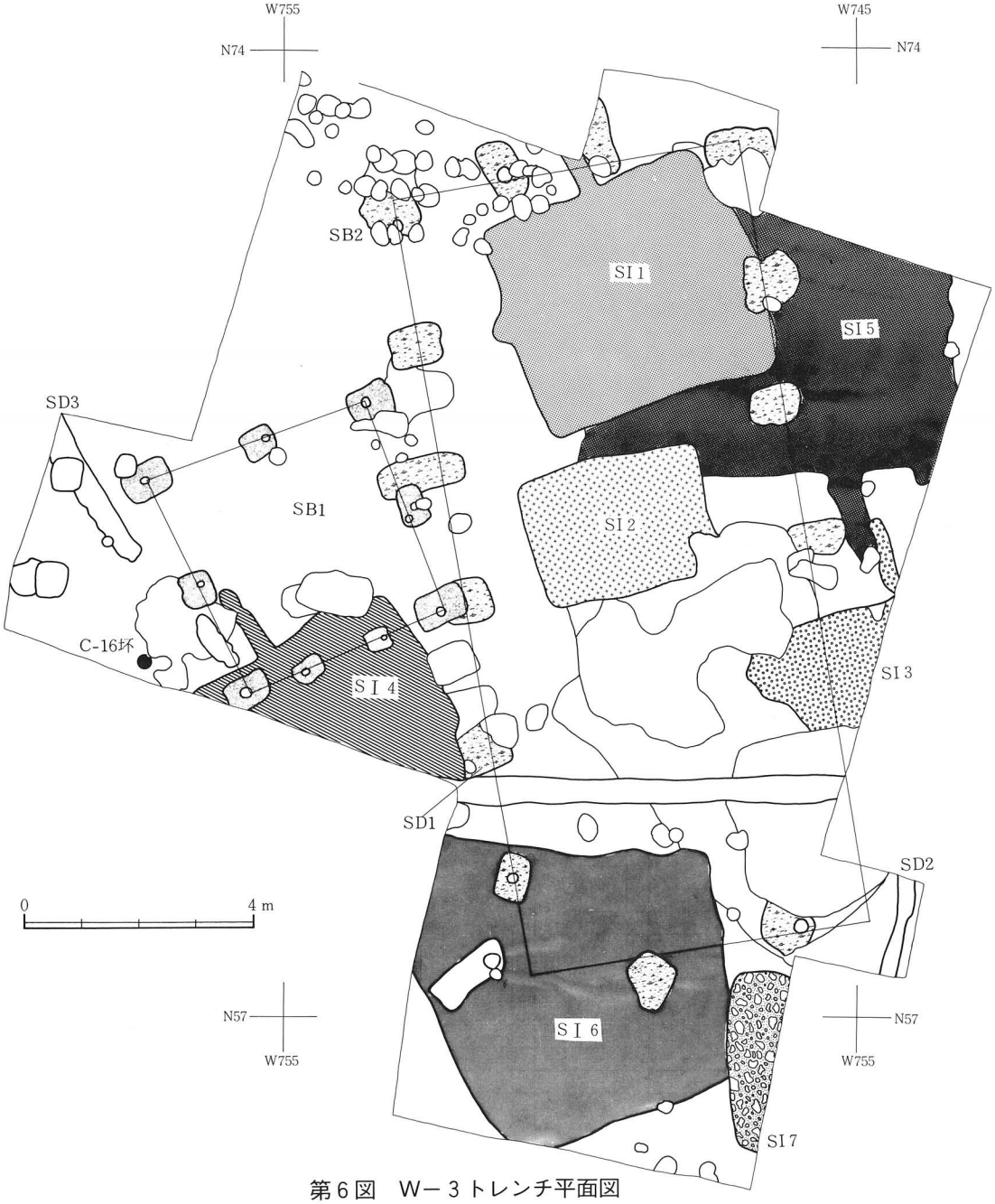
ＳＤ２溝跡　　上幅20～30cmの南北方向に延びる溝跡で、方向はN－13°－Eである。

ＳＤ３溝跡　　上幅35～50cmの南北方向に延びる溝跡で、方向はN－34°－Wである。

遺物は、遺構の検出面上（図中●）から土師器C－16坏（第９図11）が出土した他、土師器

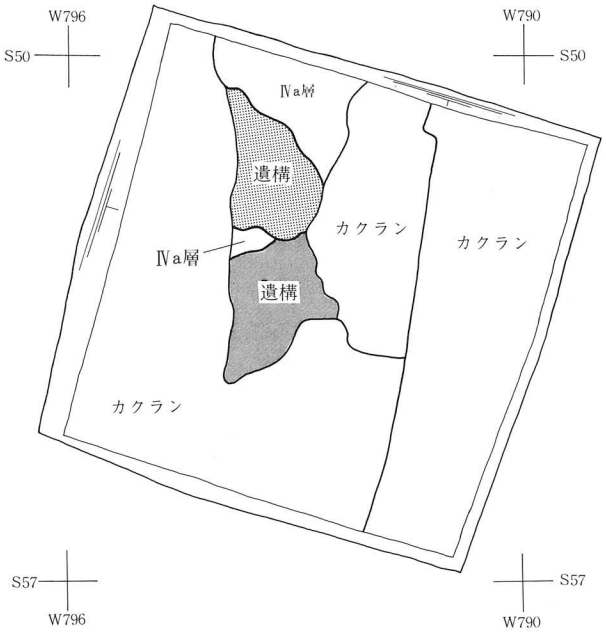
C－14、15、17坏（第９図12、９、10）、C－18、21甑底部片（第９図１、２）、須恵器E－10、11、14蓋（第９図４、５、８）、E－12鉢底部片（第９図３）などが出土している。またＳＩ１住居跡上から須恵器E－９坏（第９図13）、土師器C－20甕（第11図１）、ＳＩ６住居跡上から土師器C－19甕（第９図７）が出土している。

これより北方のW－２トレンチでは基本層位が著しく変化し、遺構は検出できなかった。W－



第６図　W－３トレンチ平面図

２～W－３補助トレンチを設定して調査した結果、W－３トレンチから北へ19mの地点まで遺構を検出できるⅣａ層が延びていることがわかった。補助トレンチのⅣａ層上面から土師器Ｃ－12壺（第10図12）が出土している。



第７図　W－５トレンチ平面図

W－５トレンチ

撹乱が著しいが遺構の一部を検出した。これより南方のW－６トレンチでは河川跡のみで、遺構は検出できなかった。W－５～W－６補助トレンチを設定して調査した結果、W－５トレンチから南へ26mの地点で河川跡の北端を検出し、そこまでは遺構の検出できるⅣ層が延びていることがわかった。

W－７トレンチ

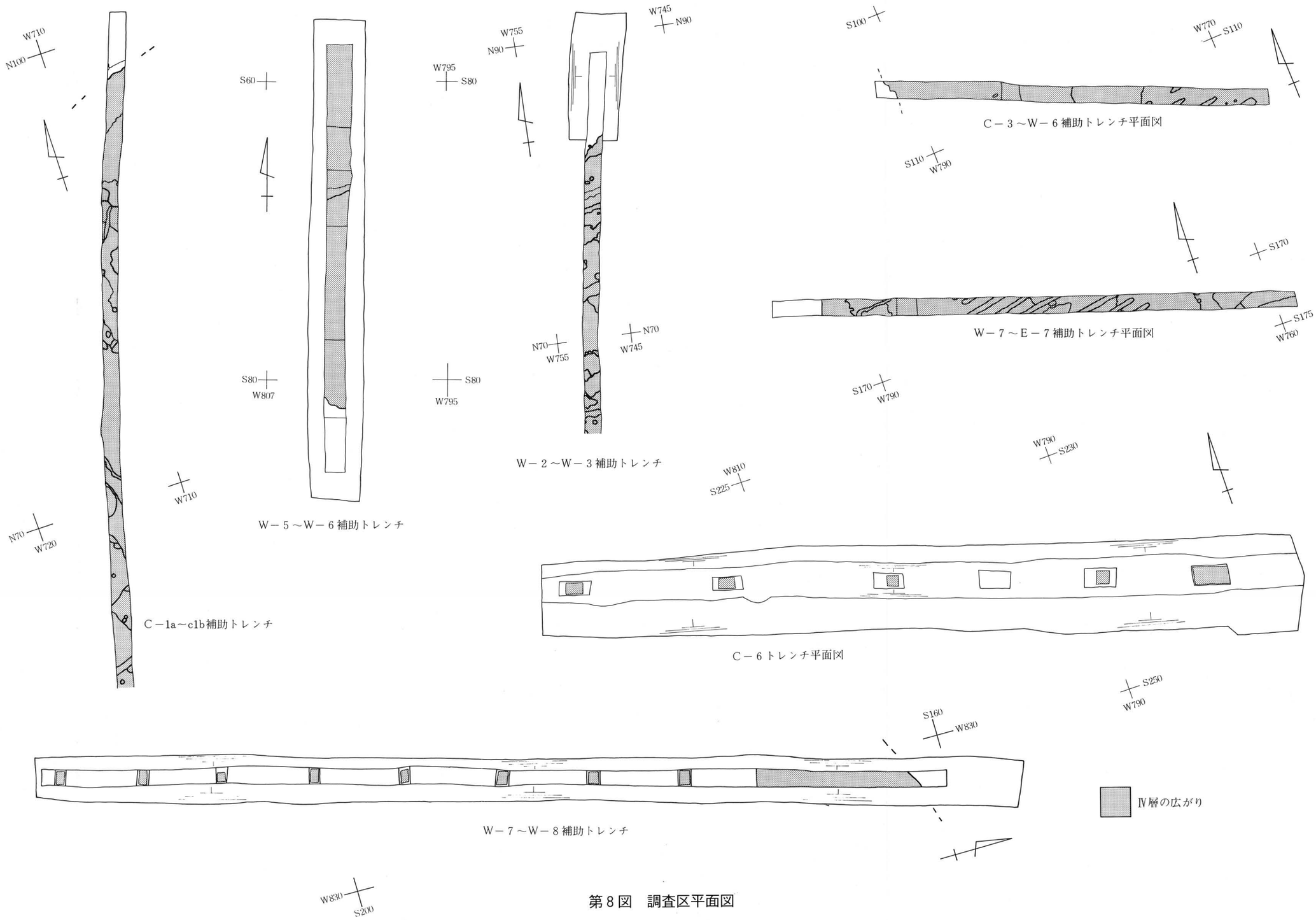
W－６トレンチと同様に上面に砂の堆積する河川跡を検出した。これより南方のW－８トレンチでは遺構を検出しているので、W－７～W－８補助トレンチを設定した。その結果W－７トレンチから南へ８ｍの地点で河川跡の南端を検出し、それ以南までは遺構を検出できるⅣ層が延びてきていることがわかった。また河川跡の東端を把握するためW－７～E－７補助トレンチを設定し、W－７トレンチから東へ27mの地点で河川跡の東端を検出した。補助トレンチの東半には小溝状遺構が検出されている。補助トレンチの遺構検出面上からＢ－９～12弥生土器（第10図１～４）、須恵器Ｅ－７（第10図11）が出土し、性格不明遺構上から土師器Ｃ－８坏（第10図８）が出土している。

W－６～Ｃ－３補助トレンチ

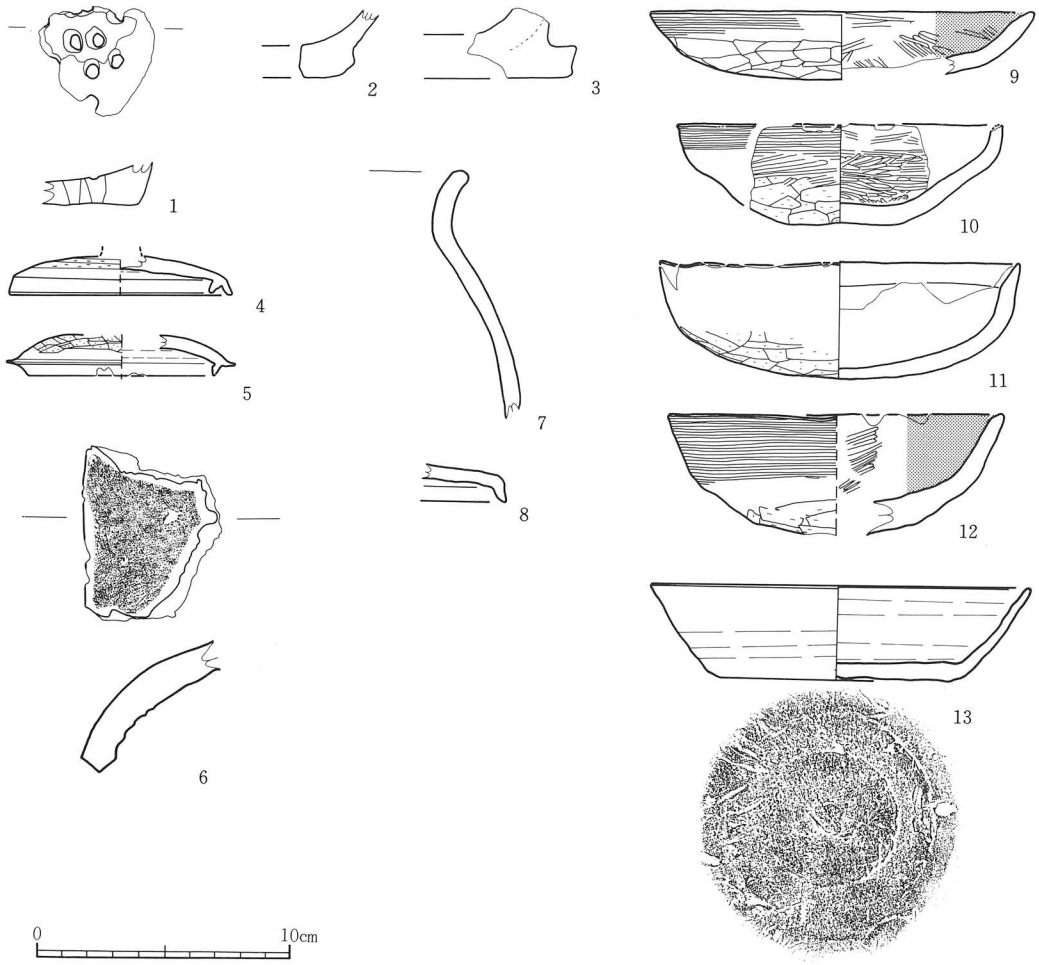
W－６トレンチで検出した河川跡の東端を検出するために、W－６～Ｃ－３補助トレンチを設定し、W－６トレンチから東へ13mの地点で河川跡の東端を検出した。補助トレンチの東半には小溝状遺構が検出されている。遺構検出面上から石器Ｋ－６石斧（第10図13）が出土している。

Ｃ－６トレンチ

ヤード造成時のＩｃ層が厚く、部分的にしか下層の状況を把握できなかった。Ｉｃ層の下層

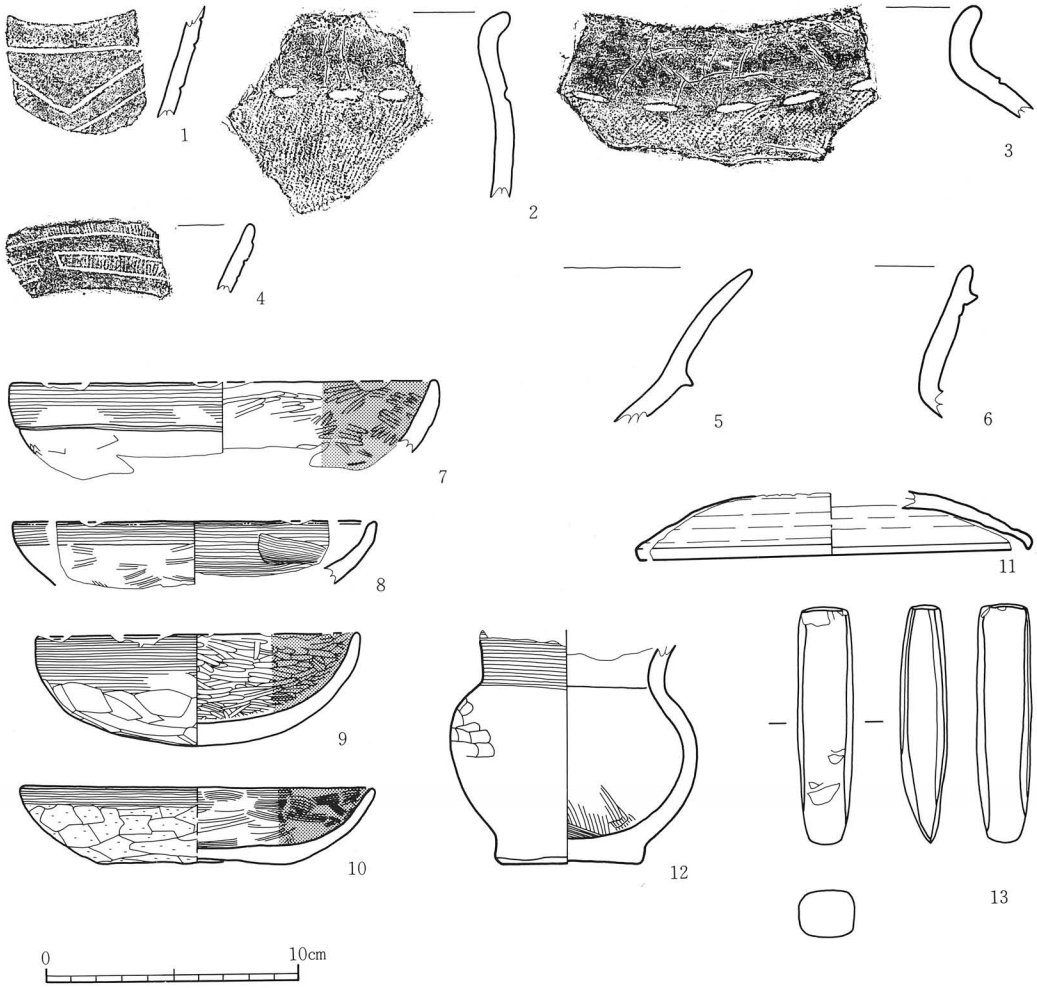

W710
N100
N70
W720
W710
C－1a～c1b補助トレンチ
S60
S80
W807
W－5～W－6補助トレンチ
W745
N90
W755
N90
W795
S80
N70
W755
N70
W745
S80
W795
W－2～W－3補助トレンチ
S100
W770
S110
C－3～W－6補助トレンチ
S110
W790
S170
W－7～E－7補助トレンチ
S175
W760
S170
W790
W790
S230
W810
S225
C－6トレンチ平面図
S250
W790
S160
W830
W－7～W－8補助トレンチ
Ⅳ層の広がり
W830
S200

第8図　調査区平面図



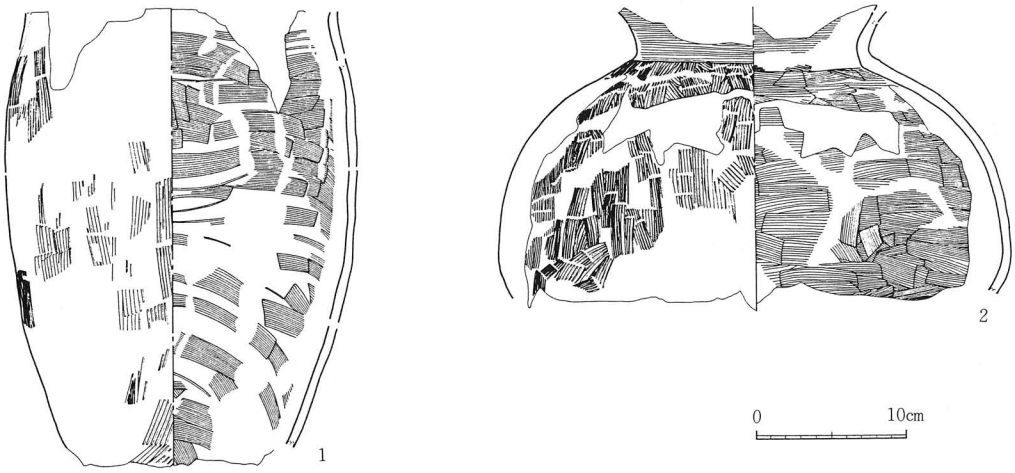
図版番号	登録番号	種別	器形	部位	出土地点 地区	出土地点 遺構	出土地点 層位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C－21	土師器	甑	底部	W－3		Ⅳa				
2	C－18	土師器	甑	底部	W－3		Ⅳa	ナデ→ケズリ	ケズリ		
3	E－12	須恵器	鉢	底部	W－3		Ⅳa	(底部)ヘラケズリ	ロクロナデ		
4	E－10	須恵器	蓋		W－3		Ⅳa	回転ヘラケズリ	ロクロナデ		10－1
5	E－11	須恵器	蓋		W－3		Ⅳa	手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		10－2
6	F－1	瓦	丸瓦		C－1b		Ⅳa	ナデ	布目		
7	C－19	土師器	甕	口縁部～体部	W－3	SI6		(口縁部)ヨコナデ (体　部)ケズリ	(口縁部)ヨコナデ (体　部)ナデ		10－5
8	E－14	須恵器	蓋		W－3		Ⅳa	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	C－15	土師器	坏	口縁部～底部	W－3		Ⅳa	ヨコナデ →ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	火熱による再酸化	10－8
10	C－17	土師器	坏	口縁部～底部	W－3		Ⅳa	ヨコナデ→ヘラケズリ →ヘラミガキ	ヘラミガキ		
11	C－16	土師器	坏	口縁部～底部	W－3		Ⅳa	ヘラケズリ →ヘラミガキ	ヘラミガキ		10－9
12	C－14	土師器	坏	口縁部～底部	W－3		Ⅳa	(口縁部)ヘラミガキ (底　部)ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		10－7
13	E－9	須恵器	坏	口縁部～底部	W－3	SI1		ロクロナデ (底　部)回転ヘラ切り	ロクロナデ		10－10

第9図　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	部位	出土地点 地区	出土地点 遺構	出土地点 層位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	B－9	弥生土器	鉢	胴部	W－7～E－7 補助トレンチ		Ⅳa	沈線、ミガキ	ミガキ		11－1
2	B－10	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	W－7～E－7 補助トレンチ		Ⅳa	ミガキ、刺突 LR縄文	磨滅		11－2
3	B－12	弥生土器	甕	口縁部	W－7～E－7 補助トレンチ		Ⅳa	ミガキ、沈線 LR縄文	ヨコナデ		11－4
4	B－11	弥生土器	鉢	口縁部	W－7～E－7 補助トレンチ	SX1		ミガキ、沈線 縄文	ミガキ		11－3
5	C－7	土師器	高坏	坏部	C－6		Ⅳb	磨滅	ミガキ		
6	E－8	須恵器	甕	口縁部	C－1b		Ⅳa	ロクロナデ	ロクロナデ		
7	C－11	土師器	坏	口縁部～体部	C－1a～C－1b 補助トレンチ		Ⅳa	(口縁部)ヨコナデ (底部)ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		11－6
8	C－8	土師器	坏	口縁部～体部	W－7～E－7 補助トレンチ	SX3		ヨコナデ→ヘラケズリ →ヘラミガキ	ヨコナデ		11－8
9	C－6	土師器	坏	口縁部～底部	C－6		Ⅰc	ヨコナデ →ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		11－7
10	C－9	土師器	坏	口縁部～底部	C－1b	SD		ヨコナデ →ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	丸底	11－5
11	E－7	須恵器	蓋		W－7～E－7 補助トレンチ		Ⅳa	回転ヘラケズリ →ロクロナデ	ロクロナデ	平底	10－3
12	C－12	土師器	壺	頸部～底部	W－2～W－3 補助トレンチ		Ⅳa	(頸部)ヨコナデ (体部)ナデ	ヘラナデ		11－9
13	K－6	石器	石斧		W－6～C－3 補助トレンチ		Ⅳa				11－10

第10図　出土遺物（2）



図版番号	登録番号	種別	器形	部位	出土地点 地区	出土地点 遺構	出土地点 層位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C－20	土師器	甕	体部	W－3	SI－1		ハケメ	ヘラナデ		10－6
2	C－10	土師器	甕	頸部～体部	C－1b	SI		(頸部)ヨコナデ (体部)ハケメ	(頸部)ヨコナデ、ハケメ (体部)ヘラナデ	図中にあり	6 10－11

第11図　出土遺物（3）

には河川跡があり遺構の検出されるⅣb層を削平している。しかしⅣb層上で性格不明遺構などがあり、南端にも遺構が延びていると考えられる。遺物はヤード造成時の整地層であるⅠc層中より土師器C－6坏（第10図9）が出土し、河川跡下層の遺構検出面であるⅣb層上面より土師器C－7高坏（第10図5）が出土している。

3．まとめ

遺構の検出された調査区と層の広がりから遺跡の範囲を図示すると、第12図のようになる。E－1、2、C－1a、W－2トレンチなどの北寄りの地域は、基本層位が大きく変化し、遺構を発見することはできなかった。W－6トレンチ付近では、遺構の検出できるⅣ層を河川跡が完全に削平している。それ以外の地域はE－4、C－1b、2、W－3、4トレンチなどの中央よりやや北側の地域で、遺構の密度が高いようである。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡15軒以上、溝跡、小溝状遺構、性格不明遺構などである。狭い調査区でしかも遺構の隣郭のみで判断しているため、性格不明遺構としたものの中に竪穴住居跡となるものが含まれている可能性がある。これらの遺構の年代については、遺構の掘り込みを行わなかったため断定できないが、遺構の検出時に出土した土器類が隣接する郡山遺跡と同じ状況を示していることから、7世紀後半から8世紀の年代が考えられる。今年のW－3トレンチ、C－6トレンチからは古墳時代中期にさかのぼる土師器片（第9図11、第10図5）が出土したが、郡山遺跡内からも出土しており、遺物からは郡山遺跡との共通点が見い出せる。しかし遺構については、昨年も指摘したとおり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の方向が郡山遺跡のⅠ期官衙やⅡ期

官衙の方向とは違い、ばらつきがある(註4)。また弥生土器片の出土があることは西台畑遺跡との関連も考えられ、下層には弥生時代の遺構や遺物を包含する層の存在する可能性がある。

遺構の検出状況から調査対象範囲の南側や西側においても、さらに遺跡が広がっていると考えられる。今後、新たな範囲確認調査が必要である。

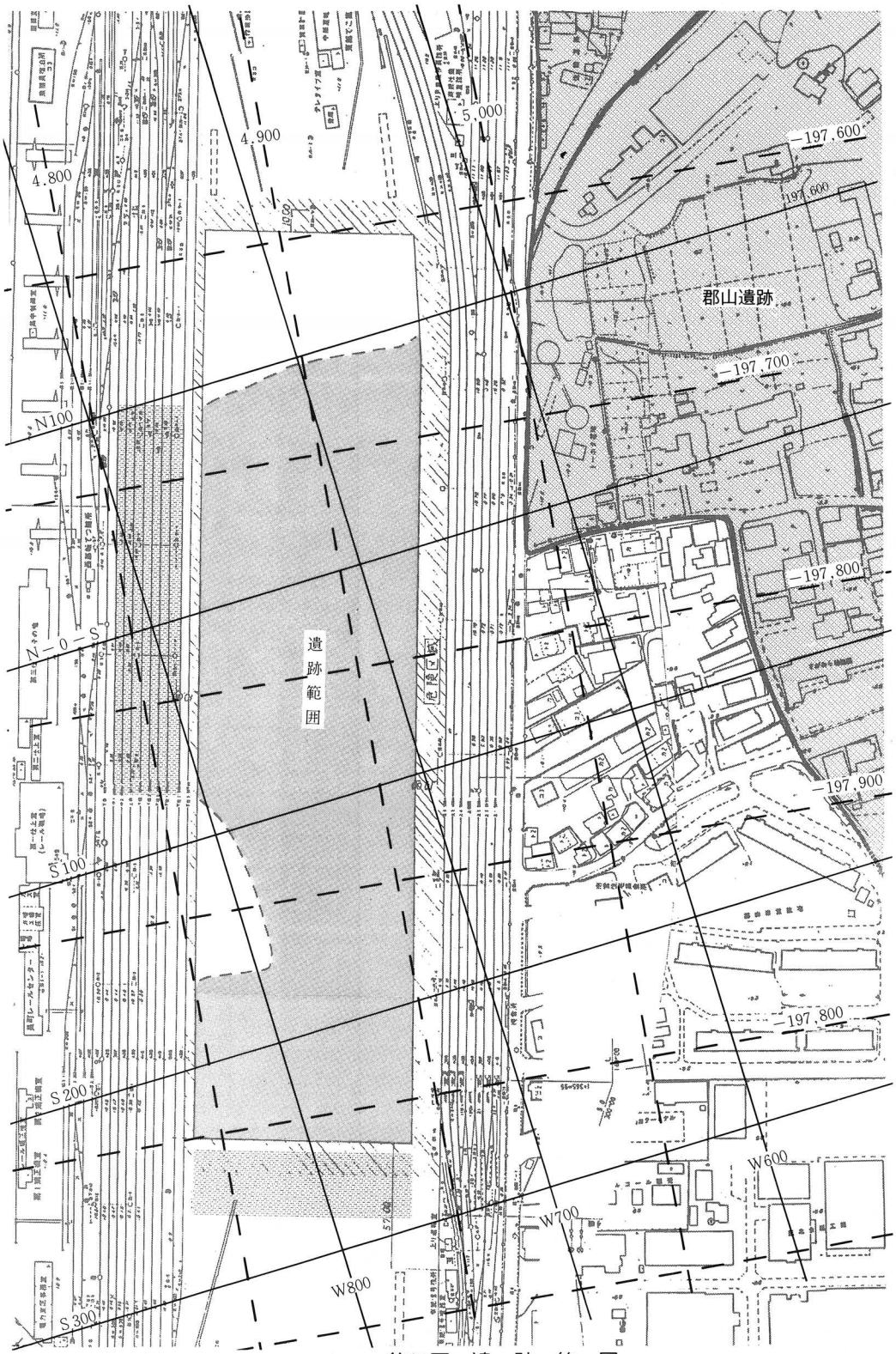
註1　第162集仙台平野の遺跡群XI、P27第12図

註2　〃　　、P394、まとめ

註3　平成3年度の調査ではE－6トレンチからは遺構が検出されなかった。しかし他調査区で遺構を検出面しているIV層が延びている。

註4　平成3年度の調査では郡山遺跡と比較してロクロ使用の土師器片の出土量がやや多いとしたが、今年度の調査ではほとんど出土せず、この地域全体の傾向と言えないようである。

(長島榮一、稲葉俊一)


4.800
4.900
5.000
−197.600
197.600
郡山遺跡
−197.700
N100
N−0−S
遺跡範囲
−197.800
−197.900
S100
S200
−197.800
W600
W700
W800
S300

第12図　遺　跡　範　囲

写真１
長町貸物ヤード跡地
全景（北より）

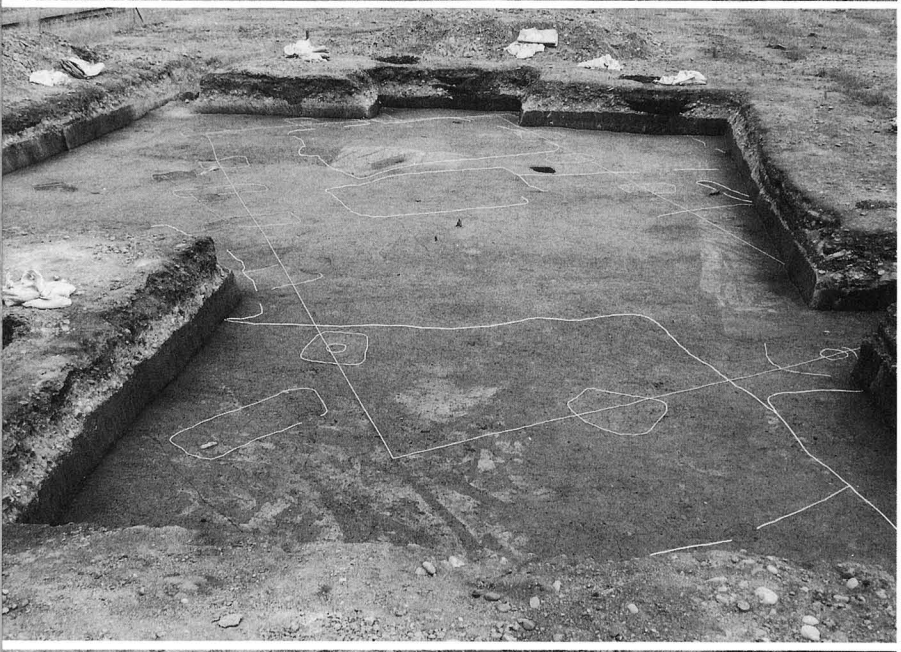


写真２
Ｗ－３トレンチ
ＳＢ－１など（南より）

写真３
Ｗ－３トレンチ
ＳＢ－２など（南より）

写真４
Ｗ－３トレンチ
Ｃ－16坏出土状況

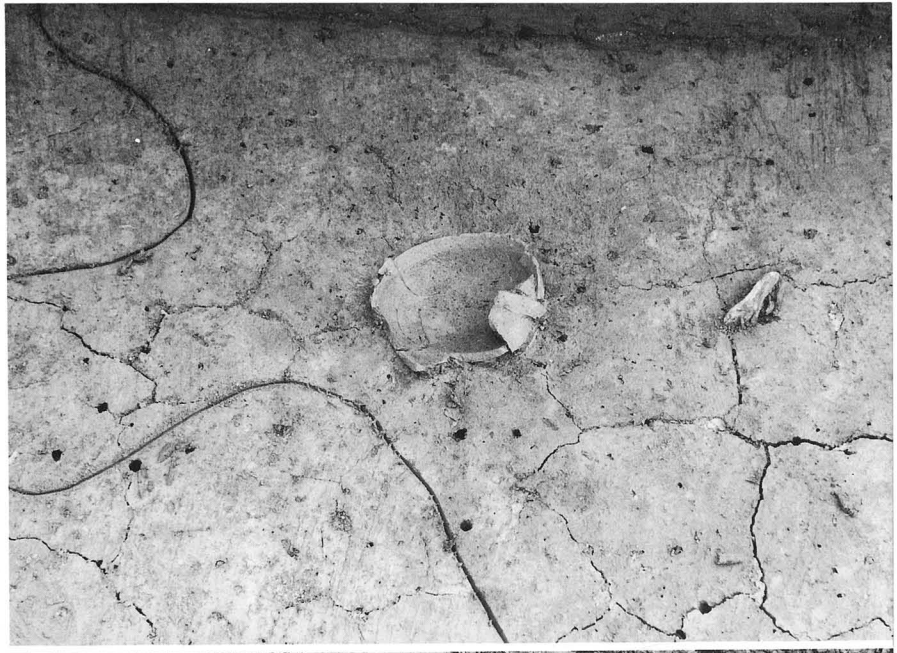


写真５
Ｃ－１ｂトレンチ
全景（南より）

写真６
Ｃ－１ｂトレンチ
Ｃ－10甕出土状況

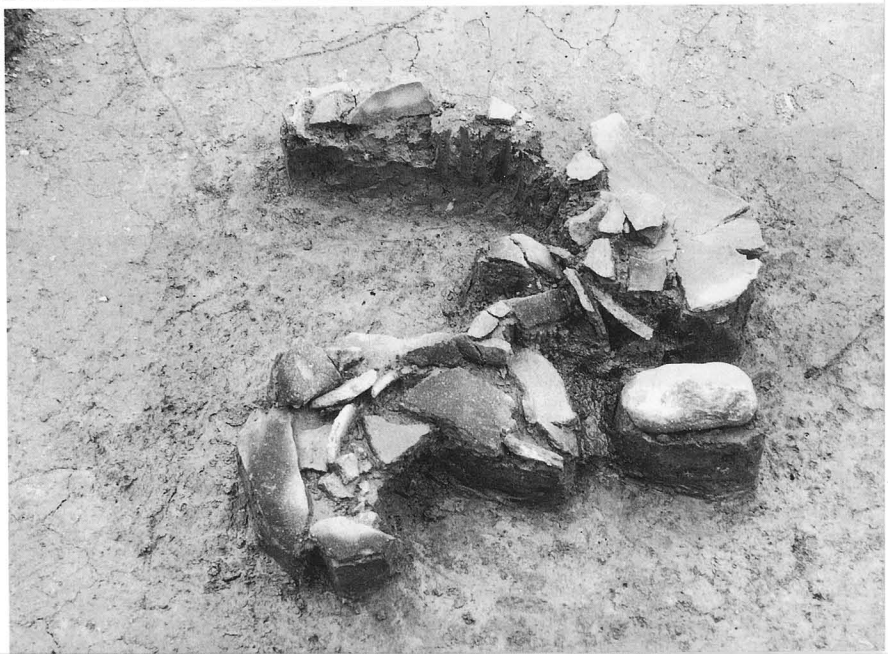


写真７　Ｗ－７～Ｅ－７補助トレン
全　　景（東より）

写真８　Ｃ－ｂトレンチ
全景（西より）

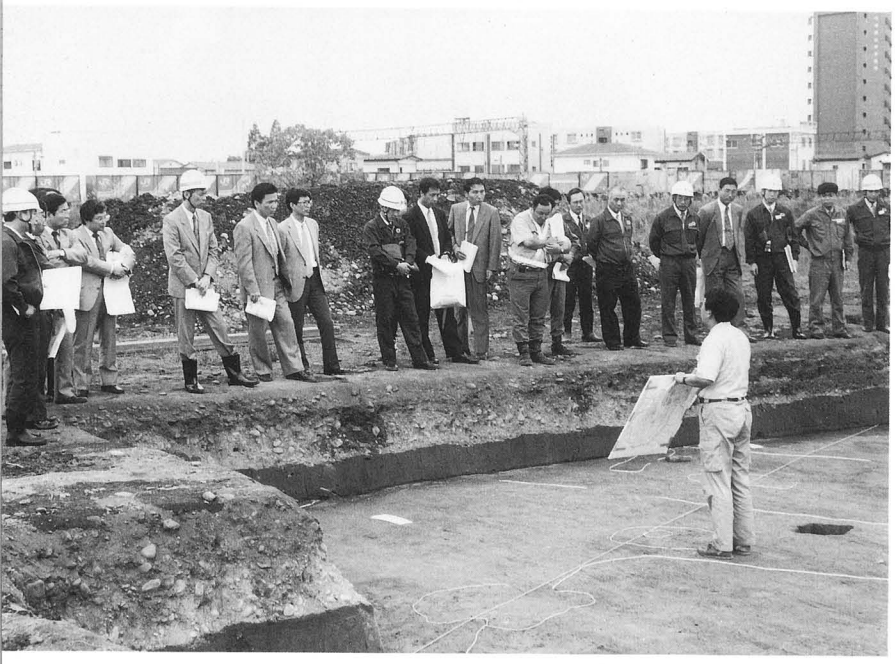
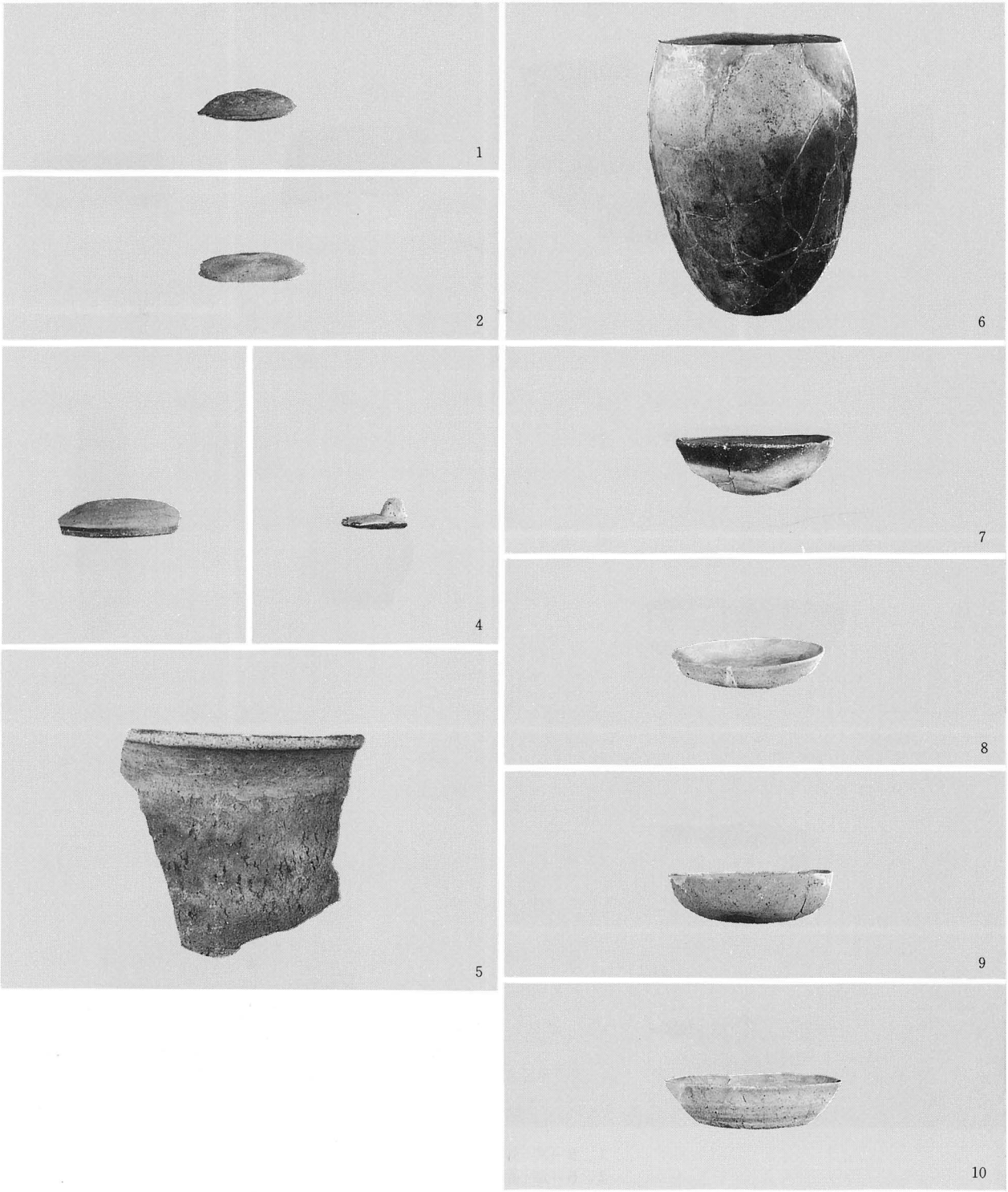
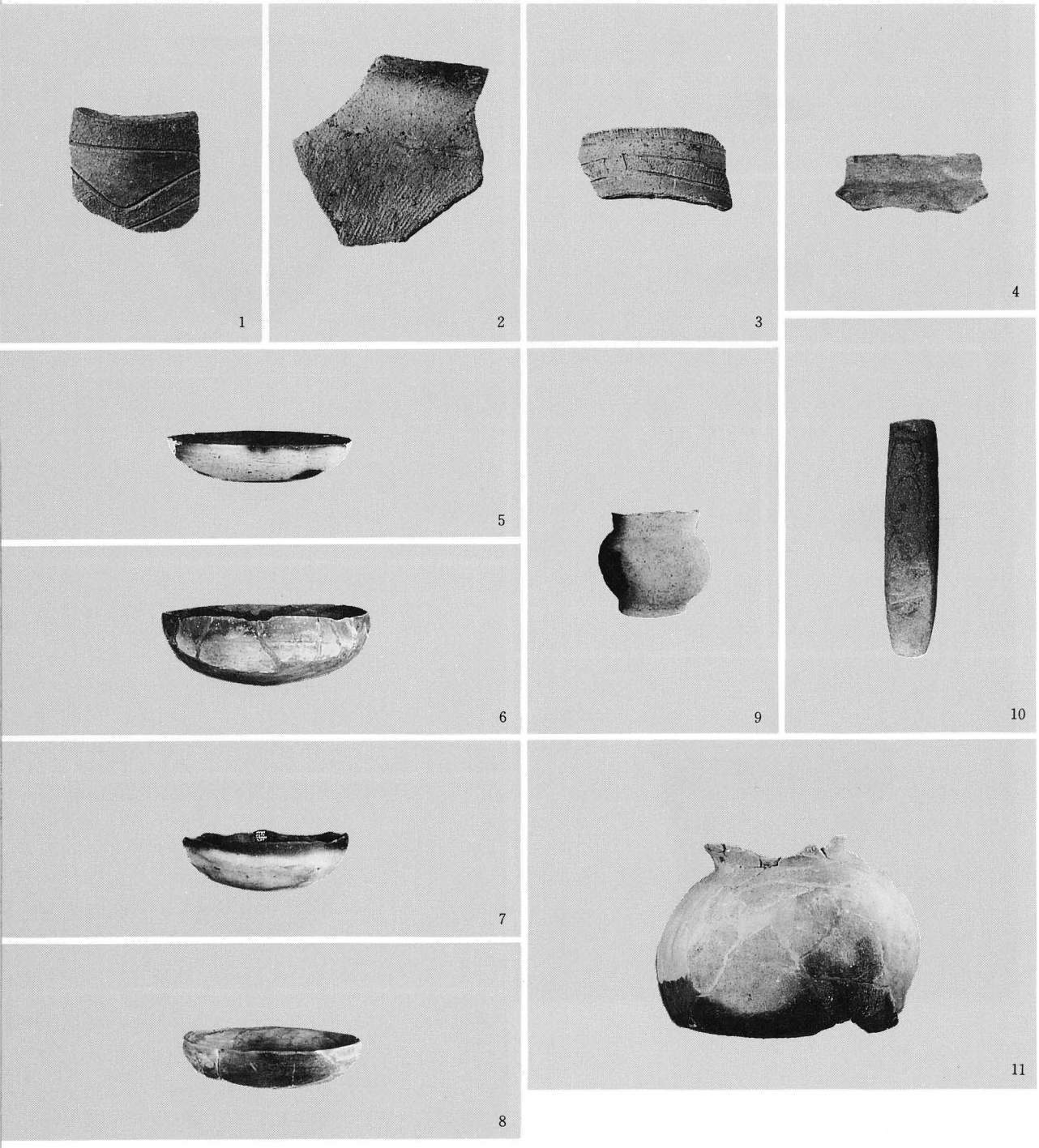


写真９　説明会風景



1．E－10　　6．C－70　甕
2．E－11　　7．C－14　坏
3．E－7　　8．C－15　坏
4．C－13　　9．C－16　坏
5．C－19　　10．E－9　坏

写真10　出土遺物（1）



1．B－9　弥生土器
2．B－10　弥生土器
3．B－11　弥生土器
4．B－12　弥生土器
5．C－9　坏
6．C－11　坏
7．C－6　坏
8．C－8　坏
9．C－12　壺
10．C－6　石斧
11．C－10　甕

写真11　出土遺物（2）

〔2〕 郡山遺跡

1．位置と環境

郡山遺跡は仙台市太白区郡山の地に位置し、東西800m、南北900mの72万m²に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの丘陵が迫まり、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。新しい時期（II期官衙）と古い時期（I期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。II期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれており、外郭施設は未だに不明瞭であるが内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向をとり、四町（428m）四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廂付建物の地に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廂付建物をはじめに大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまでで、官衙の機能が終了することなどである。

2．調査概要

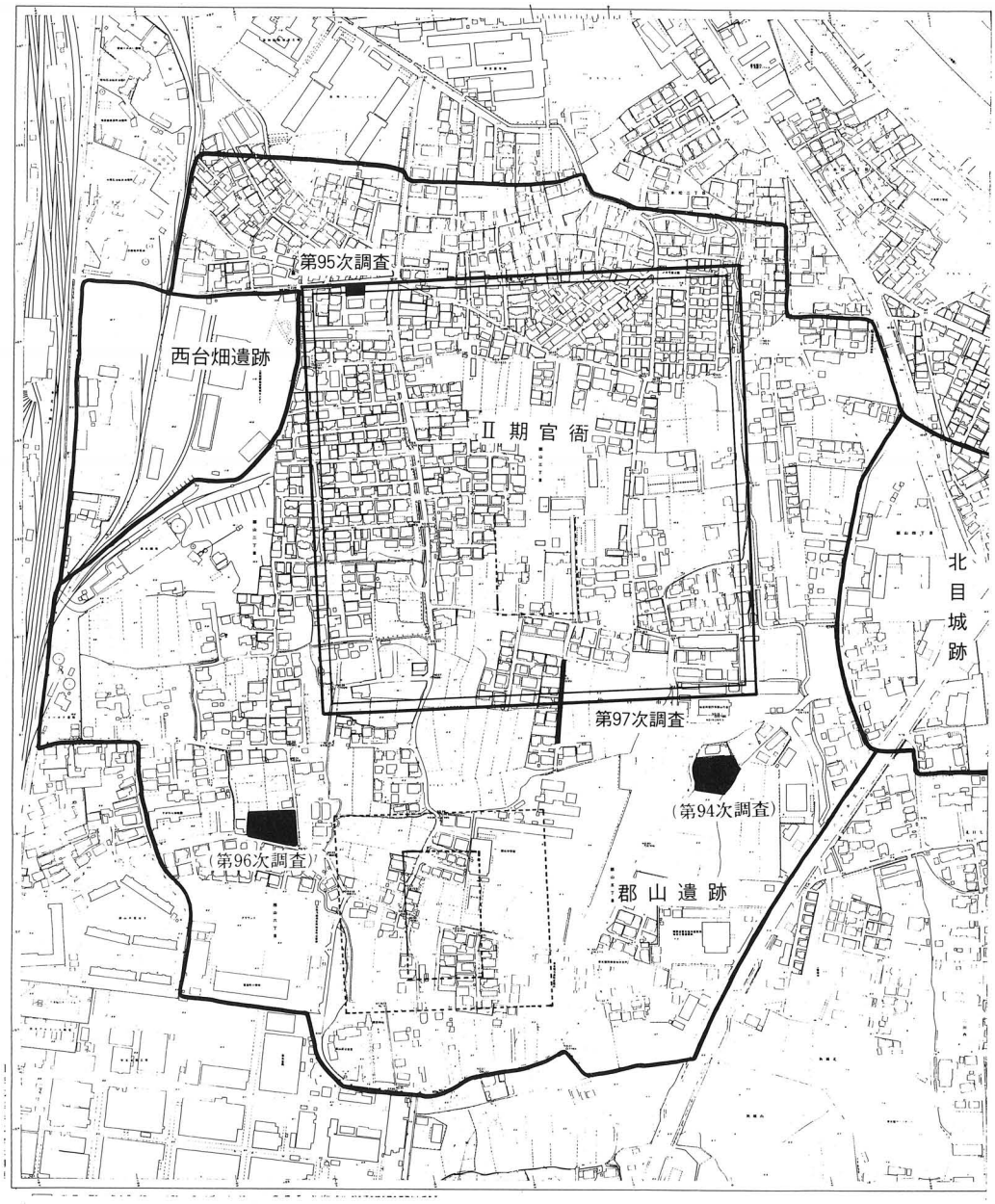
郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財報告書第171集「郡山遺跡Ⅻ－平成4年度発掘調査概報－」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

(1) 第95次調査

平成4年4月17日に太白区郡山2丁目地内の専用住宅新築に伴って、発掘届が提出された。申請地は方四町II期官衙の外郭北辺上にあり、材木列や大溝が検出されると想定された。平成4年7月25日から28日にかけて、住宅の建築部分をさけ6m×2mの南北に長い調査区を設定し、発掘調査を実施した。既に宅地化がされており、盛土と旧水田耕作土を除去しV層上面で上幅160cm以上、下幅55cm以上、深さ80cmの東西方向のSD617溝跡を検出した。検出位置や規模からII期官衙の外郭大溝と考えられる。

(2) 第97次調査

平成4年9月17日に太白区郡山5丁目地内の道路工事に伴って、発掘届が提出された。工事は幅1.5mで長さ76mの掘削を伴うもので、そのほぼ中央でII期官衙の外郭大溝と材木列を横断することがわかった。工事担当の太白区建設部建設課と協議した結果、材木列上の基礎工法を変更し遺構の保存を計った。しかし大溝は一部削平されることになったため、工事と併行して発掘調査を実施した。大溝であるSD35溝跡の上層より、羽口、瓦片が出土した。



第13図　郡山遺跡調査区位置図

II．発掘調査報告

－山田条里遺構－

1．調査に至る経過

仙台市南部に位置する太白区山田・鈎取地区周辺は近年来新興住宅地建設等の開発が急速に進められ、周辺環境が著しく変貌をとげている地域の一つである。この中にあって、当山田条里遺構周辺は各種の開発事業とは無縁に古来からの景観を残しつづけていた地域であった。しかし、上述の様に都市化への変容を余儀なくされ、更に都市近郊農業確立のため当遺跡のほぼ全域を包括する農業基盤総合整備事業の計画が進められつつあった。事業計画は名取川北岸の段丘上から国道286号線南側までの約45ha を対象とするもので、景観面からみても完全なる破壊が生じることになるため、仙台市教育委員会では関係機関との協議を行い今後の方針について検討を行った。結果として、今後の農業経営において条里型地割の現状保存は不可能な状況であるとの点から、当教育委員会では事業施行域全域を網羅した調査を実施していく方針をかためた。事前に地区全体の詳細な地形図を作成し、水路部分を中心とした調査を主体とし、条里遺構の積極的確証を得るための事前の記録保存を実施することとなった。整備事業に関しては地下遺構の破壊を最小限に止どめる工法の指導を併せて行っている。調査は事業の関係から３ブロック・３ケ年にわたることになり、平成元年度が初年度となる。

2．調査要項

遺 跡 名 称：山田条里遺構（仙台市文化財登録番号Ｃ－294）

所　　在　　地：宮城県仙台市太白区鈎取本町一丁目、鈎取字東根添・一本杉・谷地田、山田字田中前・谷地前・谷地浦・竹ノ内前・御殿・大石・新田堀下北・新田堀下中・新田堀下南

調 査 理 由：農村基盤総合整備事業

調査対象面積：約45ha

調 査 面 積：元年度－約3,060㎡、２年度－約3,700㎡、３年度－約1,100㎡、計約7,860㎡

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課

担 当 職 員：元年度　渡部弘美　佐藤　淳

２年度　渡部弘美　高倉祐一

３年度　渡部弘美　川名秀一

調 査 期 間：元年度　平成元年６月15日～12月26日

2年度　平成2年4月25日～12月14日

3年度　平成3年9月13日～12月17日

調 査 協 力：山田鈎取土地区画整理組合（理事長　相原　博）　花本建設株式会社

調査参加者：小田島智恵子　吉田八重子　渡部麗子　植野幸子　佐藤祥子　阿部八重子
佐藤ちよし　渡辺幸子　阿部洋子　阿部よね子　板橋静江　板橋孝子
大里ちよし　佐藤はつ　下山文子　阿部敬子　伊藤清美　阿部みはる
岩間文子　島崎なつ子　太田君子　清水けい子　佐藤とき子　宮城富子
菊地英子　小川良子　高橋とみ子　浅野由喜子　桜谷勇作　平間　栄
亀山カヨ　三浦たか子　金沢沙知子　川村　信　森ミヨノ　鈴木きぬ子
庄子かつえ　渡辺喜枝子　山田貞子　我妻美代子　関谷栄子　菅井清子
三浦芳子　浅見禮子　千田タイ子　伊藤律子　高橋良子　佐藤愛子
佐藤久栄　阿部幸夫　佐藤よし江　森　金三　高橋三千子　小沢さかえ
工藤まゆみ　佐藤二三子　佐藤　進　石森テツ　小松千代子　野中隆恵
三浦秀章　伊藤和彦　佐野　弘　相原善治

3．遺跡の位置と環境

1）位置と環境

山田条里遺構は仙台市の南西部、ＪＲ長町駅西方4㎞の地点、太白区山田・鈎取地内に所在する。遺跡北側では青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこの青葉山丘陵と高館丘陵の間にひろがる標高24～40ｍの「名取台地（山田面）」と称される河岸段丘の東端部に位置する。更に遺跡部分は名取川に流入する小河川の影響を受けた平坦な扇状地上（30～38ｍ）にあり、基盤となる段丘礫層上には粘土混じりの砂・シルトが厚く堆積している。部分的に微高地も確認されるが集落は丘陵麓・段丘端部を取り巻く様に位置している。遺跡の範囲は約66万㎡にも及び、現在は水田地帯となっている。

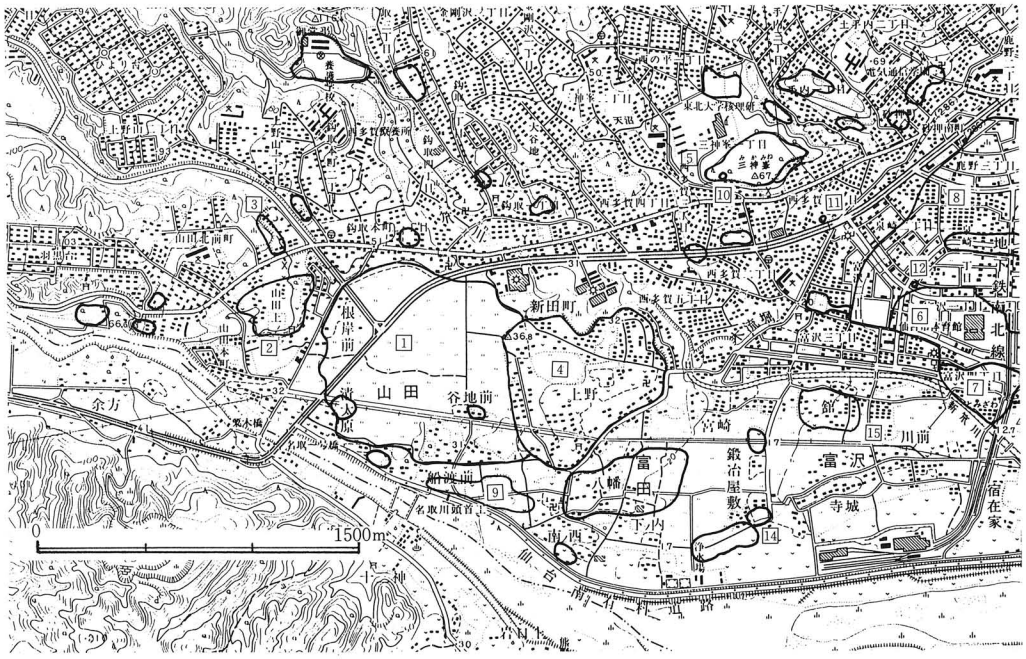
仙台市南西部の名取川北岸地域は、本遺跡をはじめ各時代の遺跡が数多く分布している所である。以下、各時代毎に周辺の遺跡を概観する。旧石器時代の遺跡としては、青葉山丘陵から南に張り出した西方の小支丘端部に山田上ノ台遺跡、北前遺跡がある。上町段丘に対比される河岸段丘面に位置し、前期及び後期旧石器時代の文化層が確認され、チョッピング・ツール・スクレイパー等各種の石器が検出されている。縄文時代になると丘陵地から沖積地面の広範囲な地域に分布がみられる。山田上ノ台、北前、上野、三神峯、図外になるが六反田遺跡がある。六反田遺跡を除く4遺跡は台地上に位置し、三神峯遺跡では早期～中期の遺構・遺物が発見され、山田上ノ台遺跡では中期の住居跡群が確認されている。六反田遺跡は笊川右岸の自然堤防上に位置し、地表下2ｍの地点で中・後期の遺構・遺物が検出されている。弥生時代としては

東方の富沢遺跡で桝形囲式・十三塚式期の水田跡が重層かつ広範囲に発見されている。また、当遺跡南側には船渡前遺跡がある。古墳時代の遺跡としては丘陵頂・裾部に三神峯、裏町古墳などがみられ、笊川を挟む富沢・大野田地区の自然堤防上には教塚古墳、春日社古墳、王ノ檀古墳などが知られている。奈良・平安時代では、前述の富沢・大野田地区の自然堤防上に立地する山口・六反田遺跡などで集落が確認されているほか、富沢遺跡では水田跡が発見されている。また、東側には鍛冶屋敷A・B遺跡、八幡西遺跡などがある。中世では東方に戦国時代の富沢遺跡跡がある。なお、名取川南岸の柳生地区には板碑群が数多く点在している。

2) 遺跡の概要

山田条里遺構は整然と区画された土地割が東西600m・南北800m程の範囲に看取され、調査とは別に景観等から条里制に起因するものと考えられてきた。研究者等に周知されていた感はあるが仙台市では昭和55年以降での登録となっている。仙台市内においては数少ない条里型の土地割がみられる地域であったが今回の整備事業によって完全なる景観面での消滅となる。

当遺構は名取川左岸の河岸段丘に位置し、北西から南東へかけて1㎞で標高差8.5m程の緩斜面となっている。北西方向から鈎取堀・中江堀の水路が東流南下し名取川へ続いている。条里型の土地割が良好に看取される地点は国道286号線南側で、大畦が約110m（約1町）間隔で東



1 山田条里遺構	4 上野遺跡	7 下ノ内遺跡	10 三神峯古墳	13 鍛冶屋敷A遺跡
2 山田上ノ台遺跡	5 三神峯遺跡	8 富沢遺跡	11 裏町古墳	14 鍛冶屋敷B遺跡
3 北前遺跡	6 山口遺跡	9 船渡前遺跡	12 教塚古墳	15 富沢館跡

図1　周辺の遺跡

西１条・南北３条確認され、西側及び南側では東西南北に大畦は延びるが蛇行が著しく方格の地割からはやや逸脱している。畦畔の方向は蛇行等崩れている地点を除いて正方位（真北）を向く。区割内は長地・半折に類別出来るものはなく、個々内において方形区割となっている。なお、南半部及び西側では地形に沿った（微高地・旧河道）区割がみられる。

現在、当遺構内において字名として新田・谷地前・谷地浦・田中前・汚田通の地名がみられるが、地理的条件に符合する名称や新田開発にかかわるものなどで、条里制に関するものはみられない。

なお、当遺跡南側の東西地点には奈良・平安時代の遺物包含地である、竹ノ内前遺跡・谷地前遺跡が包含されている。

４．調査の方法と経過

調査区は水路設置部分を中心とするが、元年度を除き２・３年度では遺構の広がり及び当遺跡の性格把握のために小トレンチを随所に設けた。なお、当遺構全体を網羅する1,000分の１の地形図を作成したが、水口調査（水遣り図）を元年・２年度で実施し作成した。調査区は性格上長大になるが元年度では幅３ｍ、２・３年度では2.5ｍとし、10ｍを単位としたグリッドを設定した。基準杭は平面直角座標系Ｘに乗せ、名称は座標値のメートル部分を使用している。ただし、２年度のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチは任意の設定杭となっておりＡではＮ－８°－Ｅ、Ｂ・ＣではＮ－36°－Ｗ、ＤではＮ－82°－Ｗの傾きがある。

元年度調査は遺跡東端部分となる。調査区の１層部分を重機で除去し、後人力で南側から北側へ遺構確認を進めた。東壁部に側溝を設け断面観察を併せて行っている。基本層１・２・３層が確認されすべて水田土壌と考えられたが、撹拌等で遺存状況は全体的にわるい。部分的な確認ではあるが２・３層で水田跡を検出している。５層面では倒木痕跡・河川跡が数多く検出されている。プラント・オパール分析資料をＸ42・Ｘ428・Ｘ580の３地点で採取している。

２年度調査は遺跡中央部及び東南端部となる。計26本のトレンチを設定したが、Ａトレンチ東部は沢となり調査を割愛している。基本層は１・２・３・４・５層が確認された。１～３層は水田土壌と考えれ、部分的ではあるが２・３層で水田跡を検出している。４層中には少量ではあるが縄文土器・石器が含まれている。調査区中央部は周辺より若干微高地となり堀跡・掘立柱建物跡・陥し穴が確認されている。４・５面では倒木痕跡・河川跡が検出されている。プラント・オパール分析資料を７・８・Ｂ・Ｄトレンチの４地点で採取している。

３年度調査は遺跡南端部となる。計20箇所のトレンチを設定したが、東南側では１層直下が５層面となり後世の削平を受けた地点があり調査を割愛した部分がある。基本層は１～５層が確認された。部分的ではあるが２・３層で水田跡を確認している。４・５面では倒木痕跡・河川跡が検出されている。プラント・オパール分析資料を20トレンチＸ513地点で採取している。

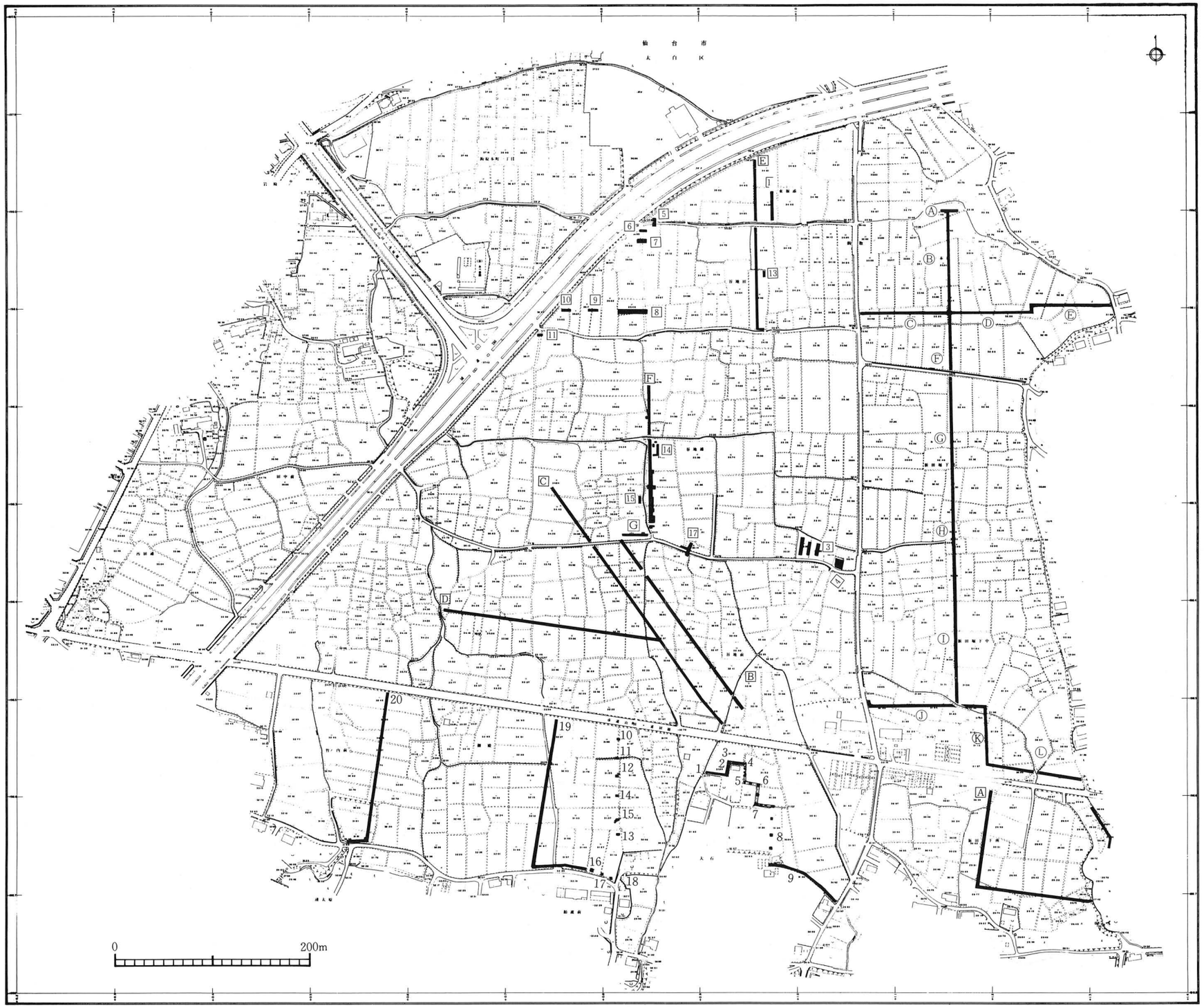


図２　山田条里遺構全体図・調査区配置図

5．基本層位

調査区が広範囲にわたるため層序・色調等に違いはみられるが、水田地域を中心にして、大別して５枚の層位を確認した。調査区北西部では河川堆積物と考えられる砂層が広い範囲に分布している。５層上面までの層厚は60cm前後である。

１層はａ～ｄに細分した。褐色系の土壌である。層下部に酸化鉄の集積層が確認されるものもあるが、２層以下では確認されない。

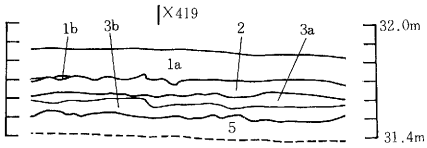
２層はａ・ｂに細分した。層厚は10cm前後である。色調は東側から西側へかけて黒色が強くなり粘性も増す。小片ではあるが陶磁器類が出土しており、層の時期は近世頃かと考えられる。

３層はａ・ｂ・ｃに細分した。上層からの削平で遺存しない部分もみられるが、最大で20cm程の層厚をもつ。黄色褐色系の土壌で、下層につれて色調が若干暗くなる。３ａ・３ｂ層中にブロック及び斑に灰白色火山灰が含まれる。水田跡に関する遺構の多くはこの面が確認面となっている。層中には小片となった土師器・須恵器が含まれる。層の時期は火山灰及び土器類から平安時代頃の時期が想定される。

４層は黒褐色系の土壌で、調査区南部につれて層厚を増し最大で15cm程を計る。少量ではあるが縄文土器・石器が包含される。西側部のみの確認で元年度調査地点では確認されていない。

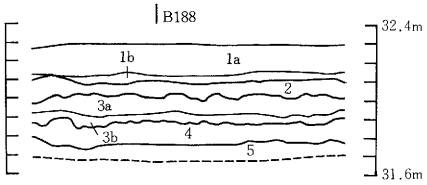
５層が段丘堆積物上部の層で褐色・橙色系の土壌となり下部につれて砂礫となり地表下約１ｍ程で礫層となる。

元年度・Ｉ地点



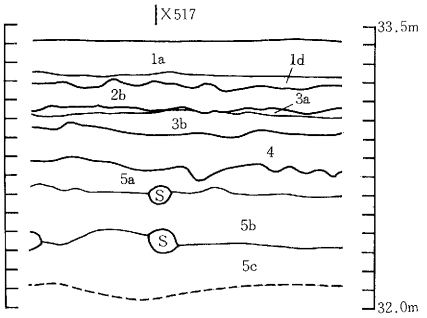
層	土色		土性	備考
1a	褐灰色	10YR4/1	粘土	現代作土
1b	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	
2	黒色	10YR2/1	粘土	
3a	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	
3b	黒褐色	10YR3/1	粘土	
5	褐色	10YR4/6	粘土	

２年度・Ｂトレンチ



層	土色		土性	備考
1a	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	現代作土
1b	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	
2	黒褐色	10YR3/1	粘土	下層をまきあげている
3a	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	
3b	黒褐色	10YR3/2	粘土	
4	黒褐色	10YR2/3	砂質粘土	
5	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	

３年度・20トレンチ



層	土色		土性	備考
1a	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	下部に酸化鉄集積層、現代作土
1d	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	
2b	にぶい黄灰色	10YR4/3	粘土	
3a	灰黄褐色	10YR5/2	砂質粘土	灰白色火山灰を含む
3b	灰黄褐色	10YR4/2	砂質粘土	層上部に灰白色火山灰を含む
4	黒色	7.5YR2/1	砂質粘土	炭化物、小礫、縄文土器片を含む
5a	黒褐色	7.5YR3/2	砂質粘土	
5b	黒褐色	7.5YR2/2	砂	
5c	オリーブ黒色	5Y3/2	砂	細石、礫（3～4cm）の層

図3　基本層位

6．発見遺構と出土遺物

1）　平成元年度調査の成果

調査対象地域は当遺跡東側部に位置する。調査区は東西南北に延びる長大なトレンチとなるため、便宜的に北側から100mの長さを単位とした地点（A～L）を設定し調査を進めた。基本層位は調査範囲が広大にわたるため細部で統一が計れない地点もあるが、大別で4枚の層を確認した。発見遺構として、水田跡・溝跡・土坑・河川跡・倒木痕跡がある。以下、調査地点毎に発見された遺構・遺物について記述して行く。

①A・B地点

A地点は調査時に計画変更がなされ、遺構確認のみにとどまり、詳細は明らかでない。

【3a層面検出遺構】

SD36溝跡＝遺構確認のみ。直線状に延びる。幅50～70cm、溝方向はN－29°－Wである。

SD37溝跡＝遺構確認のみ。直線状に延びる。幅80～100cm、溝方向はN－28°－Wである。

SD38溝跡＝遺構確認のみ。直線状に延びる。幅70～90cm、溝方向はN－30°－Wである。

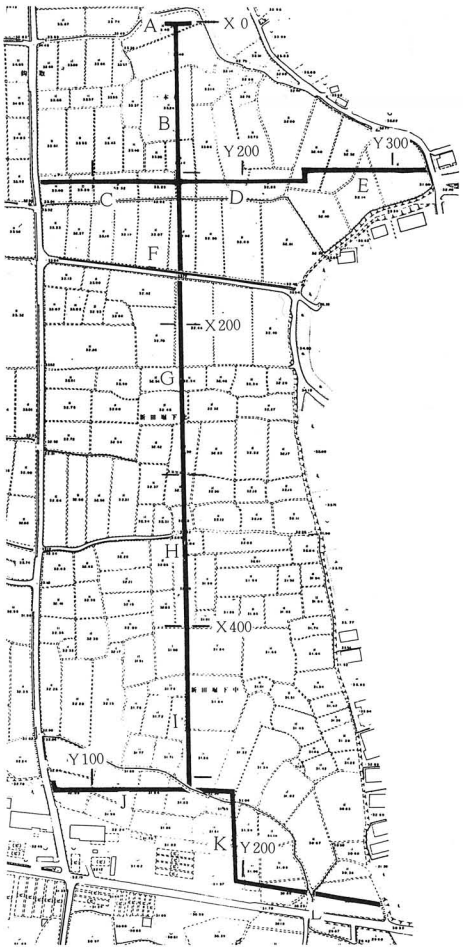


図4　平成元年度調査区

SD22溝跡＝直線状に延びる。上端幅39～65cm、下端幅19～35cm、深さ10～14cmを計る。断面形はゆるい皿状で、底面はほぼ平坦である。底面高に差はない。堆積土は3層確認し、黒色系及び褐色系のシルトである。遺物はない。溝方向はN－58°－Eである。

SD24溝跡＝直線状に延びる。上端幅90～110cm、下端幅42～72cm、深さ6～10cmを計る。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。底面高に差はない。堆積土は1層で、黒褐色のシルトである。遺物には石器がある。溝方向はN－34°－Wである。

SD26溝跡＝直線状に延びる。上端幅77～95cm、下端幅29～43cm、深さ17～24cmを計る。断面形はゆるい皿状で、底面はほぼ平坦である。底面高は西側がやや低い。堆積土は2層確認し、黒色及び褐色系のシルトである。遺物はない。溝方向はN－63°－Eである。

【5層面検出遺構】

SK17土坑＝遺構確認のみ。平面形は不整の長円形で、長軸165cm、短軸100cmを計る。確認

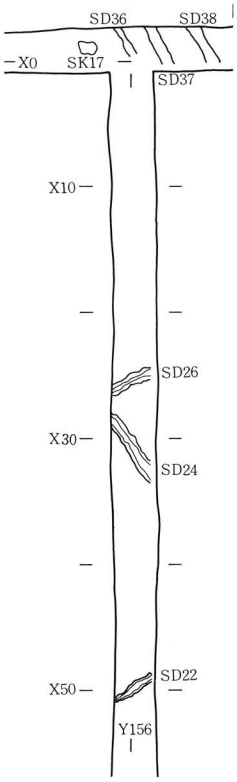
面で縄文土器、石器が出土している。

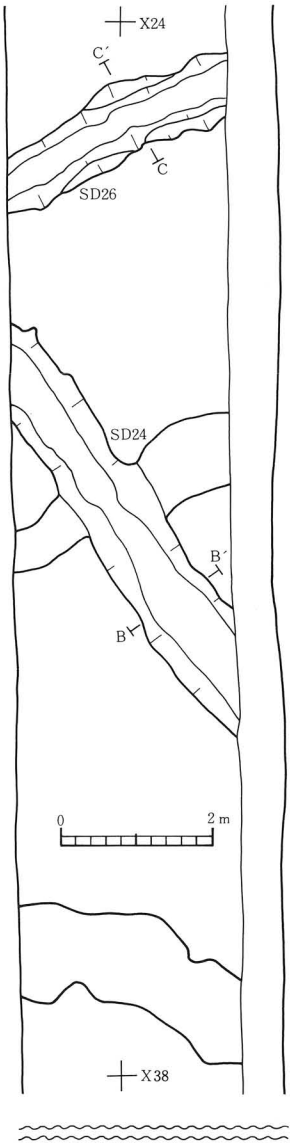
ＳＤ27・28・29・30・31・32溝跡＝溝跡は平面形態が直線状・蛇行するものがあり、壁及び底面が不定で凹凸もみられ、堆積土も砂が主体を占め、当溝跡は河川跡と考えられる。ＳＤ30では堆積土上層で石器が出土している。

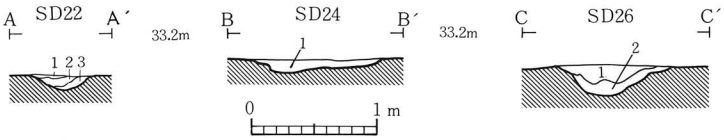
倒木痕跡＝不整形及び馬蹄形の落ち込みを計８基確認した。すべてを掘り上げていないが、形状及び堆積土の状況から倒木痕跡と考えた。関連遺物はない。

○Ａ・Ｂ地点のまとめ

３ａ層検出の溝跡群は、検出長が短く断定には難はあるが、形状・方向から一連のものと考えられる。ＳＤ24・36・37・38は長軸方向がＮ－30°－Ｗ前後におさまり、ＳＤ22・26もＮ－60°－Ｅ前後におさまる。Ａ地点の溝跡は３条平行して位置するが新旧及び同時期の関係は不明である。溝跡間の距離はＳＤ22と26で20.5m程、ＳＤ24とＳＤ36で19m程である。各溝跡の底面はほぼ平坦で比高差が小さいが、溝跡間でみると南側にゆるやかに傾斜している。堆積土下部に基本層３ａ層（灰白色火山灰を含む水田土壌）と同等の土がみられ、溝跡の時期は10世紀前半以降、大きく平安時代とみておきたい。３ａ層は水田土壌と考えられ、







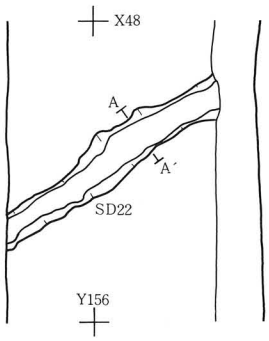


図５　Ｘ０～50地点発見遺構

	層	土　色	土　性	備　考
ＳＤ22	1	黒　褐　色　10ＹＲ3/1	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	2	黒　色　7.5ＹＲ2/1	粘土質シルト	黄褐色小ブロックを含む
	3	にぶい黄褐色　10ＹＲ4/3	粘土質シルト	基本層３ａ層と考えられる
ＳＤ24	1	黒　褐　色　10ＹＲ3/2	シ ル ト	黄褐色ブロックを密に含む
ＳＤ26	1	黒　色　7.5ＹＲ2/1	シ ル ト	基本層３ａ層を少量含む
	2	にぶい黄橙色　10ＹＲ7/4	シ ル ト	基本層３ａ層と考えられる

これらの溝跡は水路の性格をもつものと考えられる。

②C地点

【5層面検出遺構】

2層水田跡＝5層上面で東西及び南北に延びる幅75～120cm程の畦畔状の高まりと段を確認した。状況から擬似畦畔B（斎野他：1987）と考えられ、直上の2層（黒褐色10YR3/1粘土）に畦畔が存在していたと判断した。擬似畦畔（以後、畦畔）は5条、水田面は5面検出され、おおよその区画が判明するものが一面ある。検出範囲が狭いため畦畔方向が特定できないが畦畔1はN－40°－W、畦畔2はN－40°－Eである。水田区画は方形を基調とするが、方格区画にはなりえない。水田1は約18.5m²程の面積をもつ。耕作土は4～18cm程残存し、下面には凹凸がみられる。遺物としては土師器片がある。

SK11土坑＝平面形は不整の長円形で、長軸182cm、短軸138cm、深さ28cmを計る。断面はU字形である。堆積土は基本層1及び4層の混成層で、褐色系の土である。遺物として板状の木片が底面より出土している。

SK12土坑＝平面形は不整の円形と考えられる。東西軸205cm、南北軸188cmまで計れ、深さ35cmである。断面はゆるいU字形である。堆積土は褐灰白色の砂質粘土である。遺物には石器、陶器、磁器がある。

SK13土坑＝平面形は不整な長円形と考えられる。長軸425cmまで確認した。すべてを掘り上げていないが、西側部断面はU字形で、深さ46cmを計る。堆積土は1層で基本層4層を含む褐灰白色の粘土である。遺物として土師器・陶器がある。

SK14土坑＝平面形は周縁が歪んだ円形で、東西軸142cm、深さ25cmである。断面は皿状であ

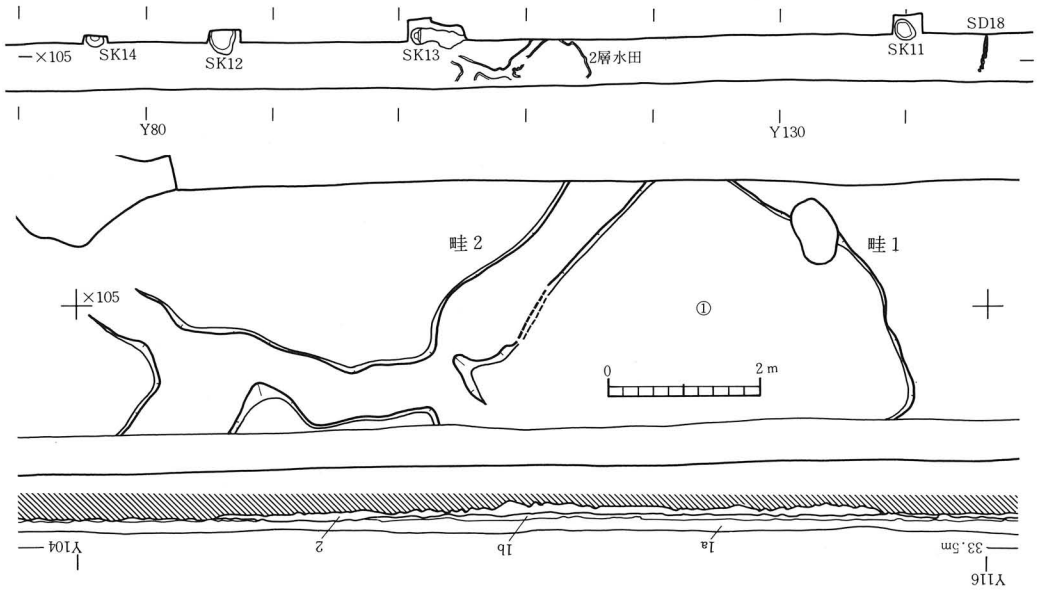


図6　C地点遺構配置・2層水田跡

る。堆積土は１層で褐灰白色の砂質粘土である。遺物はない。

ＳＤ18溝跡＝残存状況が不良で南側はピット状に連なる。上端幅15～28cm、下端幅８～22cm、深さ１～３cmを計る。断面は箱形である。堆積土は１層で黒褐色の粘土である。軸方向はＮ－11°－Ｅである。遺物はない。

倒木痕跡＝不整形及び馬蹄形のものを２基確認している。遺物はない。

○Ｃ地点のまとめ

２層水田跡はＸ105・Ｙ104～115の地点で検出されたが、南壁断面を観察すると水田作土はＹ130から調査区外の西側へ広がっている。所属時期は遺物がなく不明であるが、上層の１ｂ層中に近世頃の陶器・磁器が含まれており、近世以前としておきたい。

土坑及び溝跡は５層面確認であるが上層が１層であり、時期は新しいものかと考えた。性格は不明である。

③Ｄ地点

【５層面検出遺構】

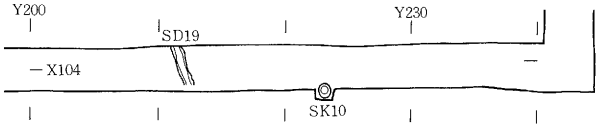


図７　Ｄ地点遺構配置

ＳＫ10土坑＝平面形はほぼ円形で、南北軸104cm、東西軸92cm、深さ26cmを計る。断面形はＵ字状である。堆積土は炭化物層も含めて７層確認した。褐色系の粘土質シルトである。堆積層中央に灰白色火山灰がレンズ状にみられる。壁の一部が焼けて赤変し、底面には２～３㎜の厚さの炭化物面がみられる。遺物はない。

ＳＤ19溝跡＝直線的に延びる。上端幅72～88cm、下端幅38～58cm、深さ21～29cmを計る。断面形はきついＵ字状で、底面はほぼ平坦である。底面高に差はない。堆積土は１層で黒色の粘土で、層自体が撹拌状態になっている。遺物はない。溝方向はＮ－17°－Ｗである。ＳＤ40溝跡と重複関係にあり、すべてが堆積土内におさまっている。

ＳＤ40溝跡＝Ｘ198～222内に位置する幅広の溝跡で堆積土底面には砂層もみられ、河川跡と考えられた。底面で倒木痕跡を２基検出している。

④Ｅ地点

【１ａ層面検出遺構】

ＳＫ15土坑＝平面形はほぼ円形で、径90cm、深さ23cmを計る。断面形はゆるいＵ字状である。堆積土は褐色系の粘土を２層確認した。人為堆積と考えられる。遺物はない。

【５層面検出遺構】

ＳＤ20溝跡＝平面・断面図が紛失し詳細が不明である。Ｘ94Ｙ316地点に位置する。直線状に延び、上端幅70cm、下端幅35cm、深さ35cm程を計る。遺物はない。

５層面検出の段差＝Ｘ104Ｙ241とＸ94Ｙ260地点において直線状に延びる段差を２条確認し

た。直上層の３ａ層(灰黄褐色10ＹＲ4/2粘土質シルト）が段差に堆積している。段差１の方向はＮ－50°－Ｗで、段差２はＮ－35°－Ｅである。３ａ層での遺物はない。

倒木痕跡＝１基確認した。さらに、同等のものか凹地を２ケ所確認している。

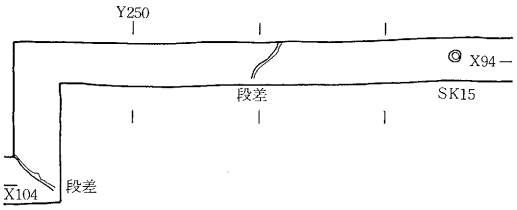


図８　Ｅ地点遺構配置

○Ｅ地点のまとめ

３ａ層の分布はＹ240（段差１）～280地点である。５層面確認の段差は上層の２層によって削平された畦畔部とも考えられ、断定はしがたいが擬似畦畔Ｂとしての３ａ層水田跡にあたるものかと考えられる。出土遺物はないが、３ａ層である点から時期は平安時代と考えておきたい。

⑤Ｆ・Ｇ地点

【５層面検出遺構】

ＳＫ16土坑＝東壁に位置し全容は不明である。平面形は不整円形を呈すると考えられる。南北ラインで190cm、深さ15cmを計る。断面は浅い皿状である。堆積土は１層で灰褐色の粘土である。遺物はない。

ＳＫ18土坑＝平面形は不整の方形である。長軸70cm、短軸50cm、深さ８cmを計る。断面は浅い皿状である。堆積土は１層で、褐灰色の粘土である。遺物はない。

ＳＫ19土坑＝平面形は不整の長円形である。南側に凸部がみられ２基の土坑が重複していた可能性もあるが明らかではない。長軸177cm、短軸65cm、深さは最大で30cmを計る。断面は逆台形で底面は平坦である。堆積土は１層で、灰褐色のシルト質粘土である。遺物はない。

ＳＫ21土坑＝平面形は不整の長円形である。長軸119cm、短軸58cm、深さ20cmを計る。底面中央部に凸部があり断面はゆるいＷ形を呈する。堆積土は１層で、暗褐色の粘土質シルトである。遺物はない。ＳＤ35溝跡を切っている。

ＳＸ２竪穴遺構＝調査区東・南壁に位置し全容は不明である。平面形は角張った円形を呈するものかと考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さ17cmを計る。堆積土は１層で、にぶい黄褐色の粘土質の砂である。遺物はない。

ＳＤ17・33・35溝跡＝平面・断面状況等から河川跡と考えられた。ＳＤ33では流木が底面より出土している。

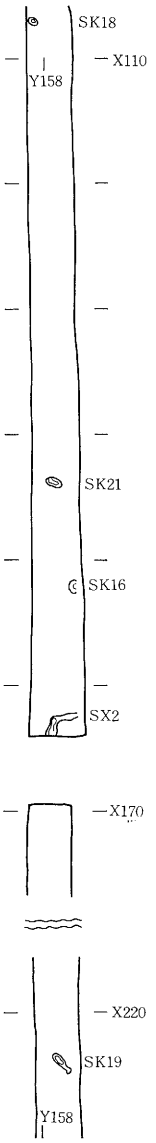


図９　Ｆ・Ｇ地点

倒木痕跡＝不整形および馬蹄形の落ち込みを８基検出した。遺物はない。

⑥Ｈ・Ｉ地点

【２層面検出遺構】

ＳＫ９土坑＝平面形は長円形で、長軸125cm、短軸87cm、深さ34cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は１層で、褐色系のシルトである。人為堆積と考えられる。遺物はない。

【３ｂ層面検出遺構】

ＳＫ７土坑＝平面形は不整の円形で、長軸144cm、短軸120cm、深さ53cmを計る。断面はＵ字状である。堆積土は１層で基本層１・３・４層と考えられる土が混在している。人為堆積と考えられる。遺物はない。

ＳＫ８土坑＝平面形はほぼ円形である。径120cm程、深さ16cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は１層で基本層１・３層と考えられる土が混在している。人為堆積と考えられる。遺物として磁器碗・土師器片がある。

【５層面検出遺構】

３ｂ層水田跡＝Ｘ436Ｙ162地点において東西に直線状に延びる段差を確認した。状況から段上部に３ｂ層の畦畔が存在していたものと考えた。周辺の３ｂ層下面は凹凸が特に顕著である。段差の方向はＥ－４°－Ｓである。遺物として地点は若干離れるがＸ450～460地点で土師器が出土している。

倒木痕跡＝４基確認した。Ｘ462地点では倒木痕跡検出時に小片となった縄文土器が出土している。

○Ｈ・Ｉ地点のまとめ

５層面において畦畔と考えられる遺構を確認し３ｂ層水田跡の存在が窺えたが、当地点以外では３ｂ層が上層の削平を受け極めて薄い層となっている。断面観察ではあるが層底面に凹凸がみられる地点も多く、３ｃ層にまで達する筋状の落ち込みもみられ、断定は難しいが広い範囲に３ｂ層水田跡が存在していた可能性は高い。

２層及び３ｂ層検出の土坑は堆積土の状況からみて極めて新しいものと考えられる。

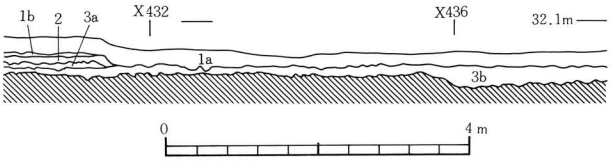


図10　Ｈ・Ｉ地点・３ｂ層段差

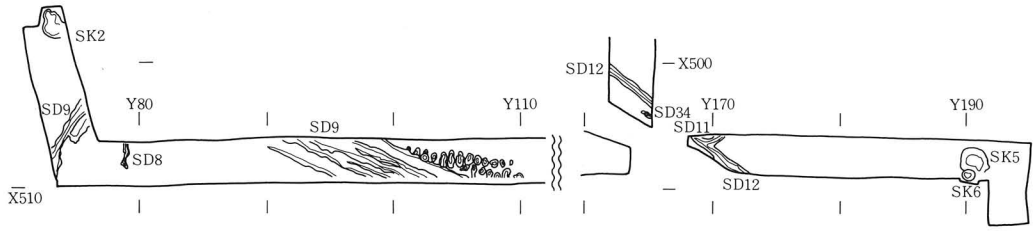
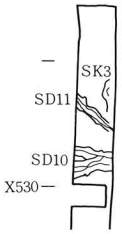


図11　Ｊ・Ｋ地点遺構配置



⑦Ｊ・Ｋ地点

【５層面検出遺構】

ＳＫ２土坑＝平面形は円形を基調とする不整形である。長軸270cm、短軸162cm、深さは最大で18cmを計る。断面は皿状で、底面には凹凸や緩い傾斜がみられる。堆積土は４層確認し、褐色系の粘土質シルトである。遺物はない。

ＳＫ３土坑＝東壁部に位置し全容は不明である。平面形は長円形を呈すると考えられ、長軸250cm程、深さ40cmを計る。断面は皿状である。堆積土は２層確認し、褐色系のシルトである。遺物はない。

ＳＫ５土坑＝平面形は方形を基調とする不整形である。東西軸210cm、南北軸190cm、深さ55cmを計る。断面は底面がやや丸い逆台形である。堆積土は１層で黄褐色系の粘土及びシルトである。人為堆積と考えられる。遺物はない。ＳＫ６を切っている。

ＳＫ６土坑＝平面形はやや方形の長円形である。長軸110cm、短軸80cm、深さ25cmを計る。断面は逆台形である。堆積土は２層確認し、黒褐色系の粘土である。人為堆積と考えられる。遺物はない。

ＳＤ７溝跡＝直線状に延びる。上端幅150cm程を計るが、東側55～70cm幅分が一段低く溝筋も通り主体は東側部と考えられる。深さ10cm程で、断面はゆるい逆台形である。堆積土は１層で暗褐色の粘土質シルトである。底面はほぼ平坦で比高差はない。遺物はない。溝方向はＮ－33°－Ｅである。

ＳＤ８溝跡＝やや蛇行するが直線的に延びる。上端幅25cm、下端幅13cm、深さ７cm程で、断面は逆台形である。堆積土は１層で暗褐色の粘土質シルトである。溝方向はほぼ真北である。遺物はない。

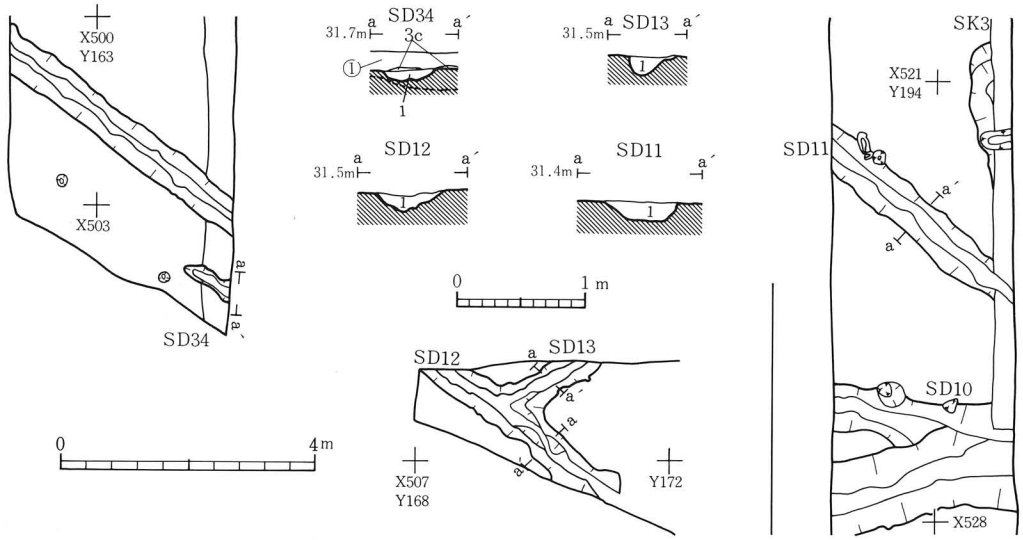
ＳＤ９溝跡＝直線状に延びる。上端幅約４cmを計り、深さは最大で25cmである。断面はゆるい皿状で、壁面は波状で段が筋状に走る。堆積土は３層確認し、暗褐色のシルトである。遺物として石器・陶器がある。土坑群を切っている。溝方向はＮ－66°－Ｗである。

ＳＤ10溝跡＝重複関係等規模が確認されず全容は不明である。確認された面のみが凹地とな

り南北に緩やかに広がっていたものと考えられる。深さは最大で26cmを計る。堆積土は１層で暗褐色のシルトである。遺物はない。ＳＫ３を切り、ＳＤ11を切っている。

ＳＤ11・12・13溝跡＝形状及び位置関係からＳＤ11と12は同一の溝跡と考えられ、ＳＤ13はほぼ直角に取り付く溝跡である。両者とも直線状に延び、ＳＤ11・12では約41ｍの溝長を確認した。上端幅50～60cm、下端幅10～20cm、深さは15cm前後である。断面形は皿状・Ｕ字状及び逆台形と様々である。底面はほぼ平坦であるが、溝端部間の比高差は20cm程あり東南方向に低くなっている。堆積土は１層で、黒褐色系の粘土質シルトである。ＳＤ11の溝方向はＮ－51°－Ｗ、ＳＤ12はＮ－54°－Ｗ、ＳＤ13はＮ－61°－Ｅである。遺物はない。

ＳＤ34溝跡＝部分的な確認で、検出長は80cmである。上端幅25cm、下端幅14cm、深さ８cm程を計る。断面は皿状である。堆積土は１層で暗褐色の粘土質シルトである。溝方向はＮ－60°－Ｗである。遺物はない。



	層	土　色	土 性	備　　考		層	土　色	土 性	備　　考
ＳＤ11	1	暗褐色 10Ｙ R3/3	粘性シルト	粘性あり、しまりややあり	ＳＤ13	1	黒褐色 10Ｙ R3/2	粘性シルト	黄橙色小ブロックを全体に含む
ＳＤ12	1	黒褐色 10Ｙ R3/1	粘 質 土	粘性を帯び、灰色がかっている	ＳＤ34	1	暗褐色 10Ｙ R3/3	粘土質シルト	

図12　ＳＤ11～13・34溝跡

土坑群＝列をなす土坑を計20基確認した。平面形が楕円形及び長円形の二種類がある。規模は楕円形のもので長軸40～80cm、長円形のもので125～145cm、短軸は50cm前後のものが多い。断面は皿状のものが主体を占める。堆積土はすべて同一のもので、にぶい黄褐色のシルトである。遺物はない。位置関係から北側と南側の２列の配列が想定される。

倒木痕跡＝９基確認した。関連遺物はない。

○Ｊ・Ｋ地点のまとめ

当地点西側部は土器包含地の谷地前遺跡の範囲に含まれるが、調査の結果、古代に属する明確な遺構は確認されなかった。

多くの遺構群は出土遺物もなく時期・性格等不明となっている。各土坑は堆積土状況からみて新しいものと考えられ、土坑群も同様に時期・性格が明らかでないが耕作にかかわる痕跡ではと考えられる。ＳＤ11・12は低地から微高地に延びるもので、状況から区画よりは水路に関係するものと考えられるが断定には至らなかった。３ｃ層下面での確認であり、時期は平安時代以前である。

⑧Ｌ地点

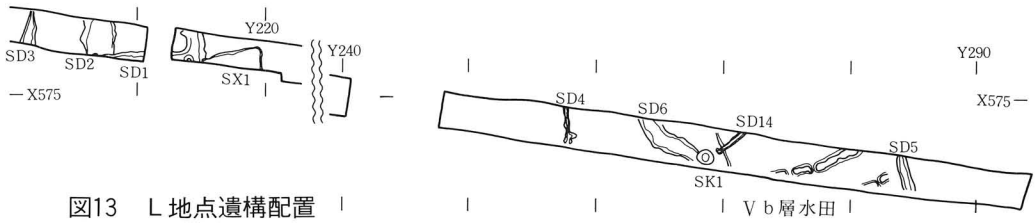


図13　Ｌ地点遺構配置

【５層面検出遺構】

ＳＫ１土坑＝平面形はほぼ円形で、径120～130cm、深さ10cmを計る。断面は皿状である。堆積土は１層で黄灰色の粘土である。層上面に灰白色火山灰を斑に含む。遺物はない。

ＳＤ１溝跡＝調査区内で屈曲し平面形は逆Ｌ字形となる。屈曲部中央に凸部がみられ溝は南側に分岐しているものと考えられる。上端幅140cm、下端幅50cm、深さ26cm程を計る。断面は緩い皿状である。堆積土は３層確認し、暗褐色系の粘土質シルトである。底面及び壁で15～20cm大の石が検出されている。ＳＸ１に切られ、ＳＤ２を切っている。溝方向は東西軸でＥ－２°－Ｎである。

ＳＤ２溝跡＝確認長は270cmであるが直線的に延びる。上端幅250cm、下端幅47cm、深さ40cm程で、底面は南側で二股に分かれる。東壁に緩やかな傾斜面がみられるが断面は逆台形と考えられる。堆積土は６層確認され、褐色系のシルトである。レンズ状堆積を示す。遺物はない。軸方向はＮ－１°－Ｗでほぼ真北を向く。溝周辺にピットが散在している。性格は不明である。

ＳＤ３溝跡＝直線状に延びる。北側部の残存がわるく平面形が三角形を呈する。上端幅90～120cm、下端幅50～65cm、深さ13～16cmを計る。断面は浅い逆台形である。堆積土は１層で暗褐色のシルトである。底面より陶器が１点出土している。軸方向はＮ－15°－Ｅである。

ＳＤ４溝跡＝直線的に延びる。上端幅20～30cm、下端幅15～18cm、深さ５cm程を計り、断面はＵ字状である。堆積土は１層で黒褐色のシルトである。遺物はない。軸方向はＮ－２°－Ｗである。

ＳＤ６溝跡＝やや南側に屈曲をみる。上端幅100～150cm、下端幅70～90cm、深さ15cmを計る。断面は皿状である。堆積土は８層確認され褐色系のシルトである。レンズ状堆積で灰白色火山灰も層的にみられる。遺物には土師器・石器がある。

ＳＤ14溝跡＝４層及びＶｂ層上面で確認した。直線的に延びる。上端幅25～48cm、下端幅13～38cm、深さ３～６cmを計る。断面は皿状である。堆積土は１層で黒褐色の粘土である。遺物はない。軸方向はＮ－52°－Ｅである。

ＳＸ１竪穴遺構＝北及び東辺のみの確認であるが、平面形は隅丸の方形と考えられる。北辺長は480cmを計り、深さ10cm程である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は１層で暗褐色のシルトである。底面はほぼ平坦である。付属施設等の確認はない。遺物はない。北辺の軸方向はＮ－75°－Ｅである。

⑨Ｌ地点東端部

当地点は東側に丘陵部、西側が微高地と浅い谷間状の狭隘な地形である。基本層に若干の違いが認められ、あえて統一をはからず当地点のみ記述を変えた。層は大別でⅠ～Ⅶ層の８層、細別で14層に分層した。検出遺構群はⅦ層（砂礫層）の凹地部分に位置する。なお、Ｖｃ・Ⅶ層には灰白色火山灰が含まれており、基本層３層に対応するものと考えられる。

【Ｖａ層面検出遺構】

Ｖｂ層水田跡＝検出遺構として東西方向に延びる畦畔２条、南北方向に延びる溝跡（ＳＤ５）を１条確認した。西側部で段差を確認したが、掘り過ぎのため詳細は不明となっている。区画の大きさは知り得ないが横長の方形区画で、層厚は10cm前後である。畦畔は上端幅70～100cm、下端幅40～60cm、高さ１～４cmを計る。畦畔１はやや孤状に延び、水口を２ケ所確認した。畦畔方向はＮ－68°－Ｅ前後である。畦畔２は部分的確認であるが、水口を１ケ所確認した。畦畔方向はＮ－61°－Ｅである。畦畔１・２の真々間の距離は3.5m程である。田面は緩やかに南東方向に傾斜しており、西側部と東側部の比高差は23cm程ある。遺物はない。

ＳＤ５溝跡＝直線状に延びる。上端幅90cm、下端幅35cm、深さ13cm程を計る。断面は皿状で、底面はⅦ層の砂礫面で凹凸で、南側に低くなっている。堆積土は１層で灰褐色の粘土である。軸方向はＮ－17°－Ｗである。遺物はない。

【Ｖｂ層面検出遺構】

Ｖｃ層水田跡＝畦畔を２条確認した。Ｖｂ層の畦畔とほぼ同一地点に位置し、規模もほぼ同じである。層厚は６cm前後である。畦畔１には水口が１ケ所認められ、東側には上層の水口が凹地となり残存していた。田面の比高差は22cm程で南東方向に傾斜する。灰白色火山灰をブロック状に含み、Ｖｂ層に較べて砂粒が多い。遺物はない。

【Ｖｃ層面検出遺構】

Ⅶ層水田跡＝Ｖｃ層と同色・同質であるがやや砂質が強い。灰白色火山灰を斑に含む。層厚も薄く遺存しない地点もみられるが、遺構として畦畔を１条確認した。上層同様ほぼ同じ地点に位置する。擬似畦畔Ｂとも考えられたが若干南側に位置することから水田跡と判断した。上端幅85cm、下端幅60cm、高さ３cm程を計る。遺物はない。

○Ｌ地点東端部のまとめ

３枚の水田跡を確認したが、周辺地形・Ⅶ層の凹地・畦畔の形状等から、谷間部分のみに展開するものではと考えられた。遺物が皆無であるが、Ｖｃ・Ⅶ層には灰白色火山灰が含まれ、時期は３枚の水田跡とも10世紀前半以降大きく平安時代頃と考えておきたい。水田跡両端部において溝跡（ＳＤ５・６）を検出したが、水路の性格をもつものとは考えたが、組み合う水田跡については判断しえなかった。

⑩平成元年度調査のまとめ

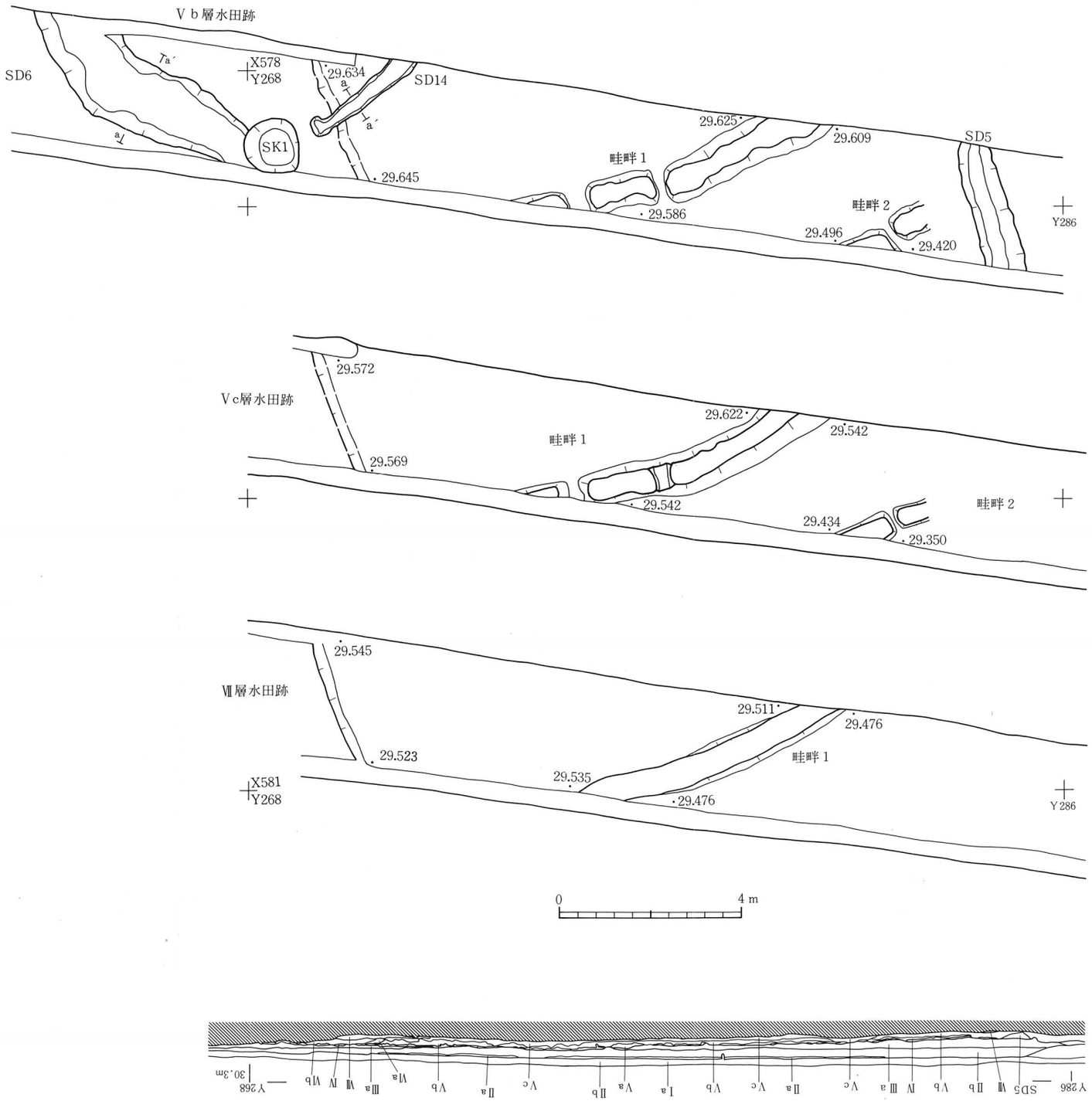
検出遺溝には水田跡・溝跡・土坑・河川跡・倒木痕跡がある。遺構出土の遺物が極めて少なく、多くは層中出土である。基本層は大別で４層確認したが、遺構確認は１ａ・２・３ａ・３ｂ・５層の５面となる。上面層が基本層１層となる遺構が多く、帰属時期が新しくなるものが多い。層中より小片ではあるが数多くの土器類・陶磁器類・石製品・金属製品が出土しているが、３ａ層以下には土器類・石器のみが出土し、火山灰の存在等を含めて判断すると２層は近世頃、３層は平安時代の時期が想定される。

水田跡＝４ケ所の地点で水田跡の存在を確認した。検出層は２・３ａ・３ｂ層・３層相当（Ｖｂ・Ｖｃ・Ⅶ層）である。調査区の制約があり全容は不明であるが、２・３層は調査区全域にほぼ分布しており、土壌・断面状況からみて広い範囲に水田が展開していたものと考えられる。条里制にかかわる点は遺構の確認数も少なく明らかではない。

溝跡＝３ａ層面で６条、５層面で15条、その他２条の計23条確認している。規模が小さく不安定な溝跡もみられるが、確認面の土壌等からみて多くは水路としての性格をもつものと考えられる。調査範囲からみると点的な確認であり詳細は不明と言わざるおえない。

土坑＝計20基確認した。検出層は１ａ層（１基）、２層（１基）、３ｂ層（２基）、５層（16基）であるが、確認面上層が基本層１層となるものが大半で堆積状況等も含め、時期は極めて新しいものが多いと考えられる。この中で、古代に属するものとして、灰白色火山灰を堆積土中に含む、ＳＫ１・６土坑がある。ＳＫ６は壁面が焼け底面には炭化物もみられ、焼成遺構と考えられる。その他の土坑は性格不明である。

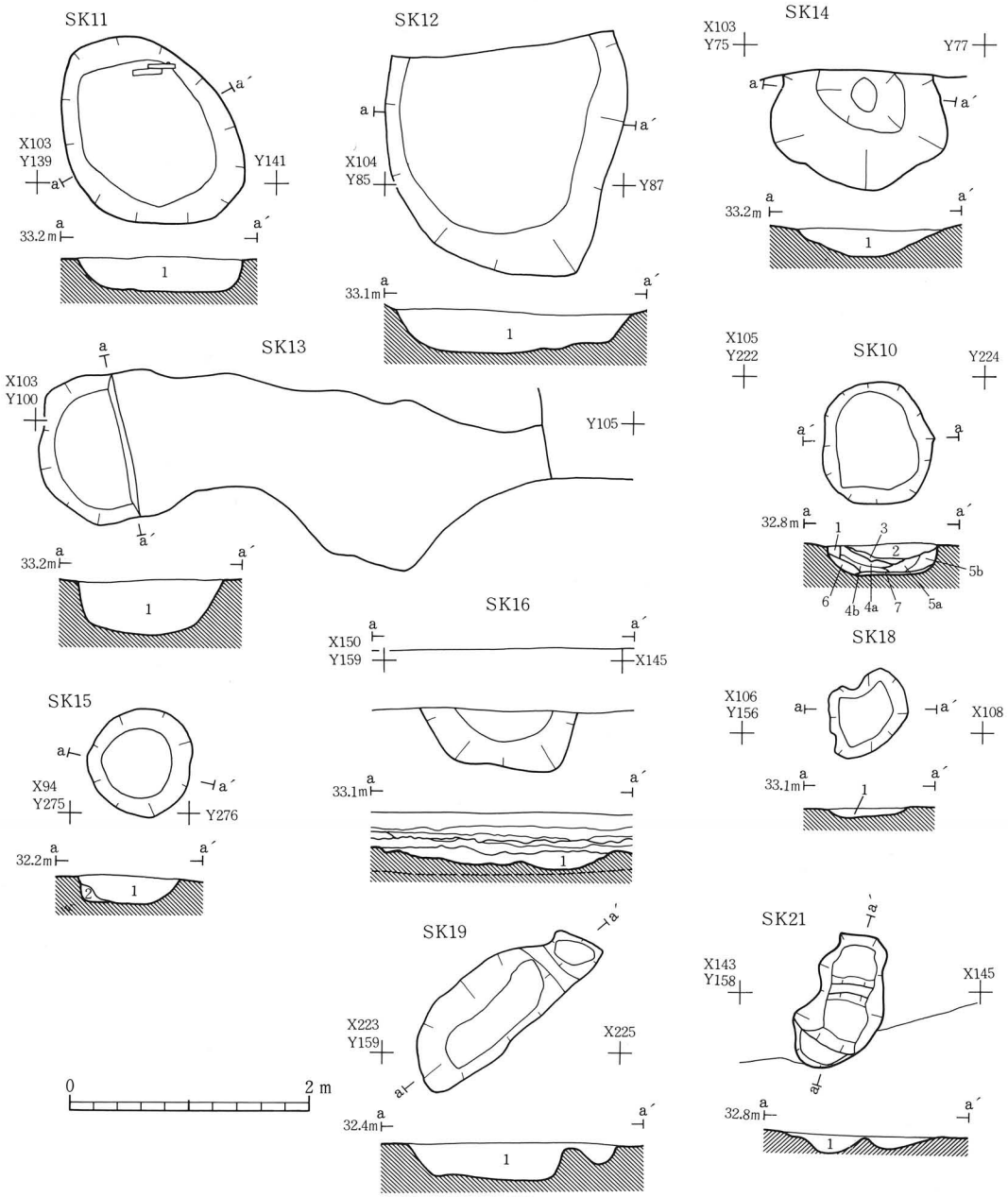
河川跡・倒木痕跡＝図示は省略した。溝跡と確認した中で平面・断面状況から河川跡としたものが計10条あり、倒木痕跡は計32基確認している。



	層	土　色	土　性	備　考
SD14	1	黒褐色 10YR2/2	粘土	
SD6	1	灰黄褐色 10YR4/2	粘性シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
	3	黄灰色 2.5YR5/1	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
	4	灰黄褐色 10YR6/2	砂質土	砂層であるが粘性をもつ
	5	褐灰色 10YR5/1	粘性シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
	6	黄橙色 10YR7/2		灰白色火山灰層である
	7	灰黄褐色 10YR5/2	粘性シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
	8	黄灰色 2.5YR5/1	粘性シルト	

層	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3	粘土質シルト	現代水田
Ⅰb	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土	水田客土？
Ⅱa	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
Ⅱb	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む、凝灰岩の粒も含む
Ⅲa	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を多量に含む、凝灰岩粒も含む
Ⅲb	褐色 10YR4/4	粗砂	挙大の礫も含む
Ⅳ	黒褐色 10YR3/1	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
Ⅴa	褐灰色 10YR4/1	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を若干含む
Ⅴb	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	酸化鉄粒を含む
Ⅴc	灰黄褐色 10YR6/2	粘土質砂	酸化鉄粒を含む、灰白色火山灰をブロック状に含む
Ⅵa	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質砂	
Ⅵb	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質砂	凝灰岩粒、マンガン粒、酸化鉄粒を含む
Ⅶ	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質砂	酸化鉄粒、マンガン粒を少量含む、灰白色火山灰を含む
Ⅷ	褐灰色 10YR4/1	砂礫	
SD5	褐灰色 10YR5/1	粘土	

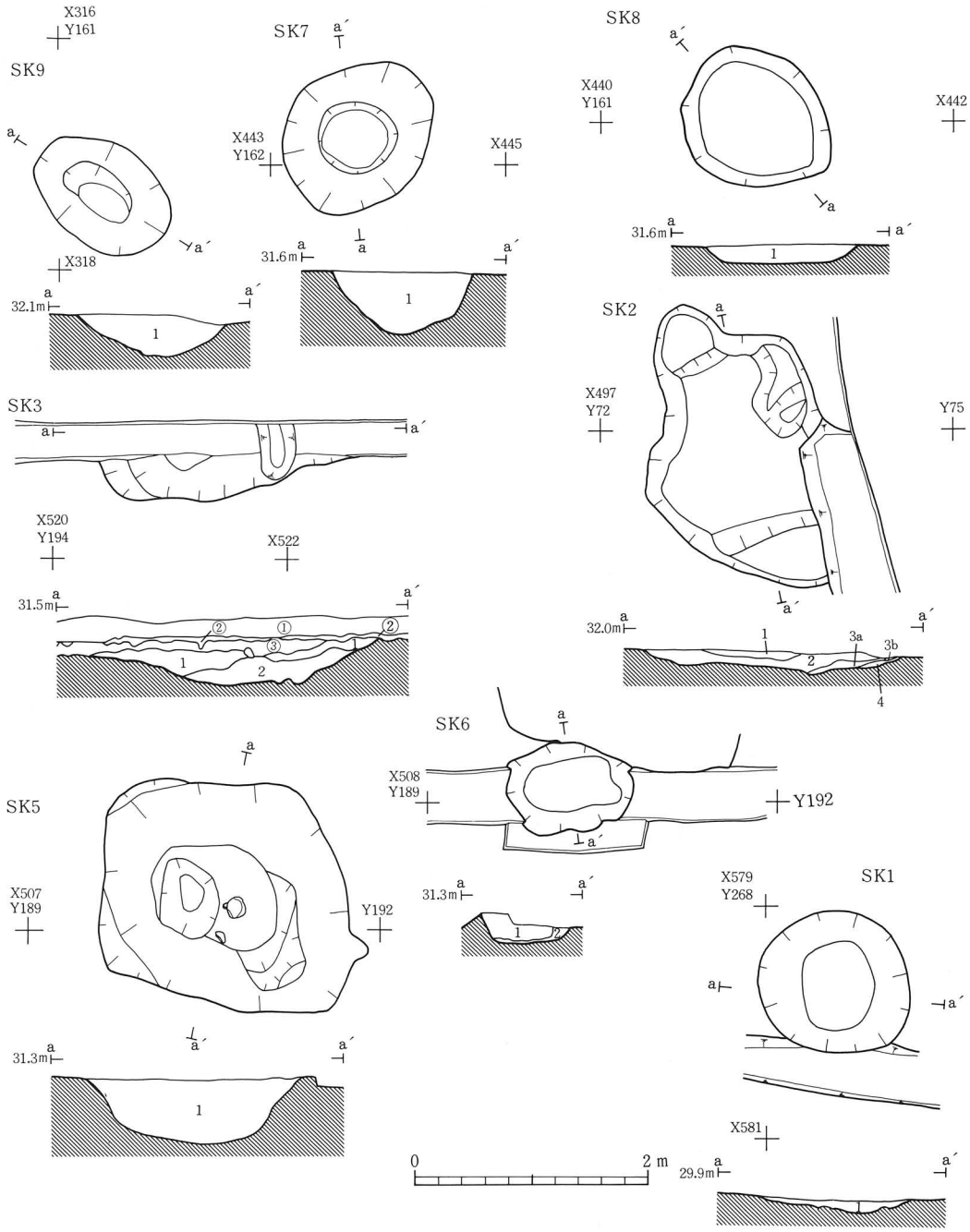
図14　Ⅴb・Ⅴc・Ⅶ層水田跡



	層	土色	土性	備考
SK11	1	褐灰色 10YR4/1	明黄褐色 10YR6/8の混土層	
SK12	1	褐灰白色7.5YR5/2	砂質粘土	酸化鉄粒を含む、底面グライ化
SK13	1	明黄褐色 10YR6/8	褐灰白色 10YR5/1の混土層	
SK14	1	褐灰白色7.5YR5/2	砂質粘土	酸化鉄粒を含む、上部グライ化
SK10	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	マンガン粒、酸化鉄粒を含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
	3	灰白色 10YR8/2	シルト	灰白色、火山灰土層
	4a	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	マンガン粒、火山灰土を含む
	4b	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	
	5a	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	

	層	土色	土性	備考
SK10	5b	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
	6	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	
	7	黒色10YR1.7/1		炭化物層
SK15	1	灰黄褐色 10YR4/2・褐色 10YR4/6の混土層		
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土	
SK16	1	灰褐色7.5YR4/2	粘土	
SK18	1	褐灰色 10YR4/1	粘土	炭化物を含む
SK19	1	灰褐色7.5YR5/2	シルト質粘土	
SK21	1	暗褐色7.5YR3/3	粘土質シルト	

図15　検出遺構Ⅰ（土坑）



	層	土　色	土　性	備　考		層	土　色	土　性	備　考
SK9	1	褐灰色 10YR4/1、	褐　色 7.5YR4/4の混土層		SK2	4	黄褐色 10YR4/3	シルト	黄褐色土粒を含む
SK7	1	黄灰色 2.5Y4/1、	黒褐色 10YR3/1、	黄橙色 10YR7/8の混土層	SK3	1	明褐色 10YR3/3	シルト	マンガン粒、黄橙色粒を含む
SK8	1	暗灰黄色 2.5Y4/2、	黒褐色 10YR3/1の混土層			2	黒褐色 10YR3/2	シルト	マンガン粒、黄橙色粒を含む
SK2	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土粒を含む	SK5	1	黄灰色 2.5Y4/1、	明黄褐色 10YR6/6、	粘質土・粘性シルトの混成層
	2	黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色粒、マンガン粒、炭化物を含む	SK6	1	黒褐色 10YR3/2、	明黄褐色 10YR6/6、	粘質土・粘性シルトの混成層
	3a	灰褐色 10YR5/2	粘土質シルト	炭化物、黄褐色土を含む		2	黒褐色 2.5Y3/1	粘質土	
	3b	明黄褐色 10YR6/6	粘土質シルト		SK1	1	黄灰色 2.5Y4/1	粘　土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む

図16　検出遺構Ⅱ（土坑）

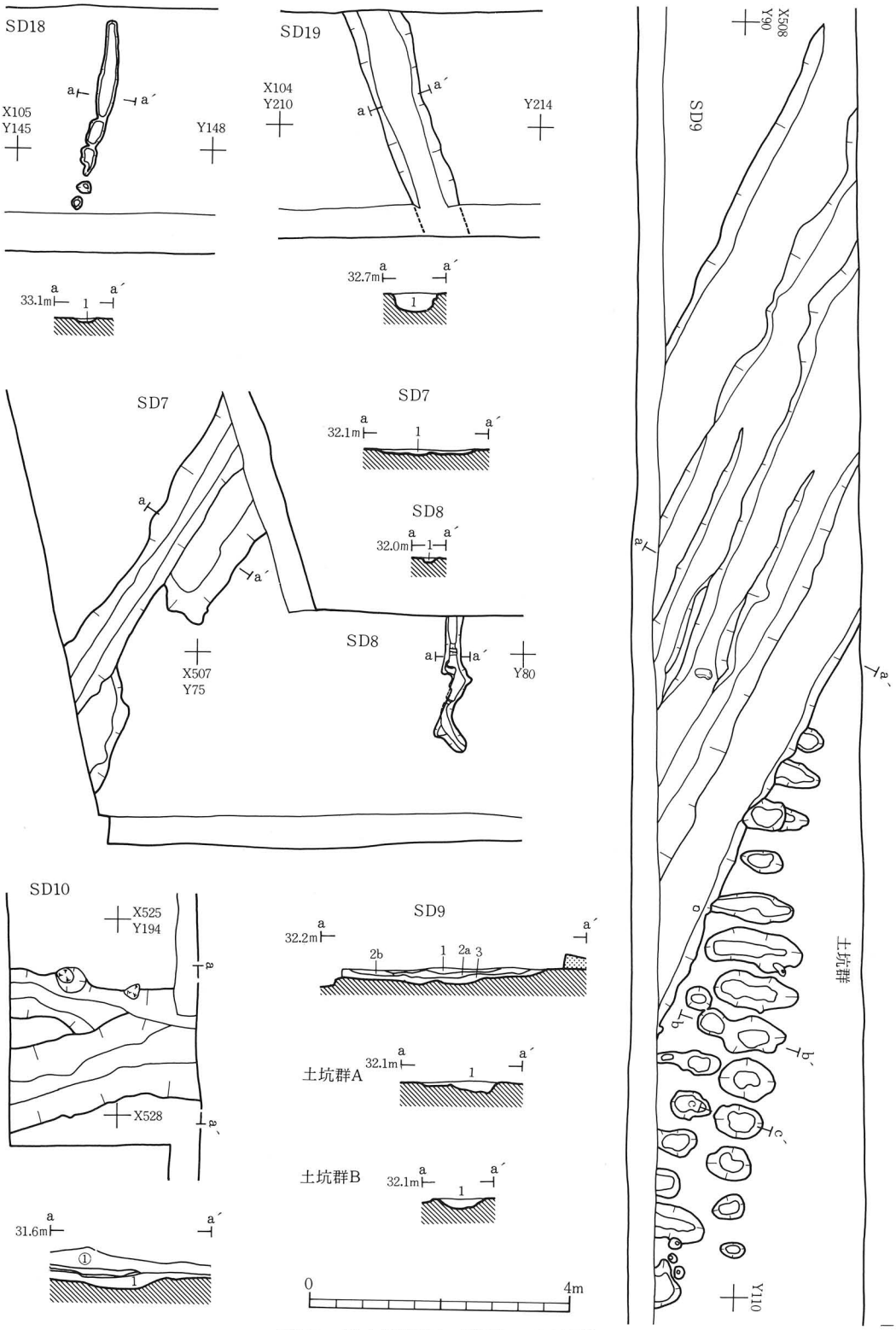
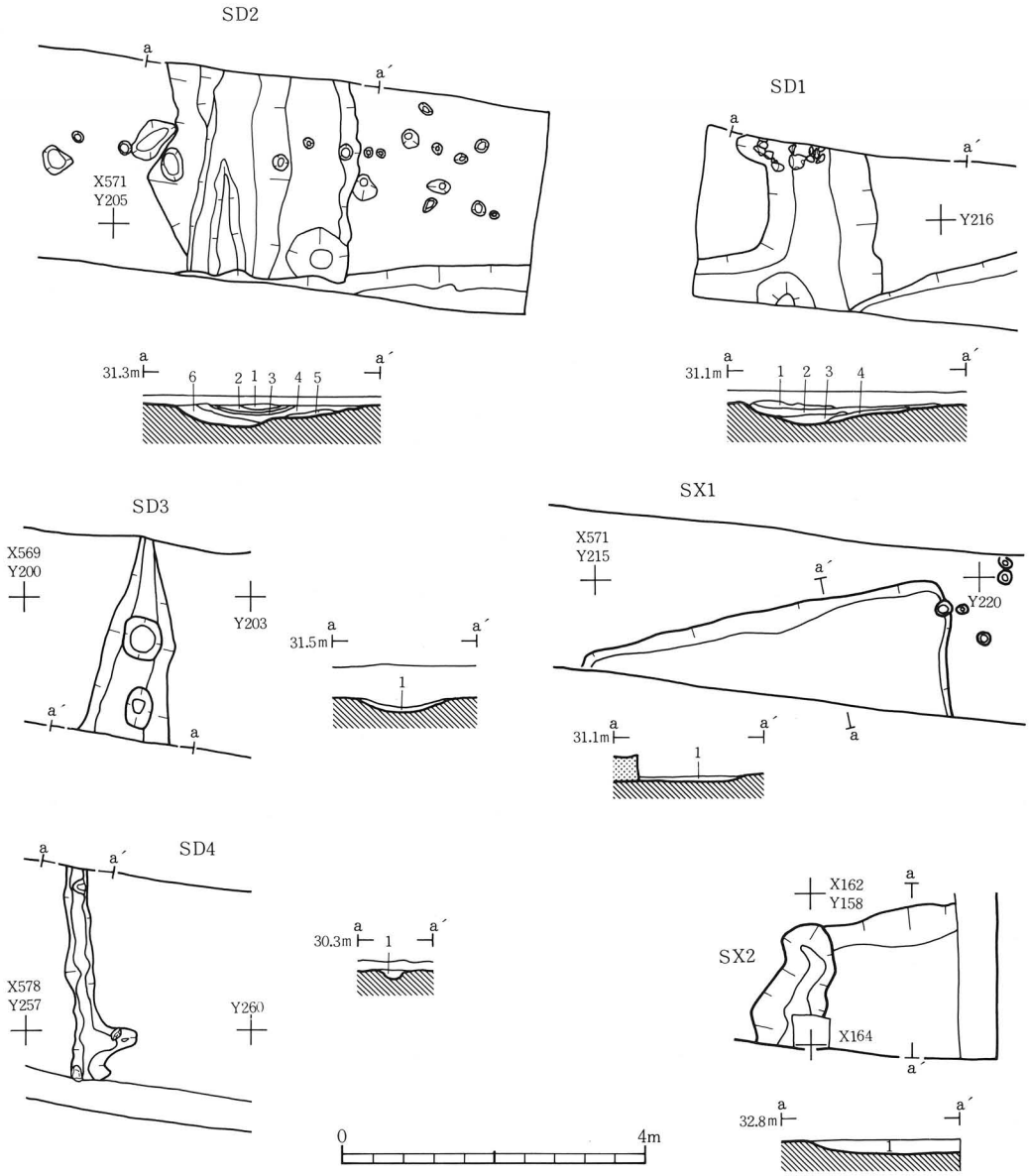


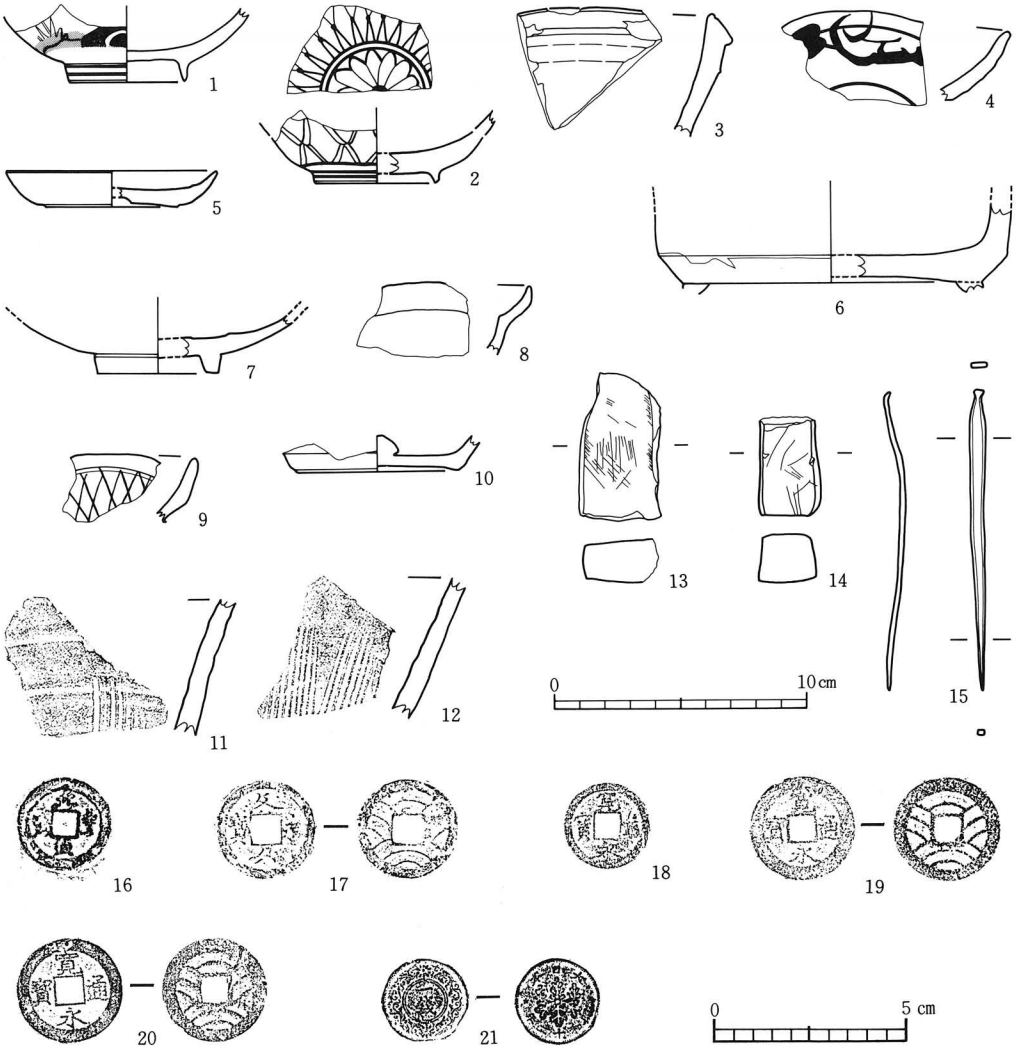
図17　検出遺構Ⅲ（溝跡・土坑群）



	層	土　色	土　性	備　　考
SD18	1	黒褐色 10YR3/1	粘　土	
SD19	1	黒 色10YR1.7/1	粘　土	
SD7	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	マンガン粒を含む
SD8	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
SD9	1	暗褐色 9YR3/3	シルト	黄褐土粒、マンガン粒を含む
	2a	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐土粒、マンガン粒を含む
	2b	暗褐色 10YR3/4	シルト	黄褐土粒、マンガン粒を含む
	3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐土粒、マンガン粒を含む
SD10	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SD1	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	マンガン斑をわずか、橙色粒を全体に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	マンガン斑をわずか、橙色粒を全体に含む
	3	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	マンガン斑をわずか、橙色粒を全体に含む
	4	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	マンガン斑をブロック状に含む

	層	土　色	土　性	備　　考
SD2	1	暗　褐　色 10YR3/3	シルト	マンガン斑、橙色の粒を密に含む
	2	黒　褐　色 10YR2/3	シルト	橙色のブロック、炭化粒を含む
	3	黒　褐　色 2.5Y3/1	シルト	
	4	暗　褐　色7.5YR3/3	シルト	マンガン粒、橙色粒、酸化粒を含む
	5	黄　褐　色 10YR5/6	粘土質シルト	マンガン斑、酸化粒を含む
	6	黒　褐　色 10YR2/3	粘土質シルト	マンガン粒、橙色粒、酸化粒を含む
SD3	1	黒　褐　色 10YR3/1	シルト	
SD4	1	黒　褐　色 10YR3/2	シルト	
SX1	1	暗　褐　色 10YR3/3	シルト	橙色小ブロックを含む
SX2	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土質砂	
土坑群A	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
土坑群B	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	

図18　検出遺構Ⅳ（溝跡・性格不明遺構）



図・番	種別	器種	出土地点	口径	底径	器高	特徴	産地	年代	写真図版
19－1	磁器	碗	SK8 1層	－	23	－	染付、見込に目跡	肥前	18世紀？	
19－2	磁器	碗	D・Y150 1層	－	24	－	染付、網目文、見込に菊花文	肥前	18世紀前半	
19－3	陶器	擂鉢？	SD3 1層	－	－	－	鉄化粧	不明	17世紀？	
19－4	陶器	皿	H・X340 1層	－	－	－	志野織部鉄絵皿	美濃	17世紀前半	
19－5	磁器	皿	B・X70 1層	84	52	14	白磁皿、口銹、蛇ノ目高台	肥前	17世紀中頃	
19－6	陶器	鉢？	D・Y200 1層	－	82	－	鉄釉、目跡(胎土目)、香炉？	唐津	16末～17世紀初	
19－7	磁器	皿	B・X80 1層	－	48	－	白磁？、見込蛇ノ目釉ハギ、高台砂付着	肥前	17世紀中頃	
19－8	磁器	鉢	表採	－	－	－	青磁	龍泉窯系	13～14世紀	
19－9	陶器	皿	A・Y145 2層	－	－	－	志野織部鉄絵皿	美濃	17世紀前半	
19－10	陶器	蓋	I・ 2層	－	－	15	瓶類の蓋	堤	18世紀以降	
19－11	陶器	擂鉢	B・X60 1層	－	－	－	鉄化粧	不明	17世紀	
19－12	陶器	擂鉢	I・ 2層	－	－	－	鉄化粧	不明	17世紀	
19－13	砥石		F・ 1層	土部欠損、幅30mm厚さ17mm、1面のみ使用痕						
19－14	砥石		F・ 1層	両端部欠損、幅23mm厚さ19mm、1面のみ使用痕						
19－15	斧		F・X180 1層	銅製品、長さ120mm厚さ2mm最大幅7mm、断面四角形						
19－16	古銭		F・ 表採	「元豊通宝」銅貨、北宋						49－11
19－17	古銭		F・ 1層	「文久永宝」銅貨						49－8
19－18	古銭		C・Y80～90 1層	「寛永通宝」銅貨						49－9
19－19	古銭		A・X70～80 1層	「寛永通宝」銅貨						49－7
19－20	古銭		F・ 1層	「寛永通宝」銅貨						49－12
19－21	古銭		I・ 1層	「桐1銭青銅貨」(昭和12年)						49－10

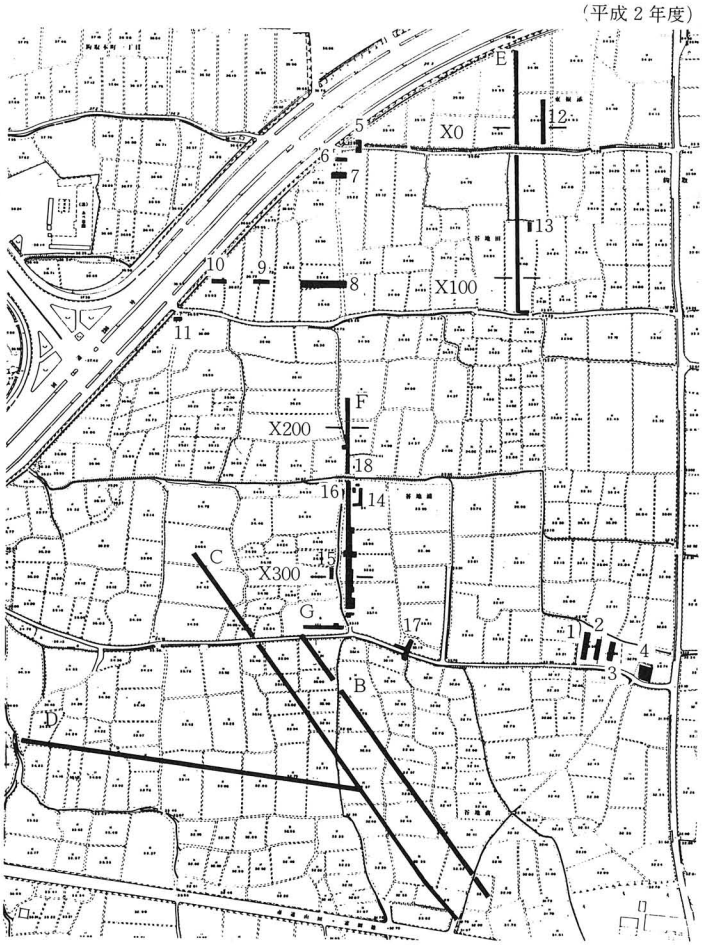
図19 出土遺物

2) 平成２年度調査の成果

調査対象地域は当遺跡中央部及び東南部となる。調査区として水路設置部分にＡ～Ｇのトレンチを、遺構の広がり及び当遺跡性格把握のために１～18の小トレンチを任意に設定した。基本層位は調査地点ごとに土性の違いがみられるが、大別で５層確認した。元年度調査の層位とほぼ同じであるが全体的に黒色が強く、３層下で縄文土器片を含む層を１枚確認している。発見遺構として、水田跡・溝跡・土坑・掘立柱建物跡・炉跡・河川跡・倒木痕跡がある。以下、調査地点ごとに記述して行く。

①Ａトレンチ

調査地点の地形は微高地及び沢となり東側の沢の部分では調査を割愛している箇所がある。基本層位は大別で１～５層の５枚を確認した。微高地部は１・２・５層が分布するが190地区付近から４層が東側へみられ少量の縄文土器片が包含されている。また、沢地北側では３ａ・３ｂ層が確認されたが水田等の遺構は検出されず河川跡の肩部分が検出されたのみである。



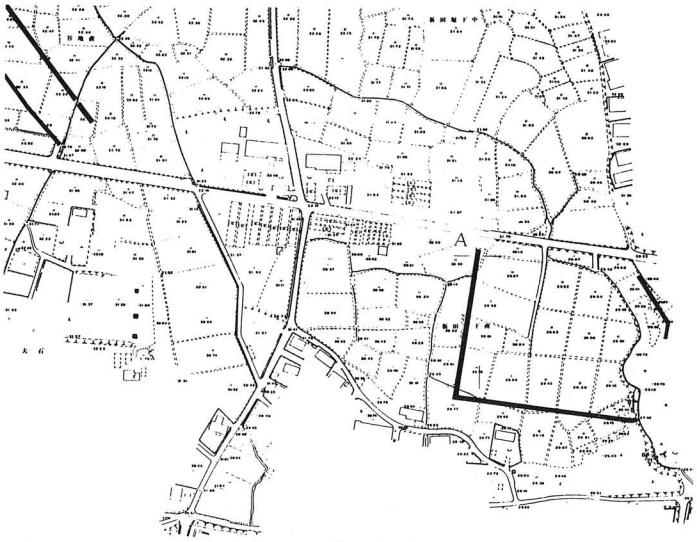


図20　平成２年度調査区

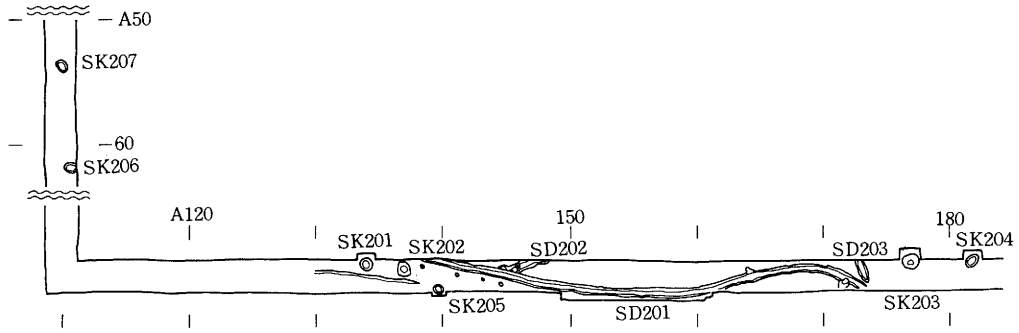


図21　Ａトレンチ遺構配置

【２層面検出遺構】

ＳＫ201土坑＝平面形は円形で軸長98cm、深さ24cmを計る。断面形は逆台形を呈する。堆積土は１層で灰黄褐色と黒褐色の混合層となっている。遺物はない。

ＳＫ202土坑＝平面形は不整の長円形で長軸133cm、短軸97cm、深さ28cmを計る。断面形は皿状を呈する。堆積土は１層で黒褐色と黄橙色の混合層である。遺物はない。

ＳＫ203土坑＝平面形はほぼ円形で軸長151cm、深さ42cmを計る。断面形はやや深い皿状を呈する。堆積土は１層で黒褐色・黄橙色・褐色の混合層である。遺物はない。

ＳＫ204土坑＝平面形は長円形で長軸120cm、短軸82cm、深さ12cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は１層で黒褐色と黄橙色の混合層である。遺物はない。

ＳＫ205土坑＝平面形はやや不整の正方形で軸長70cm、深さ15cm程を計る。断面形は皿状である。堆積土は２層確認され黒色系のシルトで炭化物・焼土が多量に含まれる。遺物はない。

ＳＤ201溝跡＝140～170地点内を東西方向に蛇行して延びる。上端幅45～70cm、下端幅25～40cm、深さ10～45cmを計る。断面形は皿状及び逆台形である。底面高は東から西へ低くなっている。堆積土は２層確認され褐色系のシルトである。遺物はない。

ＳＤ202溝跡＝直線状に延びるがＳＤ201に切られており確認長は2.5m程である。上端幅70cm、下端幅40cm、深さ35cm程を計る。断面形は逆台形である。堆積土は１層で黒褐色のシルトである。遺物はない。

ＳＤ203溝跡＝部分的な確認で検出長は1.8mである。上端幅50cm、下端幅40cm、深さ５cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は１層で黒褐色のシルトである。遺物はない。

【５層面検出遺構】

ＳＫ206土坑＝平面形は長方形を呈する。長軸90cm、短軸65cm、深さ13cmを計る。断面形は逆台形で、壁の一部に焼面がみられる。堆積土は１層で黒褐色の粘土質シルトで炭化物・焼土が含まれる。

ＳＫ207土坑＝平面形は長円形で長軸100cm、短軸70cm、深さ18cmを計る。断面形は皿状であ

る。堆積土は１層で黒褐色の粘土質シルトである。遺物はない。

河川跡＝沢部および210～230地点で３条の河川跡を検出した。

倒木痕跡＝不整形及び馬蹄形の落ち込みを２基確認している。

②Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチ

調査地点南部に位置する長大な調査区である。基本層は大別で１～５層の５枚を確認したがＢ・Ｃトレンチでは全体的に黒色が強く粘性もます。

Ｂトレンチ

【２層面検出遺構】

ＳＫ218土坑＝平面形は不整の円形と考えられる。東西長133cm、南北長115cm以上、深さ25cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は２層確認した。黄灰色・暗褐色の粘土である。遺物はない。

ＳＫ219土坑＝平面形は不整の円形で軸長110cm、深さ45cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は１層で黄灰色の粘土である。遺物はない。

ＳＫ220土坑＝平面形は円形で軸長88cm、深さ24cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は２層確認した。褐色系の粘土である。遺物はない。

【３ｂ層面検出遺構】

２層水田跡＝Ｂ110～168地点で東西及び南北方向に延びる畦畔状の高まりと段を確認した。状況から擬似畦畔Ｂと考えられ、直上の２層に畦畔が存在していたものと判断される。擬似畦畔（以後、畦畔）は５条検出したが点的な確認のため詳細は明らかではないが、畦畔１がＮ－89°－Ｅ、畦畔３・５がＮ－４～５°－Ｗと方格線が推定され巨視的にみると南北方向の長方形の区画が想定される。遺物として土師器・陶磁器類がある。

ＳＤ211溝跡＝直線的に延びる。上端幅約１ｍ、下端幅約0.5ｍ、深さ42cmを計る。断面形は箱形のＵ字状である。堆積土は５層確認された。褐色系の粘土で層中には灰白色火山灰が粒状に含まれている。底面には砂が堆積している。遺物はない。溝方向はＮ－９°－Ｅである。

ＳＤ212溝跡＝直線的に延びる。上端幅90cm、下端幅20cm、深さ40cm程を計る。断面形は上広がりのＶ字状である。堆積土は４層確認された。黒褐色系の粘土で層中に灰白色火山灰がブロックで含まれる。遺物はない。溝方向はＮ－34°－Ｅである。

足跡＝Ｂ150地点において牛の足跡と判断される凹面を９個確認した。凹面には灰白色火山灰が堆積していた。

倒木痕跡＝調査区南端部で３基確認している。

【５層面検出遺構】

３ｂ層水田跡＝Ｂ115～127地点で東西及び南北に延びる畦畔状の高まりと段を検出した。状

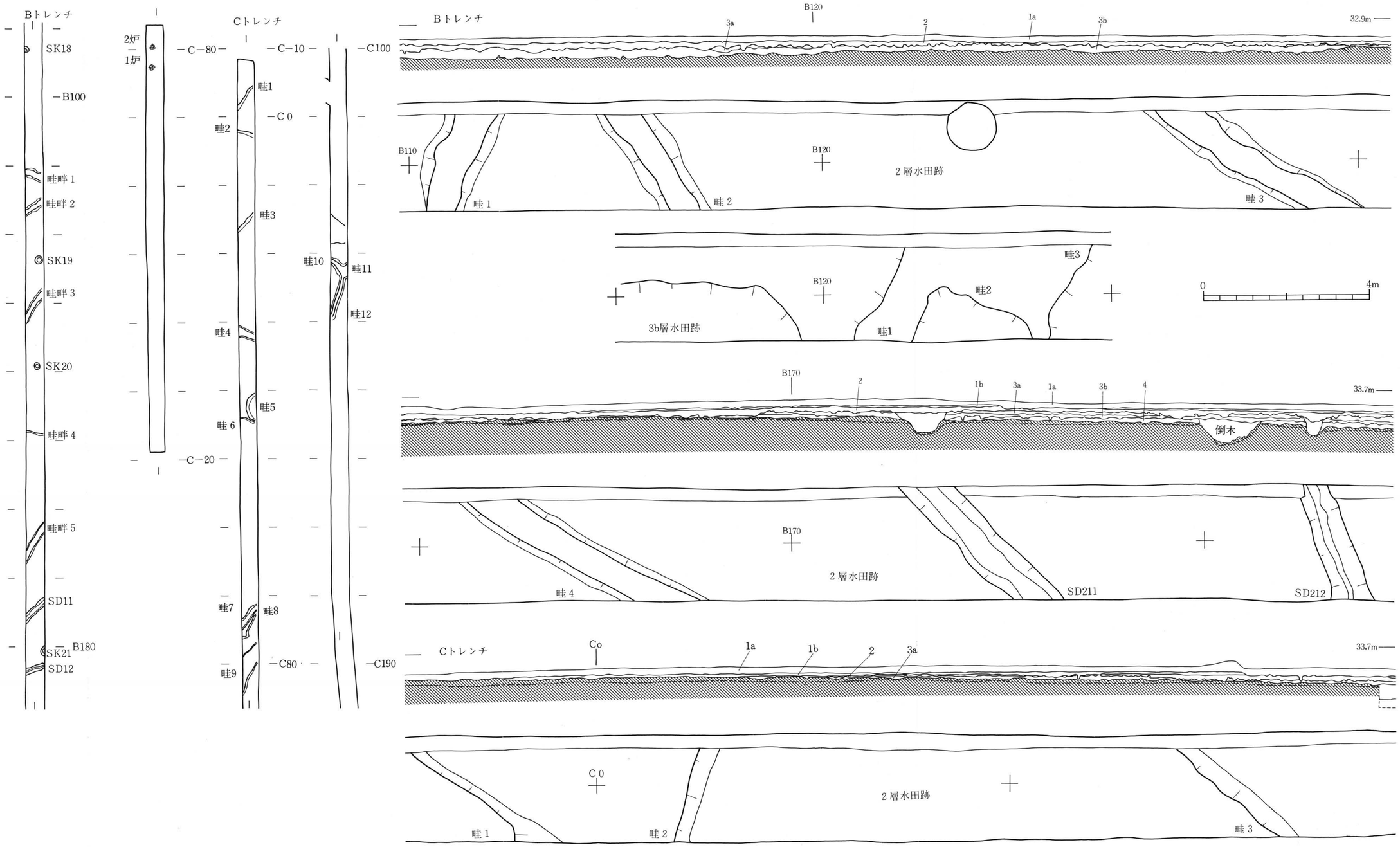


図22　B・Cトレンチ配置、2層・3b層水田跡

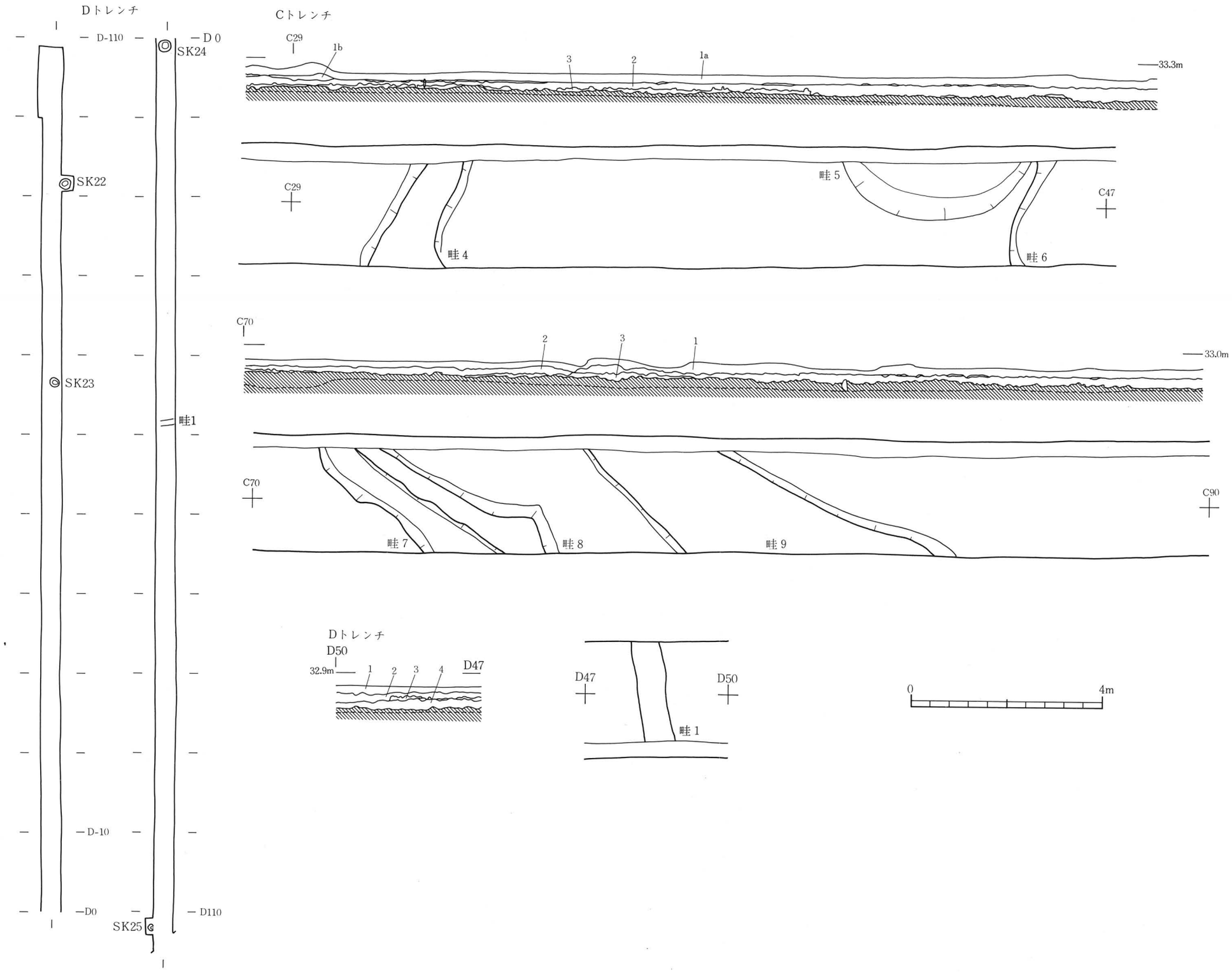


図23　Dトレンチ配置２層水田跡

況から擬似畦畔Ｂと判断され直上の３ｂ層に畦畔が存在していたものと考えられた。確認範囲も狭く詳細は不明であるが、直線的に延びる高まりの軸方向はＮ－６°－Ｗ・Ｎ－87°－Ｗである。当地点での遺物はないが３ｂ層中にはロクロ使用の土師器片が出土している。

Ｃトレンチ

全体的に２層が下層の３層を撹拌しており断面観察においても島状に薄く遺存する状態である。４層はＣ－80～－30・Ｃ160～210地点のみにおいて検出されている。

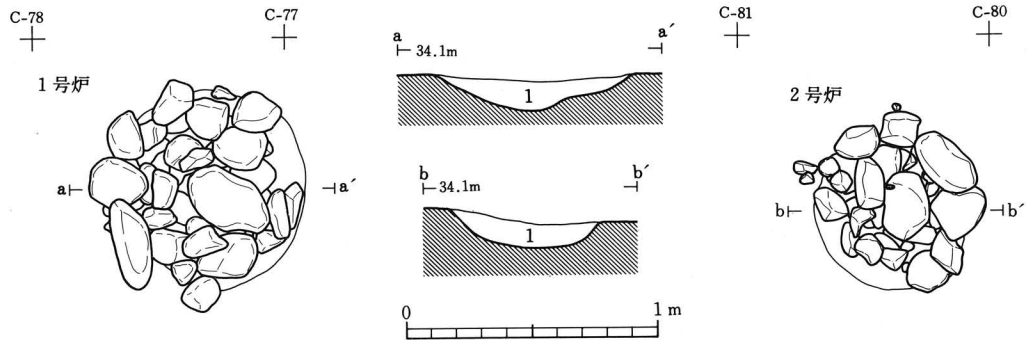
【３層面検出遺構】

２層水田跡＝Ｃ０～140地点において東西及び南北に延びる畦畔状の高まりと段差を計12条検出した。状況から擬似畦畔Ｂと判断され直上の２層に畦畔が存在していたものと考えられたが擬似畦畔（以後、畦畔）の間隔が近接しているものもみられ耕作痕跡の凹凸面が含まれている可能性もある。３層面検出の畦畔は11・12・13の３条で他が５層面となる。線的な確認で詳細は不明であるが、畦畔方向から判断して方格の区割りが想定される。軸方向は南北ラインでＮ－１～８°－Ｅ・Ｎ－１～19°－Ｗ、東西ラインはＮ－69～82°－Ｅが計測され、Ｂトレンチの２層水田跡とほぼ同方向である。耕作土中より土師器片・陶磁器類が少量出土している。

【５層面検出遺構】

１号石組炉跡＝Ｃ－77地点で確認した。礫面が若干ではあるが赤変しており炉跡と判断した。関連遺構が確認されず単独のものと考えられる。20～35cm程の礫を方形に組み上げており、大きさは85×95cm程で高さ20cm程を計る。底面には礫が配されているが、炉中央にも礫が詰まっており崩落物かの判断はできなかった。下面において径80cm程の円形の掘り方が確認された。堆積土は４層と考えられる黒褐色の粘土である。関連遺物の出土はない。

２号石組炉跡＝Ｃ－80地点で確認した。状況は１号炉跡と同じで礫面が若干赤変している。石組は方形を呈し、大きさは60×75cm程で高さ20cm程を計る。掘り方は径60cm程の円形で黒褐色の粘土が堆積している。関連遺物の出土はない。



	層	土色	土性	備考
1号炉	1	黒褐色　10YR2/2	粘土質シルト	黄灰色の砂質シルト・砂を含む

	層	土色	土性	備考
2号炉	1	黒褐色　10YR2/2	粘土質シルト	黄灰色の砂質シルト・砂を含む

図24　１号・２号石組炉跡

Dトレンチ

全体的に砂質土壌である。調査区西側部では砂礫層の堆積が３・４層上面の各所で観察され小河川の存在が確認される。

【２層面検出遺構】

ＳＫ22土坑＝平面形は不整の円形で長軸148cm、短軸136cm、深さ62cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は２層確認し黄色系のシルトである。遺物はない。

ＳＫ23土坑＝平面形は不整の円形で長軸133cm、短軸119cm、深さ47cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は１層で褐灰色とにぶい黄橙色の混合層である。遺物はない。

ＳＫ24土坑＝平面形は不整の円形で軸長145cm前後、深さ53cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は１層で黄灰色のシルトである。遺物はない。

ＳＫ25土坑＝平面形は円形と考えられる。径165cm程で深さ68cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は２層確認し黒褐色の砂質粘土である。遺物はない。

【３層面検出遺構】

２層水田跡＝Ｄ48地点で幅60cm程の畦畔状の高まりを１条検出した。状況から擬似畦畔Ｂと判断され直上の２層に畦畔が存在していたものと考えられた。軸方向はＮ－２°－Ｗでほぼ真北を向く。周辺２層中からは土師器・陶磁器類の小破片が出土している。

③Ｅ・12・13トレンチ

Ｅトレンチは南北に延びる長大な調査区であるが遺存状況がわるく何ら検出されなかった。基本層は大別で１・３・５層を確認した。南側に向かうにつれ３層が薄くなり遺存しない。

12・13トレンチはＥトレンチ周辺の下層の状況把握のために設定した。

【４層面検出遺構】

２層水田跡＝12トレンチ検出。４層上面で南北及び東西に延びる幅40～45cm程の高まりと段を確認した。状況から擬似畦畔Ｂと考えられ、直上の２層に畦畔が存在していたと判断した。擬似畦畔（以後、畦畔）は１条のみで、高さ１～５cm程遺存する。畦畔方向はＮ－７°－Ｅである。段の方向はＥ－11°－Ｓである。耕作土は削平のため遺存しない所もみられるが、南側では10～20cm程認められ、下面には凹凸がみられる。遺物はない。

倒木痕跡＝12トレンチで１基確認した。

④Ｆトレンチ

調査区南半部で溝跡を検出したが、「名取郡北方山田邑」絵図（文政５年・1822年）に描かれている「ヤチヤシキ」の堀跡と考えられ14～18トレンチを設定し周辺状況の確認を行っている。基本層は大別で１・２・５層の３枚を確認したが、調査区北側では１層下が５層面となっている。なお、１層直下で焼夷弾を４本検出している。

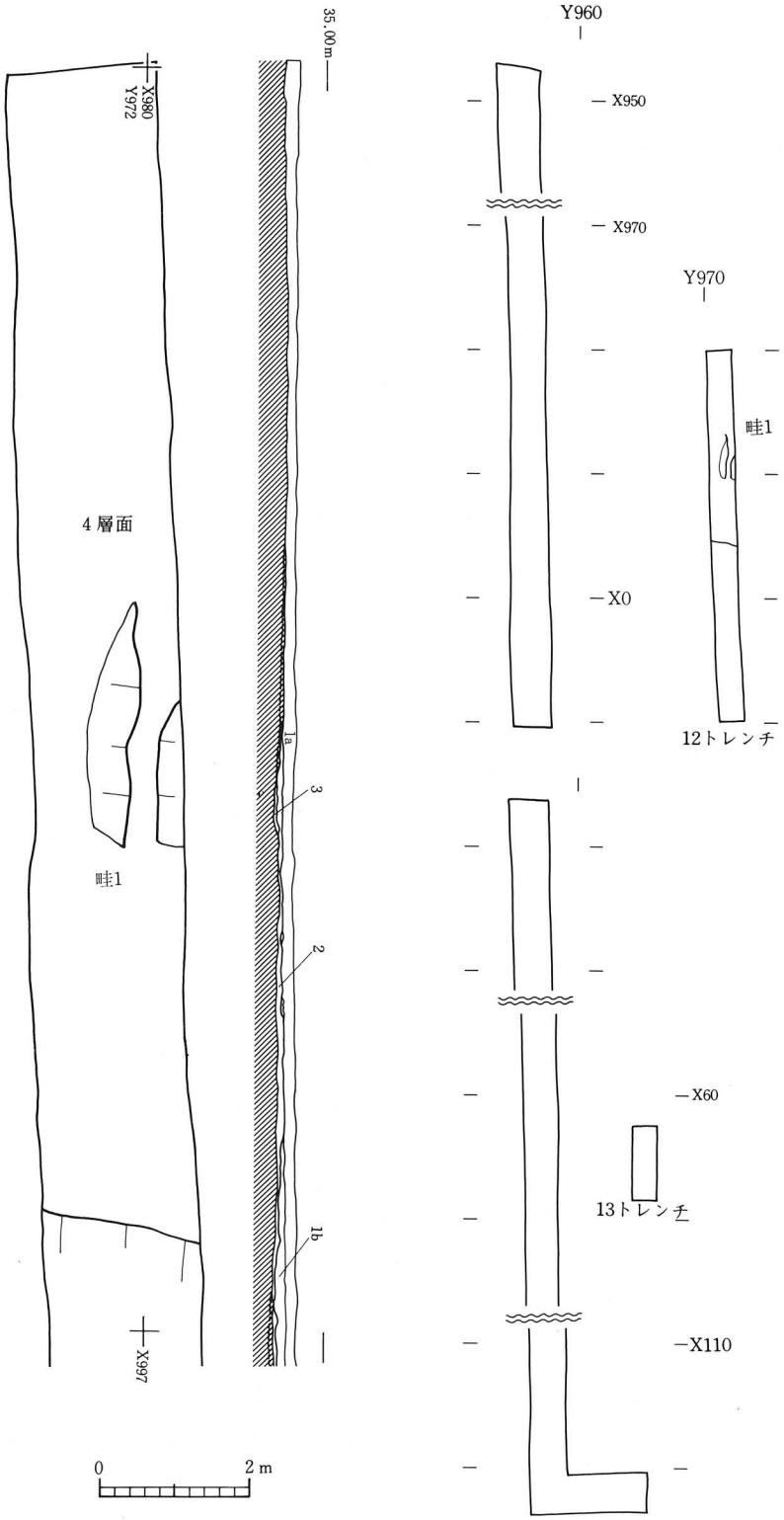


図25　E・12・13トレンチ配置・2層水田跡

【２層面検出遺構】

ＳＤ209溝跡＝Ｘ240～320Ｙ50地点内で南北に延びる溝跡を確認した。Ｘ270地点付近でやや東側に屈曲しており、北側部の状況確認のため14・16・18トレンチを設定し、Ｘ240地点で東西方向に延びる北辺を確認した。上端幅は北辺で３ｍ前後・西辺中央部で２ｍ、西辺南端部で4.5ｍ程を計り、下端幅は0.5～１ｍ程である。深さは0.6～１ｍ程で底面高は南側へ低くなっている。断面形は皿状及び逆台形を呈するが多くは皿状の偏平な形である。堆積土は４層確認している。褐色系の砂質シルトが主体となり底面部は砂層となる。層中央部の２・３層中には植物遺体（木の枝・葉）と共に陶磁器類・瓦類・石製品・木製品・金属製品等が多量に出土している。特にＸ300地点付近では顕著である。溝跡内外の肩部には切り株が数多く遺存し、状況から切り倒されたものと考えられ、遺物群も同時期に一括廃棄されたものと判断した。溝確認時においても多量の河原石がみられ凹地に廃棄したものと判断される。Ｘ303地点では幅1.4ｍのカダナ（川棚・洗い場）が１基確認されている。５cm程の丸木杭を打ち込み、幅20cm、厚さ10cm程の板材で組み上げている。Ｘ310地点は他の地点に較べて幅広となるが、溝東壁面及び上面で丸木杭・石臼・河原石を使用し壁面補強の状況が確認され、溝方向に向く板蓋付きのくりぬき材の木製の暗渠が付設されていた。なお、同地点の堀内にはフネ（あく抜き用の木製容器）が出土している。

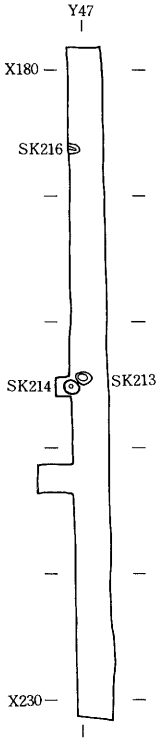
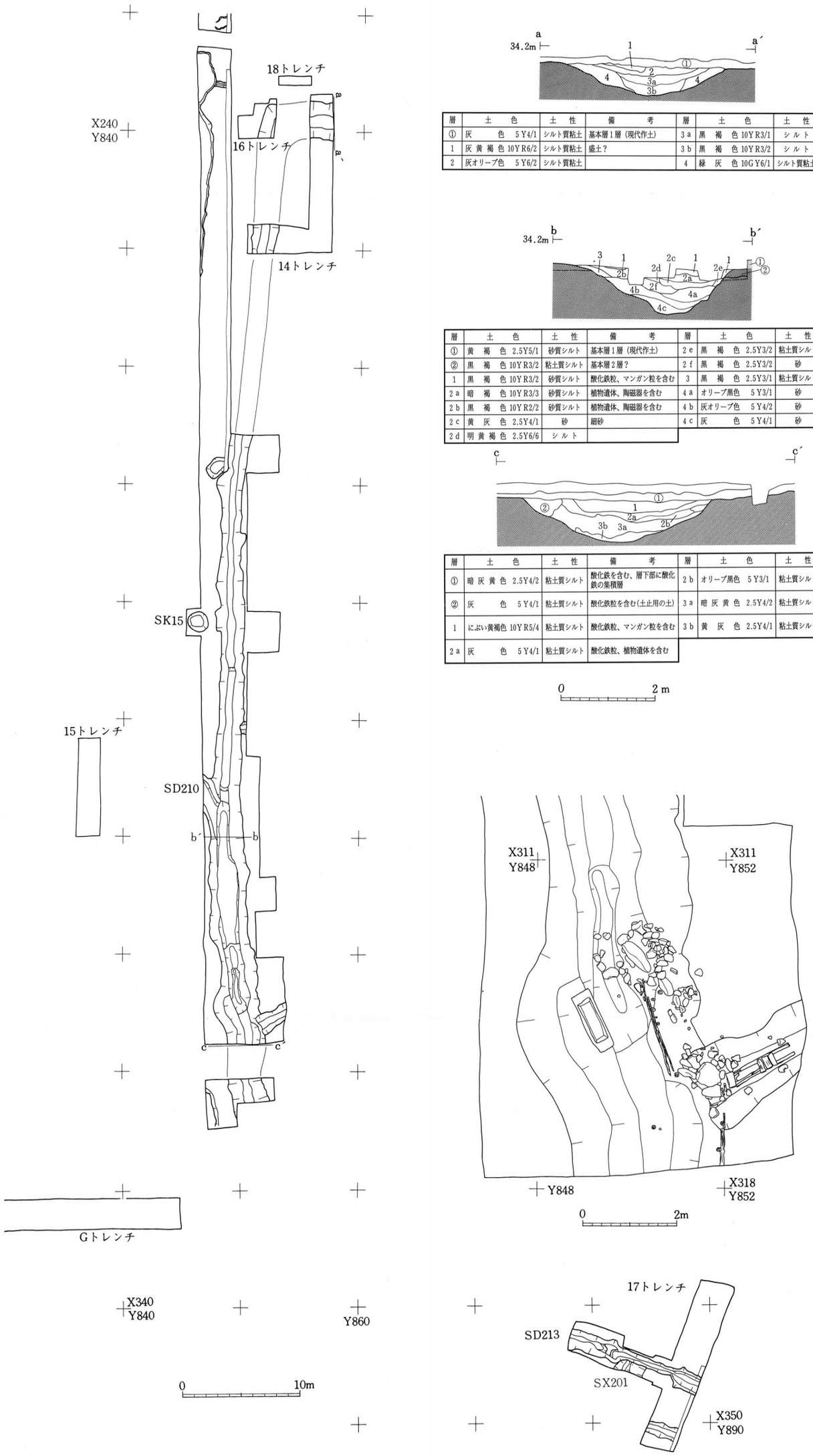


図26　Ｆトレンチ北側部

ＳＤ210溝跡＝Ｘ298地点のＳＤ209西壁に取り付く溝跡である。方向等を確認するため15トレンチを西側に設定したが何ら検出されず溝跡は北西方向に延びるものと判断される。上端幅約３ｍ、下端幅１ｍ、深さ55cm程を計る。堆積土は４層確認され、褐色系の砂質シルトが主となり底面は砂層である。確認範囲の問題があるがＳＤ209同様の状況は認められない。

ＳＤ213溝跡＝ＳＤ209の南辺確認のため17トレンチを設定し確認した溝跡である。確認長は約12ｍで、上端幅1.6ｍ、下端幅0.4ｍ、深さ0.6ｍを計る。溝中央部が５ｍ幅程両側より80cm程狭くなり、底面も10～20cm程高くなっている。状況から「入り口」部の可能性が考えられた。堆積土は細別で４層確認され灰黄褐色の粘土である。層中央部では植物遺体が含まれる。出土遺物として陶器・丸木材がある。

ＳＸ201性格不明遺構＝ＳＤ213「入り口」部南側に位置する。ＳＤ213に切られ確認範囲も狭く、溝状のものと考えられるが詳細は不明である。堆積土は１層で黒褐色の粘土である。遺物はない。



層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
①	灰 5Y4/1	シルト質粘土	基本層1層（現代作土）	3a	黒褐 10YR3/1	シルト	植物遺体を含む
1	灰黄褐 10YR6/2	シルト質粘土	盛土？	3b	黒褐 10YR3/2	シルト	
2	灰オリーブ色 5Y6/2	シルト質粘土		4	緑灰 10GY6/1	シルト質粘土	

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
①	黄褐 2.5Y5/1	砂質シルト	基本層1層（現代作土）	2e	黒褐 2.5Y3/2	粘土質シルト	細砂
②	黒褐 10YR3/2	粘土質シルト	基本層2層？	2f	黒褐 2.5Y3/2	砂	
1	黒褐 10YR3/2	砂質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む	3	黒褐 2.5Y3/1	粘土質シルト	
2a	暗褐 10YR3/3	砂質シルト	植物遺体、陶磁器を含む	4a	オリーブ黒色 5Y3/1	砂	細砂
2b	黒褐 10YR2/2	砂質シルト	植物遺体、陶磁器を含む	4b	灰オリーブ色 5Y4/2	砂	細砂
2c	黄灰 2.5Y4/1	砂	細砂	4c	灰 5Y4/1	砂	細砂
2d	明黄褐色 2.5Y6/6	シルト					

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
①	暗灰黄 2.5Y4/2	粘土質シルト	酸化鉄を含む、層下部に酸化鉄の集積層	2b	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土質シルト	植物遺体を含む、層上部グライ化
②	灰 5Y4/1	粘土質シルト	酸化鉄粒を含む(土止用の土)	3a	暗灰黄 2.5Y4/2	粘土質シルト	植物遺体、陶磁器片を多量に含む
1	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む	3b	黄灰 2.5Y4/1	粘土質シルト	植物遺体を含む、地山土を少量含む
2a	灰 5Y4/1	粘土質シルト	酸化鉄粒、植物遺体を含む				

図27　ＳＤ209・213 溝跡全体図

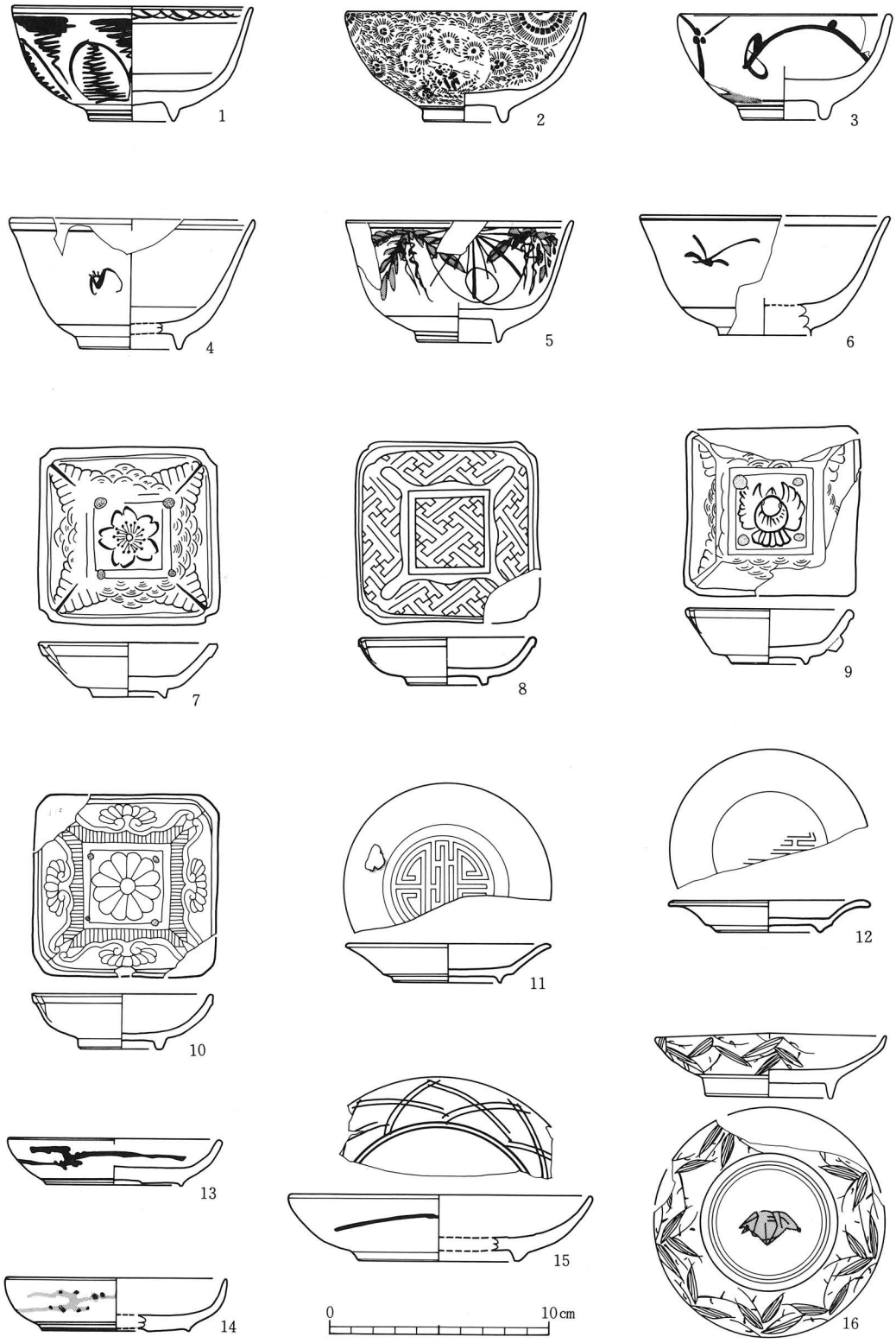


図28　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅰ（磁器）

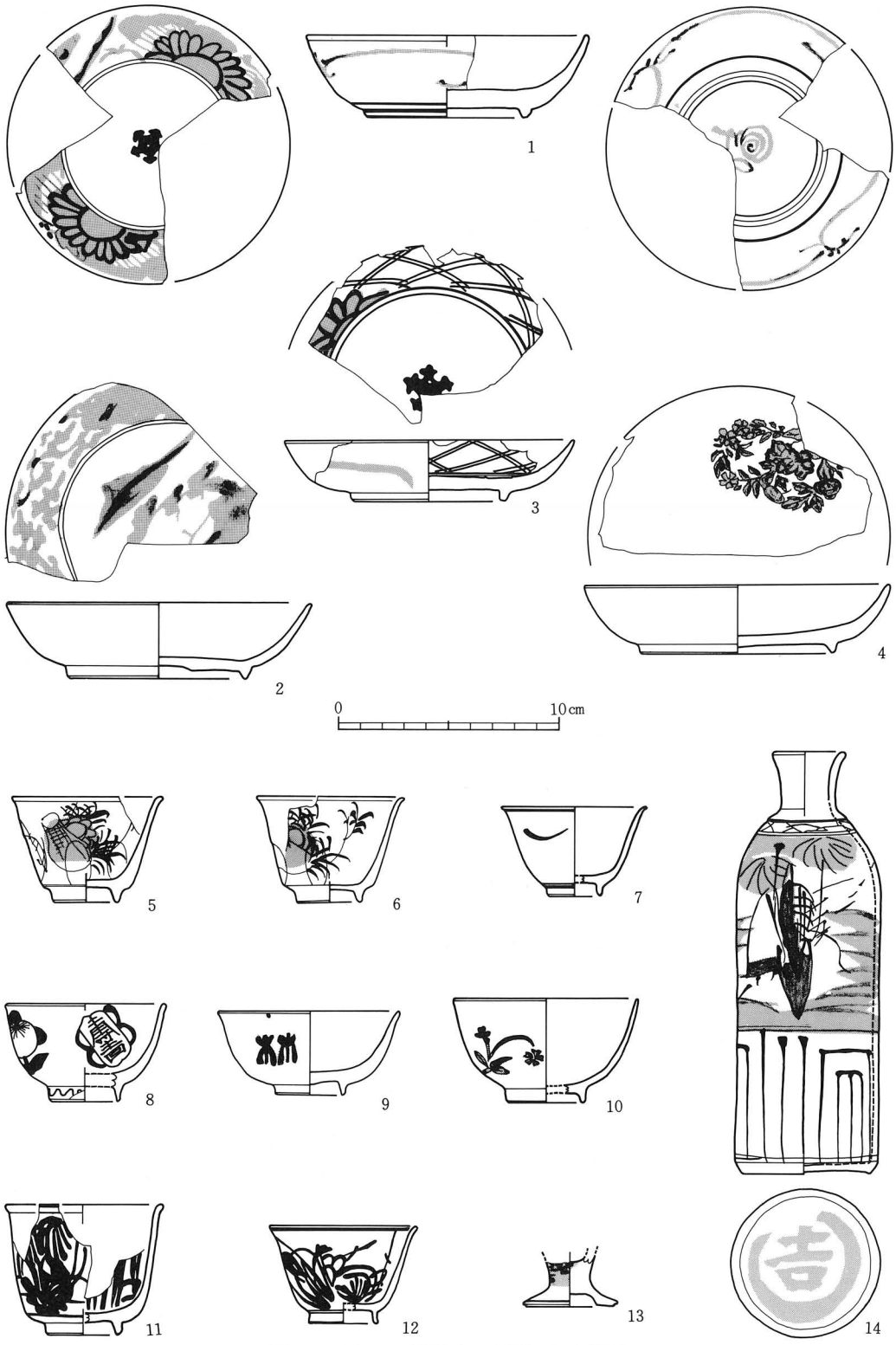


図29　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅱ（磁器）

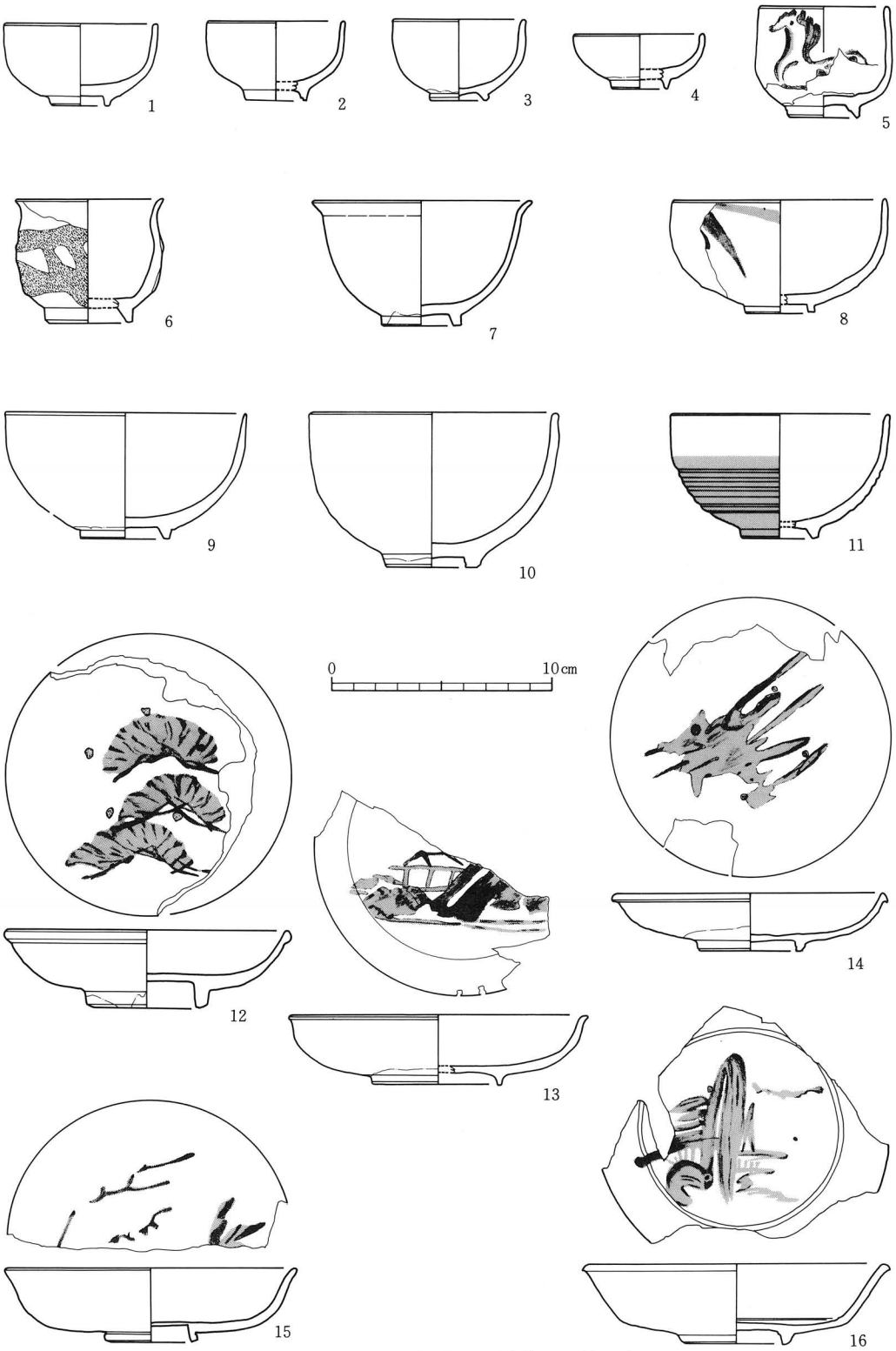


図30　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅲ（陶器）

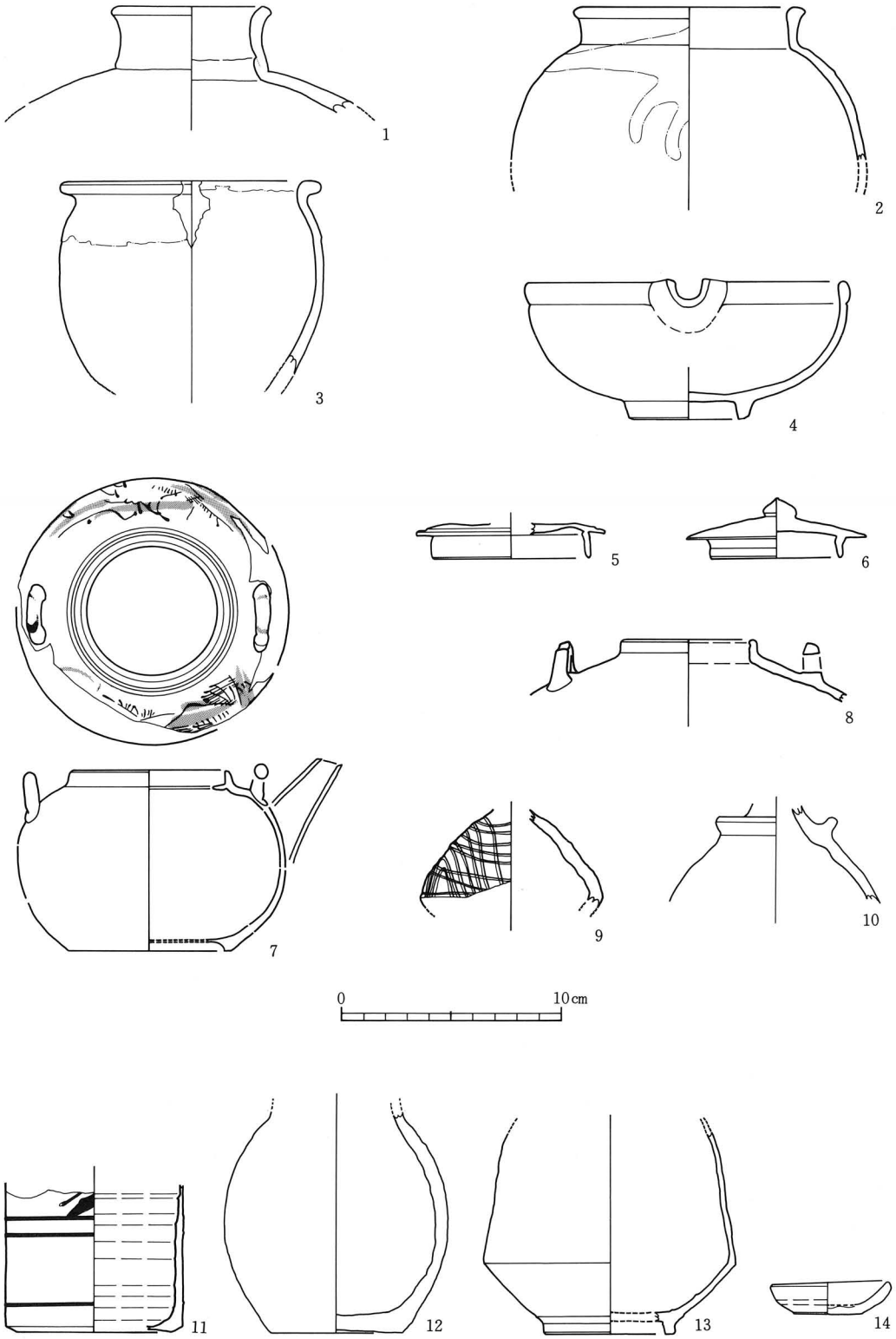


図31　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅳ（陶器・土師質土器）

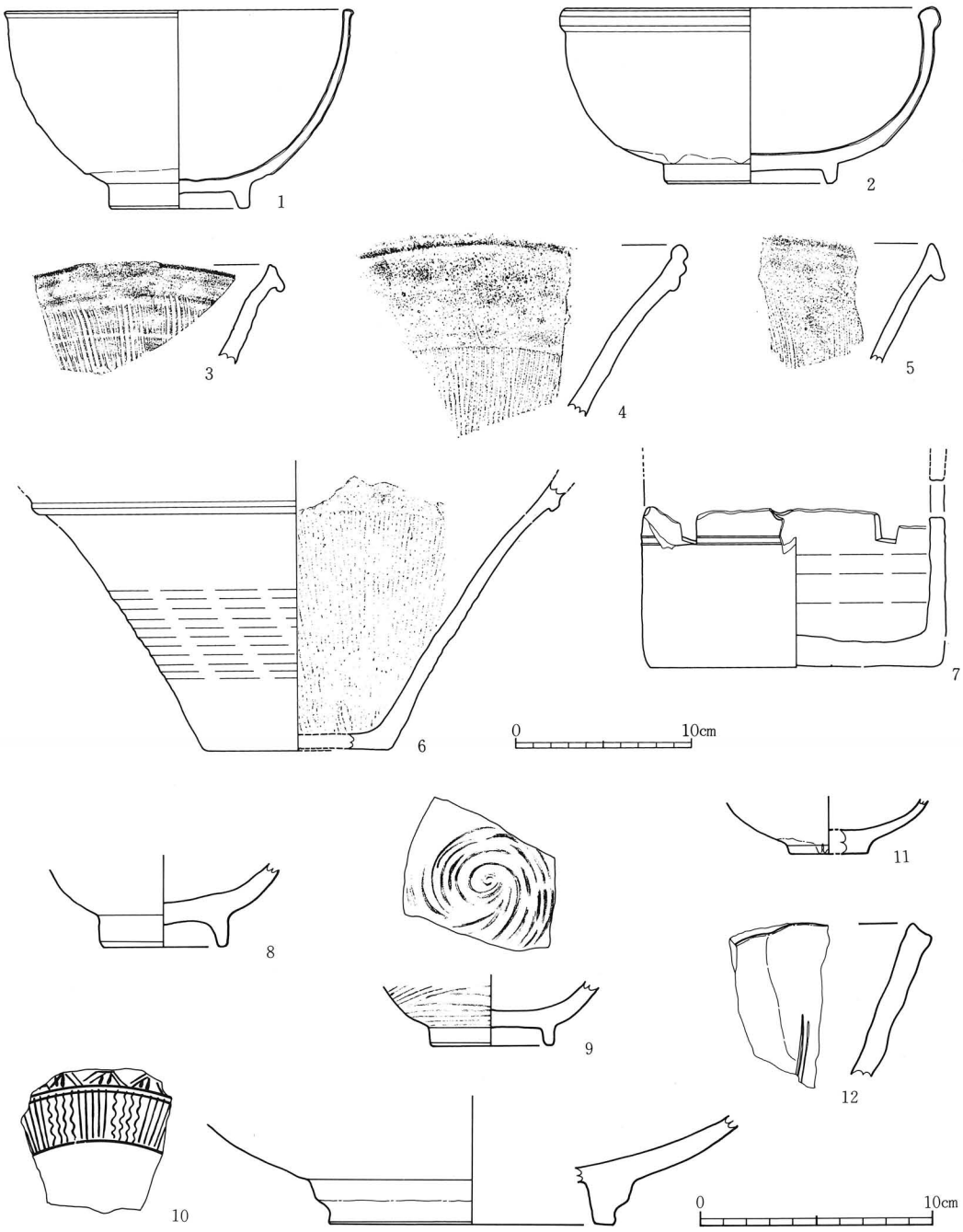


図32　ＳＤ209 溝跡出土遺物Ⅴ（陶器・磁器・中世陶器）

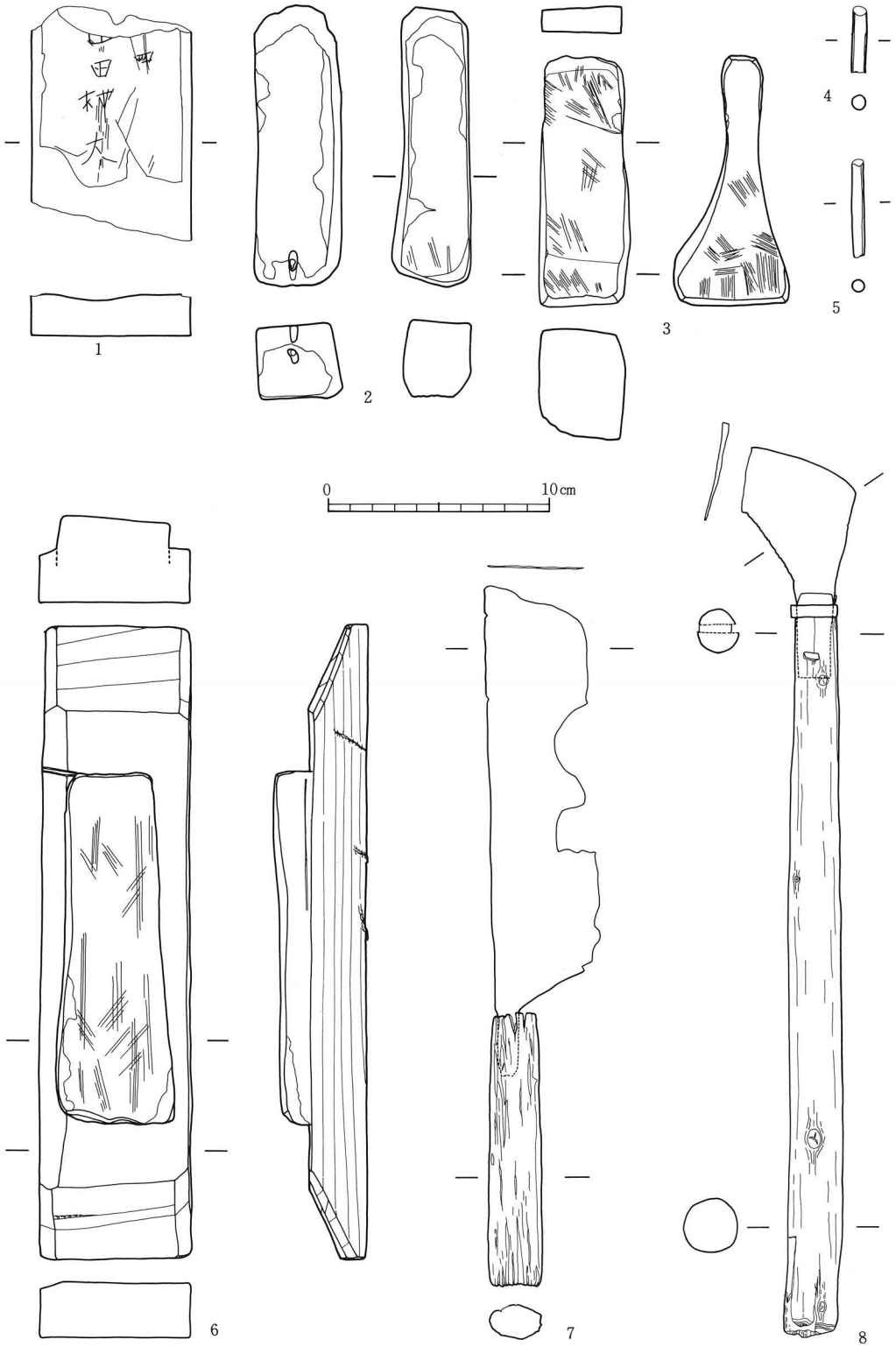


図33　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅵ（石製品・金属製品）

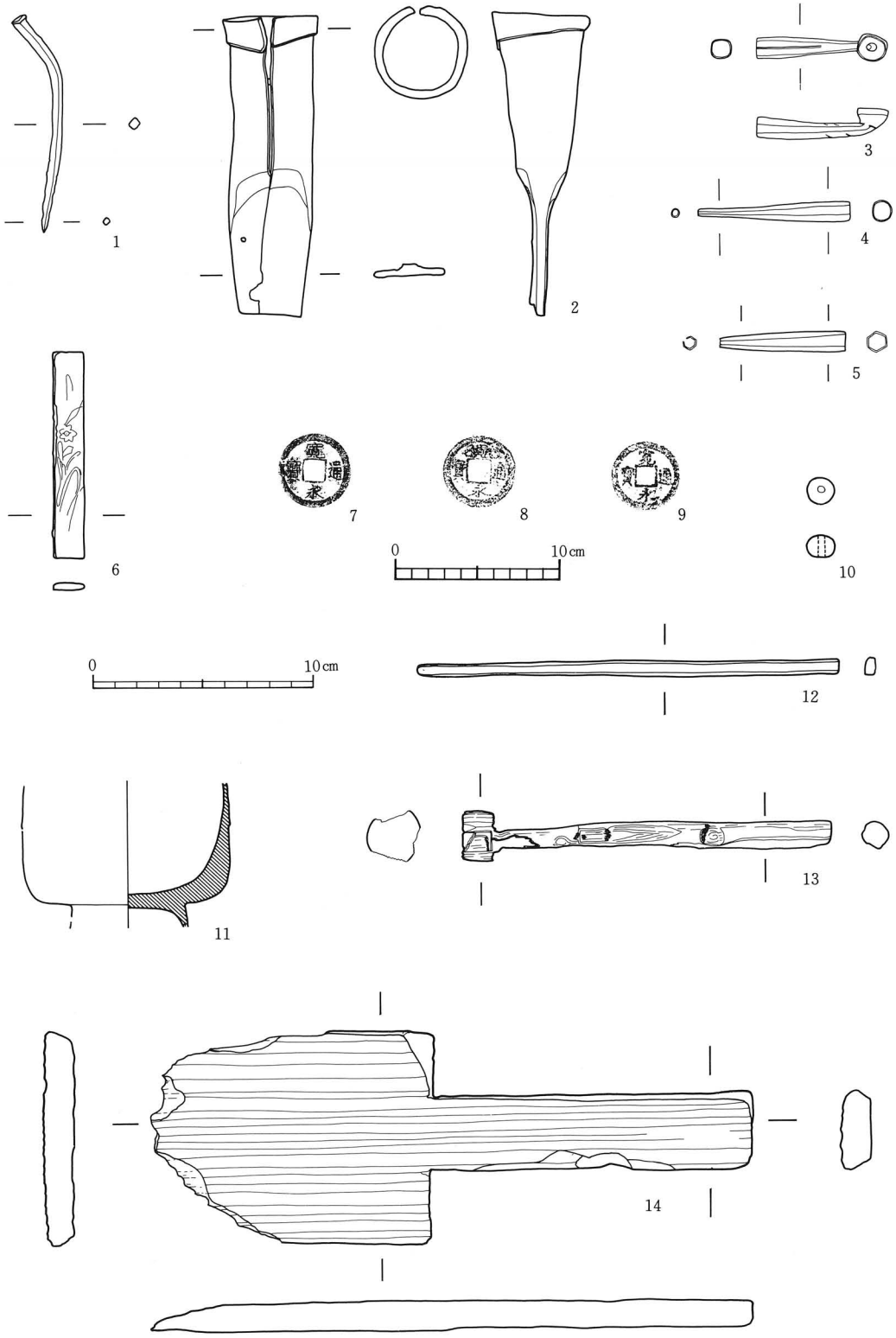


図34　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅶ（金属製品・ガラス製品・木製品）

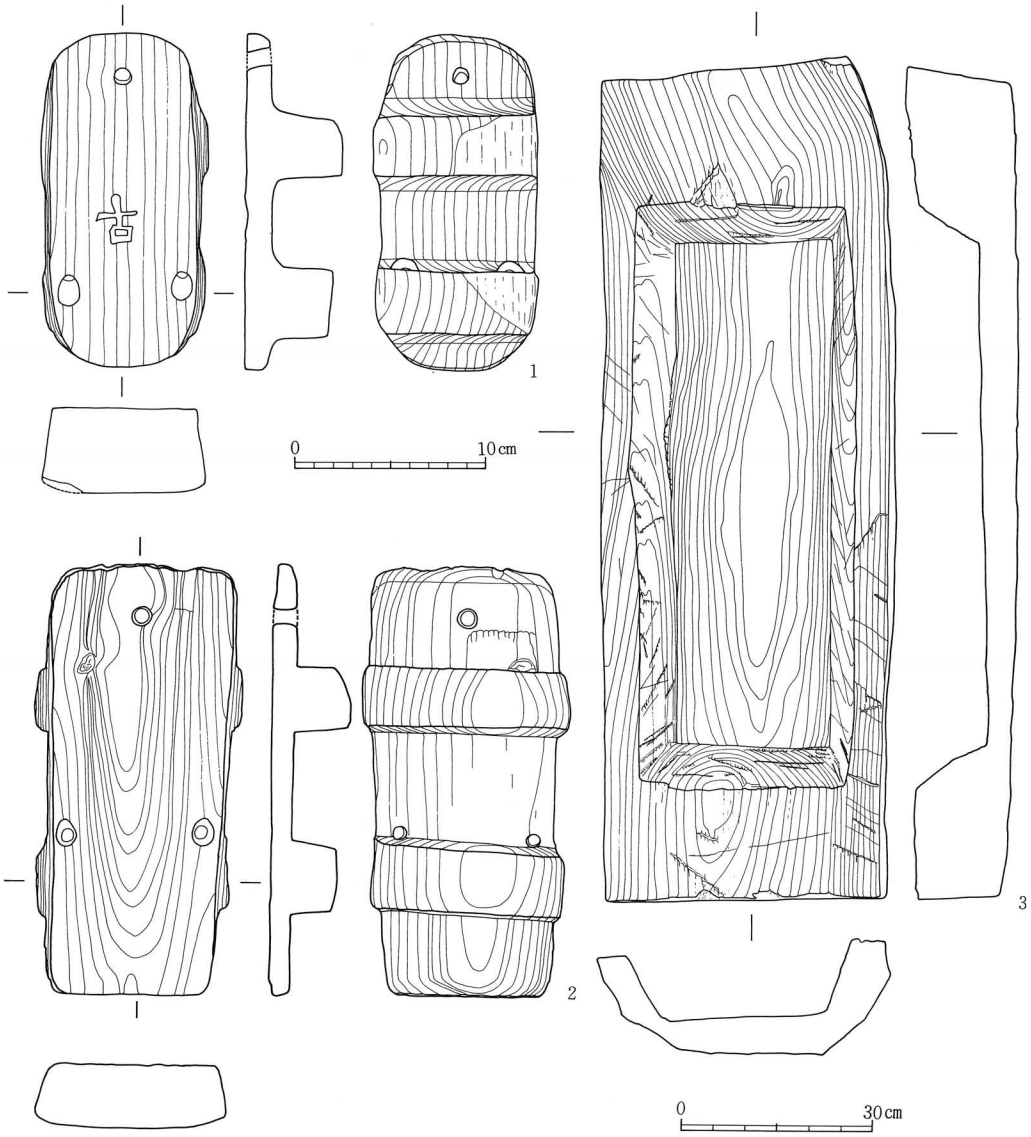


図35　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅷ（木製品）

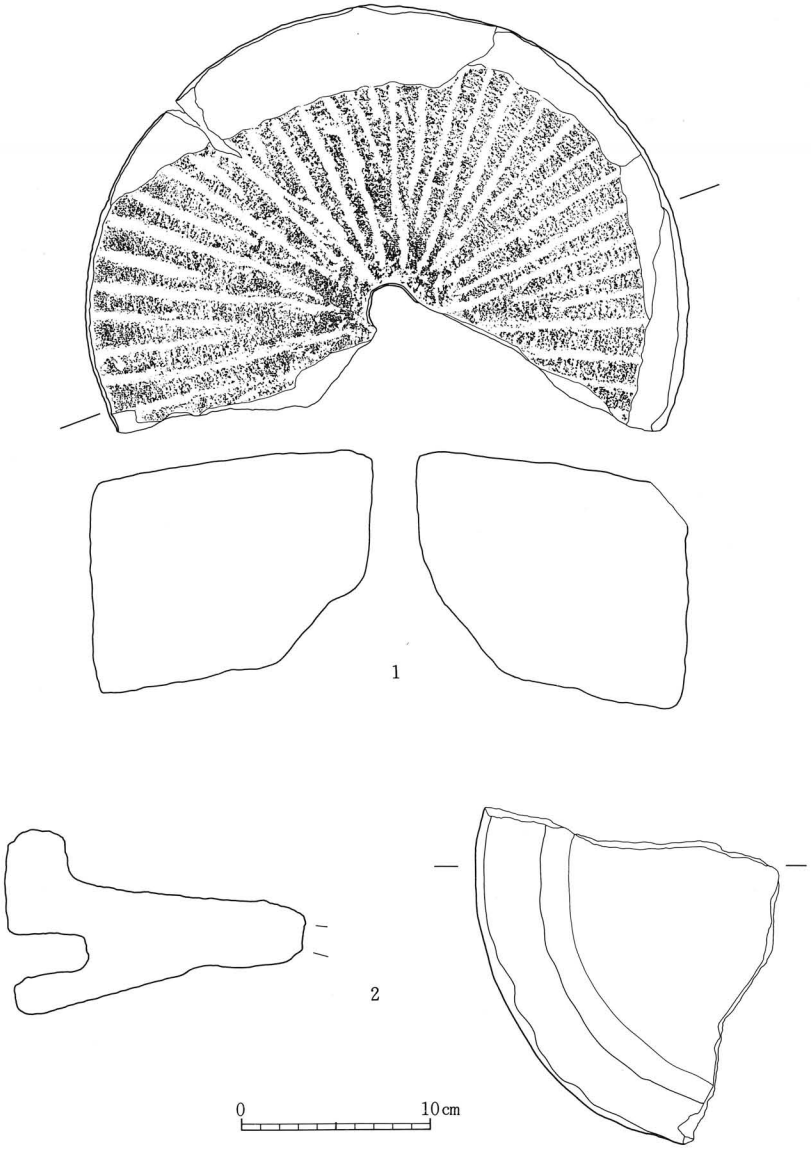


図36　ＳＤ209溝跡出土遺物Ⅸ（石製品）

【５層面検出遺構】

ＳＫ213土坑＝平面形は不整の円形で長軸120cm、短軸102cm、深さ22cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は１層で黄灰色の粘土質シトルである。遺物はない。

ＳＫ214土坑＝平面形はやや角張った円形で軸長110cm、深さ45cmを計る。断面形は幅広のＵ字状であるが部分的に袋状となっている。堆積土は１層で黄灰色の粘土である。遺物はない。

ＳＫ215土坑＝平面形は不整の方形で軸長170cm、深さ32cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は黄灰色と黄褐色の混合層である。籾殻が底面より出土している。

ＳＫ216土坑＝平面形は長円形と考えられる。長軸95cm以上、短軸85cm、深さは18cmを計る。断面形は皿状である。堆積土は１層で黄灰色の粘土質シルトである。遺物はない。

ＳＫ217土坑＝ＳＤ209に切られているが平面形は方形と考えられる。長軸200cm以上、短軸130cm、深さ35cmを計る。断面形は皿状であるが底面に軽い段がみられる。堆積土は２層確認され褐色系のシルト及び粘土である。遺物はない。

○Ｆトレンチのまとめ

当調査地点では基本層１・２・５層の３枚の層を確認したが基本層３層は確認されず、２層も土色は類似するが水田土壌とは相違がみられた。起因は生活の場からくるものと考えられるが詳細は明らかではない。

「名取郡北方山田邑」絵図に描かれている「ヤチヤシキ」と考えられる堀跡を検出したが、北西コーナーはほぼ直角に屈曲し東側へ延びるが、南西部は緩やかに弧状に延び現代の大畦が沿う配置となっている。西辺部は約90cmを計り、東側部が未確認ではあるが広大な敷地面積を有する。堀内には陶器・磁器・下駄・鎌等の生活雑器品類が樹木片と共に大量に廃棄されており、この時期に「ヤチヤシキ」が廃絶したものと判断される。廃絶年代は遺物・地籍図から検討して明治の中頃かと考えられる。

土坑は性格が不明であるが、堆積土状況等から判断して新しいものかと考えられる。

⑤Ｇトレンチ

５層面で倒木痕跡を２基確認したのみである。基本層は１ａ・１ｂ・２・３ａ・３ｂ・５層を確認した。２層が厚く層厚10～20cm程あり、底面には撹拌の凹凸が顕著にみられた。

⑥１・２・３・４トレンチ

当調査区は他の地点に較べやや標高値が高く、東西に延びる微高地となっている。「名取郡北方山田邑」絵図に「観世音」と記された御堂が描かれており、４トレンチ付近と推定された。微高地部分の性格把握のため４本の調査区を設けた。水田面での基本層位とほぼ同じ層を確認しているが土性には違いがみられる。１・２トレンチで土坑、３トレンチでピット、４トレンチでは溝跡・掘立柱建物跡を検出した。

【２ａ面検出遺構】

ＳＤ208溝跡＝直線状に延びる。上端幅110cm、下端幅45cm、深さ20cm（南壁面では40cm）を計る。断面は皿状である。堆積土は２層確認し、褐色系のシルトである。下面はレンズ状堆積を示すが、上部に盛土がみられ埋め戻されている状況が観察される。遺物はない。

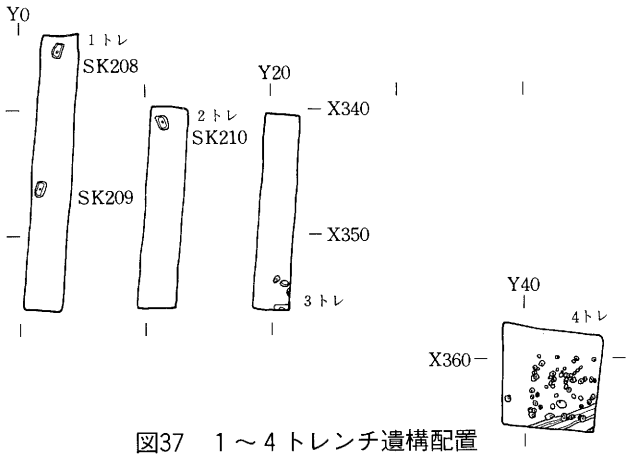


図37　１～４トレンチ遺構配置

【２ｂ層面検出遺構】

ＳＢ201建物跡＝東西方向３間・南北方向２間の東西棟の建物跡である。建物方向は東側柱列でＮ－５°－Ｅである。柱穴掘り方はすべて円形で、径30～35cm程で、深さは最大で45cm程を計る。柱痕跡が確認されるものは径10～17cm程で円形である。柱穴埋土は黒色及び褐色土が使用されている。柱間寸法は北側柱列で西から138＋148＋139cmで総長425cm、東側柱列で北から173＋132cmで総長305cmを計る。遺物はない。

ＳＢ202建物跡＝東西方向３間・南北方向２間の東西棟の建物跡である。建物方向は西側柱列でＮ－２°－Ｅである。柱穴掘り方は円形を基調とし径30～40cm程であるが、南側桁の柱穴は規模がやや大きく長軸60cm程を計る。柱痕跡の確認されるものは径13～20cm程の円形で、深さは最大で45cm程である。柱穴埋土は黒色土・褐色土である。柱間寸法は南側柱列で西から153＋100＋145cmで総長398cmを計る。ＳＢ203と重複関係にあり切られている。遺物はない。

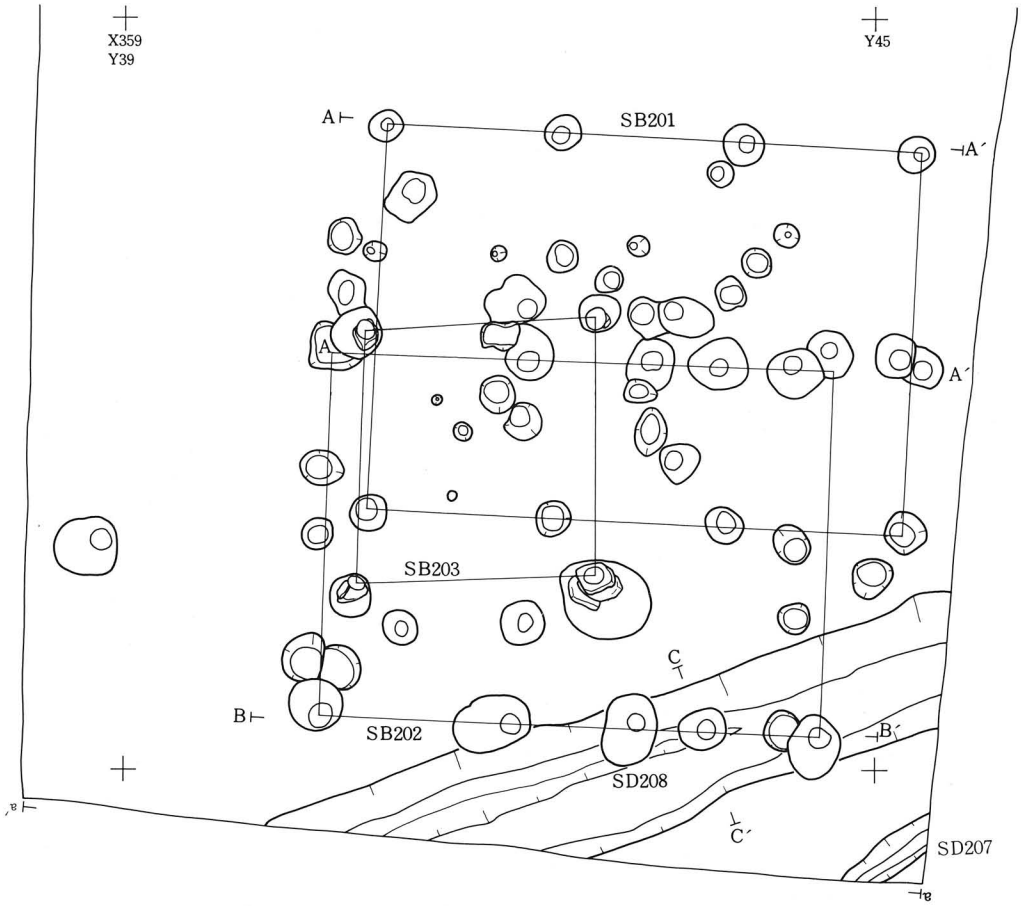
ＳＢ203建物跡＝１間×１間の建物跡である。柱穴底面に20～25cm大の河原石を礎板として据えている。建物方向は西側柱列でＮ－２°－Ｅである。柱穴掘り方は円形で径30～35cm程であるが径80cmのものもみられる。柱痕跡は径10～15cmの円形で、深さ15cmを計る。柱穴埋土は黒色・褐色土である。柱間寸法は東西柱列で190cm、南北柱列で200cmを計る。遺物はない。

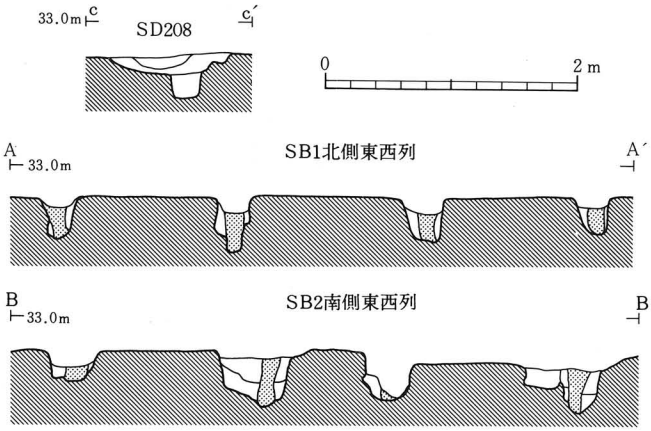
ＳＤ207溝跡＝部分的確認である。確認長は1.3mである。上端幅60cm、下端幅20cm、深さ40cmを計る。断面形はＵ字状である。堆積土は１層で黒褐色のシルトである。遺物はない。

【５層面検出遺構】

ＳＫ208土坑＝平面形は不整の長方形である。長軸124cm、短軸74cm、深さ46cmを計る。断面形は箱形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央部に径13cm、深さ24cm程のピットが１基みられる。遺物はない。

ＳＫ209土坑＝平面形は不整の長方形である。長軸133cm、短軸75cm、深さ40cmを計る。断面形は箱形で壁は垂直に立ち上がる。堆積土は４層確認した。褐色系の砂質シルト・砂である。





層	土　　色	土　性	備　考
1 a	褐　　色 10YR4/4	シルト	
1 b	褐　　色 10YR4/4	シルト	盛土
1 c	暗　褐　色 10YR3/3	シルト	盛土
2 a	暗　褐　色 10YR3/3	シルト	
2 b	暗　褐　色 10YR3/4	シルト	
①	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	SD208
②	灰黄褐色 10YR5/2	砂	SD208
③	黒　褐　色 10YR2/3	シルト	SD207

第38図　掘立柱建物跡・溝跡

底面は平坦である。底面中央に径20cm、深さ27cmのピットが１基みられる。遺物はない。

ＳＫ210土坑＝平面形は不整な長方形である。長軸120cm、短軸83cm、深さ20cmを計る。断面は皿状で、底面は平坦である。底面中央部に径20cm、深さ32cmのピットが１基みられる。遺物はない。

○１・２・３・４トレンチのまとめ

17トレンチで大畦北側で東西に延びる溝跡（ＳＤ213）を検出しているが、ＳＤ208も同様な地点に位置する共通点がみられ、同じ溝跡の可能性があり、ＳＤ209から続くものかと考えられた。建物跡は３棟確認したが、柱痕跡をもつ柱穴が数多くみられ、他にも建物跡の存在が想定されたが不定である。「御堂」との関連が窺われたが詳細は不明である。土坑は形態等から判断して「陥し穴」と考えられる。

⑦５・６・７トレンチ

当調査地点では東西に延びる大畦畔及びそれに取り付く南北方向の畦畔の下層状況把握のために３本のトレンチを設定した。基本層は１・２・３・５層の４枚を確認したが、全体的に砂質土壌で５層は粘土質の砂となる部分が多い。下層畦畔に関する状況は７トレンチで２層面で擬似畦畔を１条確認したのみにとどまっている。５トレンチでは土坑が２基確認された。

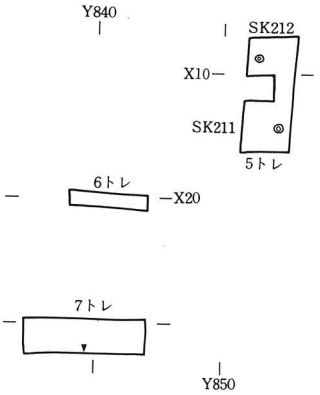


図39　５～７トレンチ配置

【５層面検出遺構】

ＳＫ211土坑＝平面形はほぼ円形で、軸長75cm、深さ16cmを計る。断面は皿状である。堆積土は１層でにぶい黄褐色の砂質シルトである。５層をブロック状に含んでいる。遺物はない。

ＳＫ212土坑＝平面形は長円形を呈する。長軸80cm、短軸65cm、深さ10cm程を計る。断面は皿状である。堆積土は１層で褐灰色のシルトである。遺物はない。

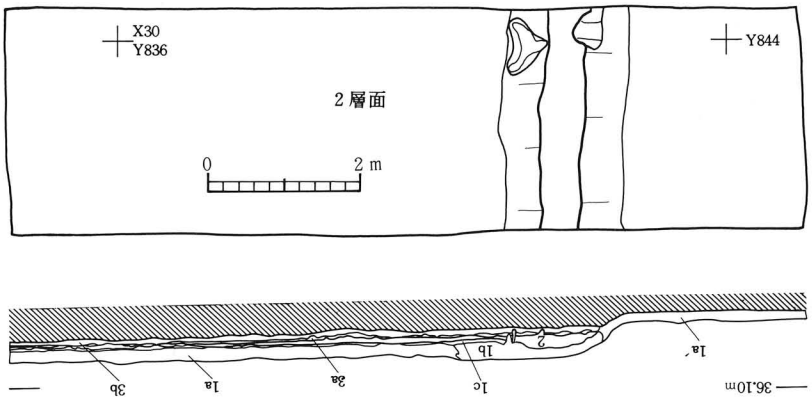


図40　７トレンチ平面・断面

⑧8・9・10・11トレンチ

7トレンチ南側約70m地点に位置する。現代畦畔下層面状況把握のために4本のトレンチを設定した。基本層は大別で1・2・3・5層の4枚を確認したが、下層状況は10トレンチで1b層面で擬似畦畔を1条確認したにとどまる。

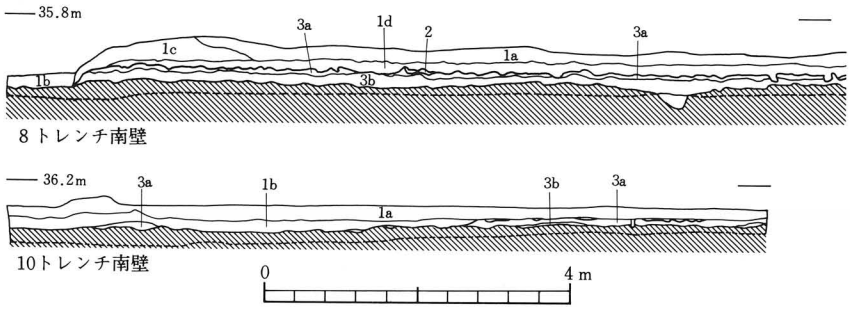


図42　8・10トレンチ壁断面

⑨平成2年度調査のまとめ

検出遺構として水田跡・溝跡・掘立柱建物跡・土坑・炉跡・河川跡・倒木痕跡が確認された。出土遺物の大半はSD209溝跡（堀跡）のもので、他の遺構からの出土は極めて少なく、層中出土のものが少量みられる。基本層は大別で5層確認したが地点間で細別層の対比に難がある地点がある。遺構確認は2a・2b・3・3b・4・5層の6面となる。元年度調査同様に3層以下では土器類・石器のみが出土し、陶磁器類等の遺物は2層までに限定され、4層中には縄文土器・石器が含まれる。これらから遺構の状況も含めて2層は近世頃、3層は平安期頃、4層は縄文時代の年代が推定される。

水田跡＝2層水田跡及び3b層水田跡を計5ケ所確認している。上層の削平のためかすべて擬似畦畔Bとしての検出である。2層水田跡は各調査区で散在的に検出され、水路跡等の関連施設は確認されなかった。畦畔方向は真北に対し1～18度程東西に振れるが、基準方向は真北と考えられる。3b層水田跡はBトレンチ1ケ所での確認である。B180地点でSD211・212が検出され、同水田跡に関連する水路跡と考えられるが畦畔との距離が50m程あり詳細は明らかではない。なお、B150地点では牛の足跡が検出されている。部分的な確認であり歩行方向等は知り得ないが牛耕の痕跡とも考えられる。

溝跡＝2層面で7条、3b層で2条の計9条確認した。2層面検出の溝跡

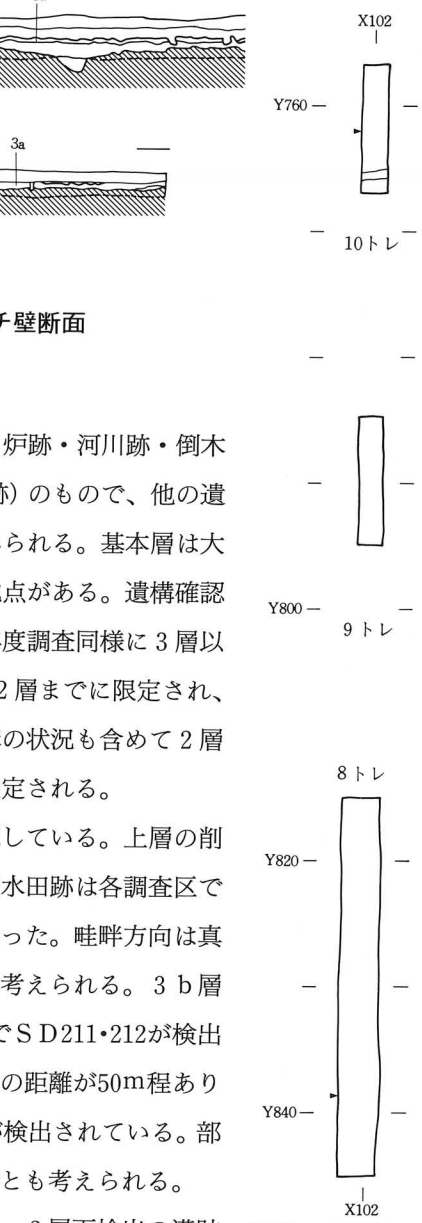


図41　8～11トレンチ配置

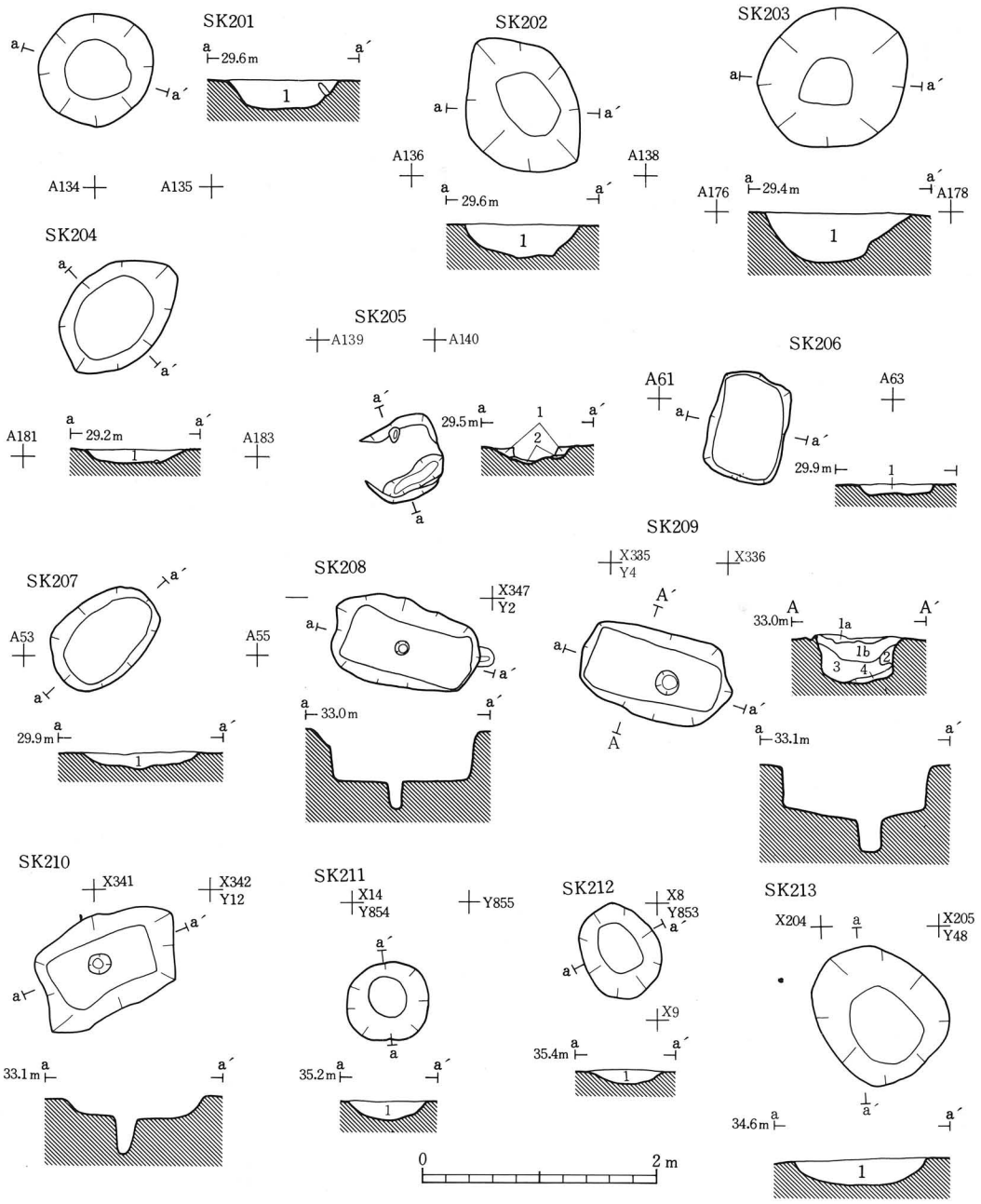
（ＳＤ201・202・203・207・208・209・213）は微高地に位置する。ＳＤ209は検出状況等から近世の堀跡と判断され、「絵図」に描かれている「ヤチヤシキ」の西側堀跡であることが確認された。ＳＤ213は同一堀の南辺部にあたるものと考えられ、４トレンチのＳＤ208はヤシキから東側へ延びる溝跡かと考えられる。他の溝跡は耕作に関するものと考えられるが性格不明である。３ｂ層検出のＳＤ211・212は部分的確認で全容が不明であるが、周辺状況から判断して水路としての性格をもつものと考えられる。確認面が３ｂ層で堆積土に灰白色火山灰が含まれており、大きく平安時代の時期が想定される。両者は近接しており同時期存在が考えにくいが新旧関係は明らかではない。

掘立柱建物跡＝柱筋が通り方形に組み合うものとして３棟の建物跡を認定したが、他にも柱穴がみられ更に建物跡の存在が予想される。基本層２層が確認面となり近世以降の年代が考えられる。柱穴は一地点に集中しており複数の建物跡の同時存在は考えにくく建物跡１棟が単体で存在していたと考えられ、立て替えが繰り返されたものと判断した。ＳＢ203が新しくＳＢ201とＳＢ202の新旧関係は明らかではない。柱間隔の３棟とも違いがみられ規則性は確認されない。柱穴掘り方は30cm内外と小さく柱痕跡も15cm程である。これらから判断して上屋構造は簡易なものかと考えられる。「絵図」に描かれている観世音と記された御堂風の建物は一間四方のもので、あえて比定すればＳＢ203建物跡かとも考えられるが断定は出来ない。

土坑＝計24基確認している。確認層は２・５層であるが、上層が基本層１層となるものがすべてである。平面形態は円形と方形の２種類に分けられる。１・２トレンチ確認のＳＫ208～210土坑は形態・底面状況から「陥し穴」と考えられるもので、地形的にも他の土坑とは区別される地点に位置している。ＳＫ206土坑は壁の一部に焼面がみられ堆積土には焼土・炭化物が含まれ焼成遺構の性格が考えられた。その他の土坑は耕作にかかわるものとは考えられるが性格は不明である。「陥し穴」とした土坑を除き時期は不明である。

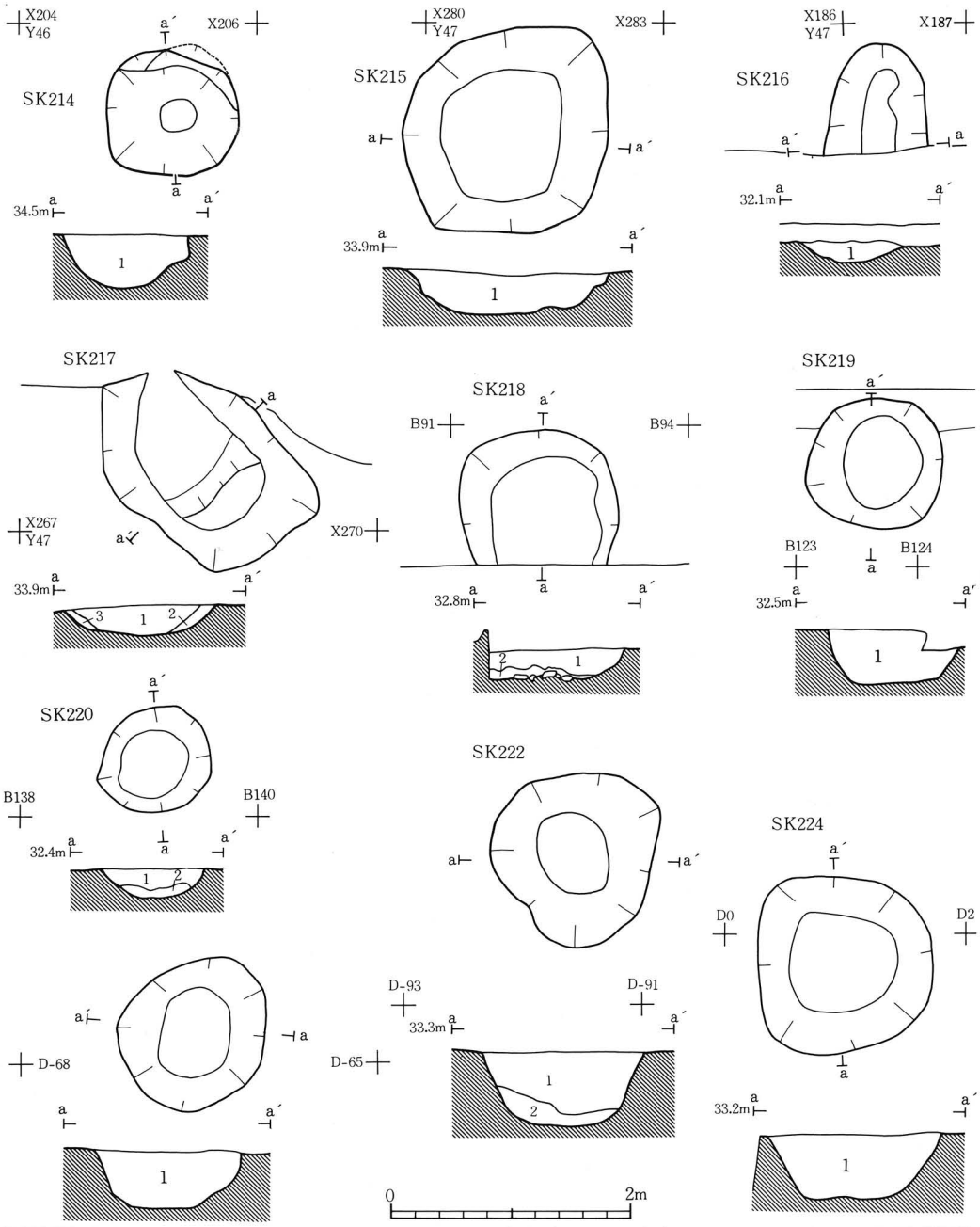
炉跡＝石組炉跡を２基確認した。掘り方埋土が基本層４層に類似しており、遺物の出土はないが縄文時代のものと考えた。礫に焼面がみられ形態等から炉跡と判断したが、石組は山状に積み上げた状況がみられ崩落とも考えられたが他の性格をもつものとも考えられる。

河川跡・倒木痕跡＝図示は省略した。５層面で７条の河川跡、４・５層面で12基の倒木痕跡を確認している。



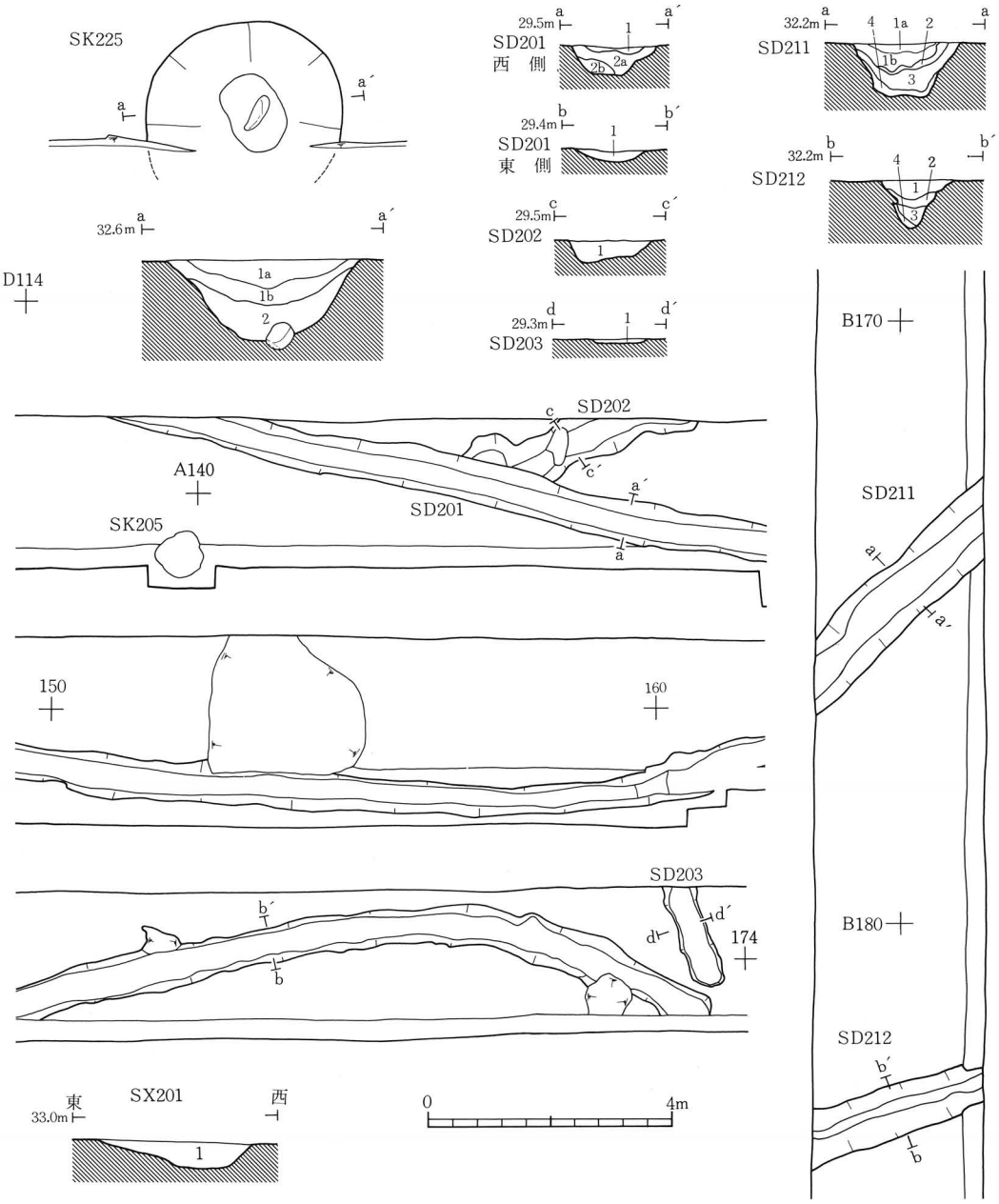
	層	土　色	土　性	備　考		層	土　色	土　性	備　考
SK201	1	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	基本層1～3、砂の混合層	SK209	1a	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	凝灰岩粒、小礫を含む
SK202	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	基本層5、砂の混合層		1b	褐色 10YR4/4	砂質シルト	凝灰岩粒、小礫を含む
SK203	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	基本層5、砂の混合層		2	黄褐色 10YR5/8	砂質シルト	基本層5層
SK204	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト			3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	凝灰岩粒、小礫を含む
SK205	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物、焼土多量に含む		4	暗褐色 10YR3/3	砂	凝灰岩粒、小礫を含む
	2	黒色 10YR1.7/1	粘土質シルト		SK211	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	基本層5層をブロック状に含む
SK206	1	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	焼面、焼土、炭化物を含む	SK212	1	褐灰色 10YR5/1	シルト	
SK207	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト		SK213	1	黄灰色 2.5Y4/1	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む

図43　検出遺構Ⅰ（土坑）



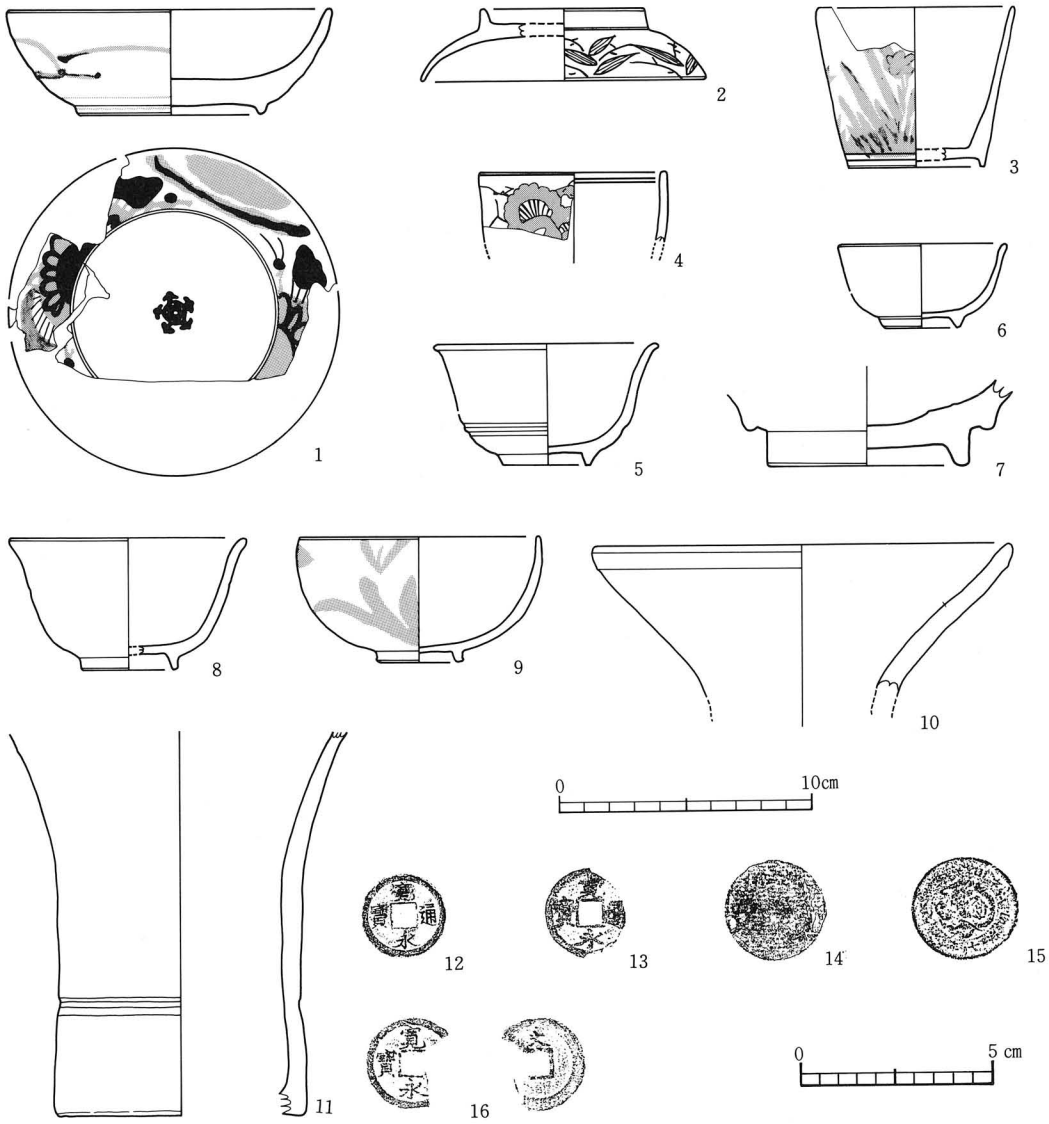
	層	土　色	土　性	備　考		層	土　色	土　性	備　考
SK214	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	粘　土		SK218	2	暗　褐　色 10YR3/4	粘　土	
	2	黄　灰　色 2.5Y4/1	粘　土		SK219	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	粘　土	酸化鉄を含む
SK215	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	砂質シルト	底面にモミガラ	SK220	1	褐　灰　色 10YR4/1	粘　土	砂、マンガン粒を含む
SK216	1	黄　灰　色	粘土質シルト			2	褐　　色 10YR4/6	砂	マンガン粒を含む
SK217	1	黒　褐　色 10YR2/2	砂質シルト		SK222	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	砂質シルト	マンガン粒、酸化鉄を含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト			2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘　土		SK223	1	褐　灰　色 10YR5/1	粘土質シルト	マンガン粒を含む
SK218	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	粘　土	黒褐色粘土、酸化鉄を含む	SK224	1	黄　灰　色 2.5Y4/1	シ ル ト	酸化鉄を少量含む

図44　検出遺構Ⅱ（土坑）



	層	土　色	土　性	備　考		層	土　色	土　性	備　考
SK25	1a	黒褐色　2.5Y3/2	砂質粘土		SD211	1b	黒褐色　10YR2/2	粘　土	酸化鉄、シルトを含む
	1b	暗灰黄色　2.5Y4/2	砂質粘土	層下部に砂を層的に含む		2	灰黄褐色　10YR4/2	砂質粘土	酸化鉄、マンガン粒を含む
	2	黒褐色　2.5Y3/1	砂質粘土	マンガン、酸化鉄粒を含む、木片あり		3	褐灰色　10YR4/1	砂質粘土	
SD201 西側	1	黒褐色　7.5YR2/2	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を含む		4	灰黄褐色　10YR4/2	砂質粘土	酸化鉄粒を含む
	2a	黒褐色　10YR2/2	粘土質シルト	灰白色火山灰を少量含む	SD212	1	黒褐色　10YR2/2	粘　土	酸化鉄粒を含む
	2b	黒褐色　10YR2/3	粘土質シルト	5層を含む		2	褐灰白色　7.5YR4/1	シルト質粘土	灰白色火山灰を含む
SD201	1	黒褐色　10YR2/3	シルト	5層を含む（東側）		3a	黒褐色　7.5YR3/1	シルト質粘土	灰白火山灰を含む
SD202	1	黒褐色　10YR2/2	シルト			4b	黒褐色　7.5YR3/2	シルト質粘土	
SD203	1	黒褐色　10YR2/2	シルト		SX201	1	黒褐色　10YR2/2	粘　土	
SD211	1a	黒褐色　10YR2/2	粘　土	酸化鉄を含む					

図45　検出遺構Ⅲ（土坑・溝跡・性格不明遺構）



図・番	種別	器種	出土地点	口径	底径	器高	特徴	産地	年代	写真図版
46－1	磁器	皿	Fトレンチ X310 1層	128	74	42	五弁花、高台内に渦福	肥前	18世紀	
46－2	磁器	蓋	Fトレンチ	55	64	29	染付、笹文	肥前	幕末～明治？	
46－3	磁器	猪口	Fトレンチ X300 1層	77	53	64	染付、アヤメ？	肥前？	江戸時代	47－22
46－4	磁器	碗	15トレンチ	74	－	－	染付碗	不明	幕末～明治	
46－5	陶器	埦	Fトレンチ X310 1層	88	34	48	白濁釉	大堀相馬	幕末？	
46－6	陶器	小埦	Fトレンチ X310 1層	65	30	34		大堀相馬	幕末～明治	
46－7	陶器	鉢	表採	－	76	－	淡青色の釉	不明	幕末～明治	
46－8	陶器	埦	Fトレンチ X310 1層	92	39	52	白濁釉	大堀相馬	幕末？	
46－9	陶器	埦	17トレンチ 1層	94	33	50	灰釉、色絵土絵付、草花文、京焼系	瀬戸美濃？	18世紀以降	
46－10	陶器	鉢	Fトレンチ X310 1層	165	－	－	鉄釉	堤	幕末～明治	
46－11	縄文土器	深鉢	B 0～10 4層	－	100	－	外面－ヘラミガキ・横位方向の沈線1系、内面－ヘラミガキ(加曽利B式)			
46－12	古銭		B80～90 1層	「寛永通宝」銅貨						49－13
46－13	古銭		4トレンチ 1層	「寛永通宝」銅貨						49－16
46－14	古銭		表採	「竜1銭銅貨」明治7年						
46－15	古銭		Fトレンチ 1層	「竜1銭銅貨」						
46－16	古銭		表採	「寛永通宝」銅貨						49－15

図46 出土遺物

3) 平成３年度調査の成果

調査対象地域は当遺跡南側に位置する。調査区として水路設置部分に１～９・16～19・20の長大なトレンチを設け、現代畦畔下層及び下層状況把握のために10～15の６本の小トレンチを設置した。基本層位は大別で５枚の層を確認した。発見遺構として、水田跡・土坑・溝跡・河川跡・倒木痕跡がある。以下、調査地点毎に遺構・遺物について記述して行く。

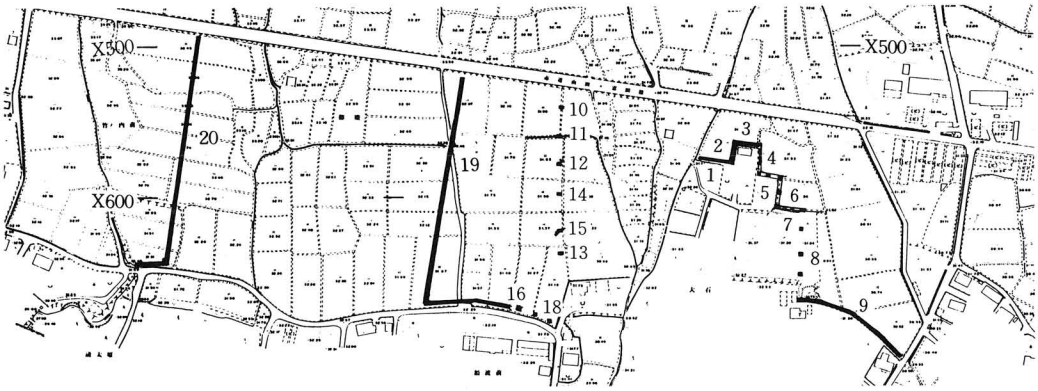


図47　平成３年度調査地区

①１～９トレンチ

宅地周縁部を取り巻く調査区で、開田に伴う削平及び盛土を受け遺存不良地点があり調査を割愛した箇所がある。基本層位は３枚確認したが、１層直下が４層及び５層となる。遺構は土坑・倒木痕跡のみである。

【４層面検出遺構】

ＳＫ301土坑＝１トレンチ東側に位置する。平面形はほぼ円形である。長軸140cm、短軸115cm、深さ最大で52cmを計る。断面は底面が傾斜をみるが逆台形状である。堆積土は１層で基本層１・４層の混合層である。石器片が１点出土している。

ＳＫ302土坑＝４トレンチ中央に位置する。平面形は不整の方形を呈すると考えられる。長軸は137cm以上、短軸75cm、深さ最大で22cmを計る。底面が凹凸で断面はW形を呈している。堆積土は１層で黒褐色の砂質シルトである。遺物はない。

倒木痕跡＝１トレンチの４層面で１基確認している。

②10～15トレンチ

２×４ｍのトレンチを縦位に６本設定し下層の状況観察を行った。基本層は１・２・３・５層の４枚を確認した。１層が厚く堆積し南側に向かうにつれて２・３層が遺存しない状況が確認された。３層下面は５層の河川堆積土で厚く広く分布しており、15トレンチでは河川跡の立ち上がりを検出している。

11トレンチ＝３ｂ層面において５層の盛り上がりを１条確認した。状況から擬似畦畔Ｂと考

えられ３ｂ層水田跡の存在が判断された。層厚は10～22cm程である。擬似畦畔は幅70cm程で直線状に延びており、軸方向はＮ－１°－Ｅでほぼ真北をむいている。遺物はない。

③16～19トレンチ

Ｌ字形の調査区となるが南端部は１層直下が５層の礫層となるため調査部分を割愛し小トレンチで対処している。基本層は大別で１・２・５層の３枚を確認したが、10～15トレンチ同様に河川堆積土が広く分布している。他の地点に比べて１・２層の色調が若干明るく５層はさらに細分される。

【５層面検出遺構】

２層水田跡＝Ｘ549～557Ｙ747地点において２層が堆積する方形状の落ち込み面を確認した。状況等から上部削平を受けた水田跡と判断した。北辺はやや丸みを帯びるが西辺は直線状で軸方向はＮ－10°－Ｗである。耕作土は３～10cm程残存している。層中より縄文土器・土師器・須恵器・陶器片が出土している。

ＳＫ304土坑＝平面形は円形で、径212cm、深さ55cmを計る。壁面がほぼ垂直に立ち上がり断面は箱形である。堆積土は１層で黒褐色の砂質シルトである。壁面に薄く炭化物が付着していた。遺物として磁器片が出土している。

ＳＫ305土坑＝平面形は長円形を呈すると考えられる。南北軸102cm以上、東西軸95cm、深さ30cmを計る。断面は逆台形である。堆積土は１層で褐色系の砂質シルトである。遺物はない。

④20トレンチ

【２ｂ層面検出遺構】

ＳＫ303土坑＝平面形は不整の円形で、長軸160cm、短軸130cm、深さ38cmを計る。断面は皿状である。堆積土は１層で黄灰色の砂質シルトである。陶器片が出土している。

【２ｂ層中検出遺構】

３ａ層水田跡＝東西方向に延びる畦畔を２条、南北方向のもの１条を確認した。区画は方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。畦畔は上端幅45～55cm、下端幅68～90cm、高さ４cm程を計る。畦畔１の方向はＮ－81°－Ｅ、畦畔２の方向はＮ－７°－Ｅ、畦畔３はＥ－２°－Ｓで畦畔２にほぼ直角に取り付く。畦畔１・３の比高差は15cm程で南東方向へゆるく傾斜している。層中よりロクロ使用の土師器坏

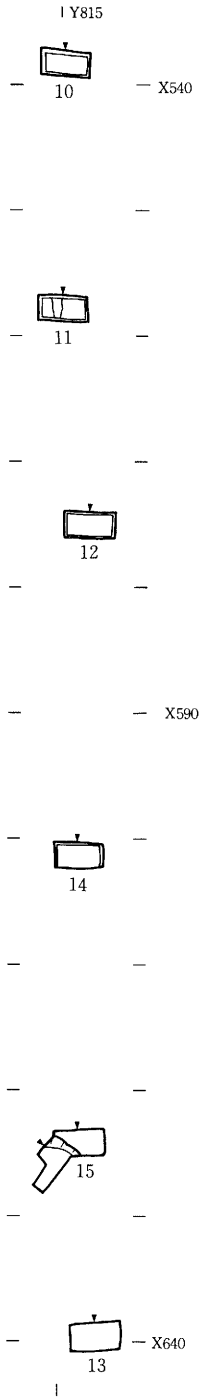
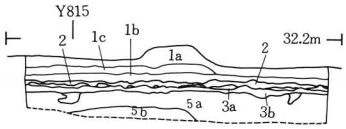
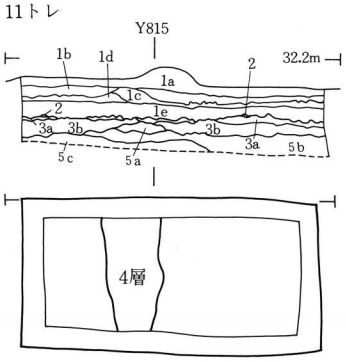


図48
10～15トレンチ

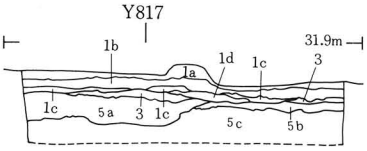
10トレ



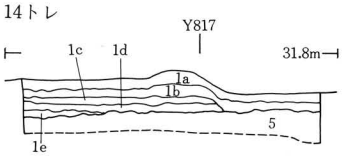
11トレ



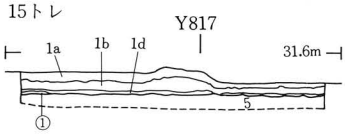
12トレ

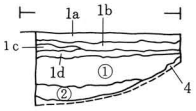


14トレ

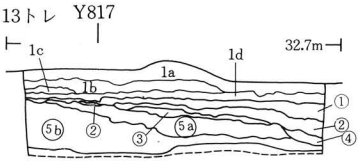


15トレ





13トレ



0　2 m

図49　10～15トレンチ平面・断面

10トレ

層	土色	土性	備考
1a	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む、現代作土
1b	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
1c	灰黄褐色 10YR4/2	砂質粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
2	黒褐色 10YR3/1	粘土	酸化鉄粒を含む
3a	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	
3b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
5a	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒、凝灰岩粒を含む
5b	灰黄褐色 10YR4/2	砂	凝灰岩粒多量に含む

11トレ

層	土色	土性	備考
1a	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	現代作土
1b	黄灰色 2.5Y4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
1c	灰色 5Y4/1	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
1d	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	マンガン粒を含む
1e	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
2	黒色 10YR1.7/1	粘土	
3a	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	火山灰、酸化鉄粒、マンガン粒を含む
3b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
5a	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
5b	黄灰色 2.5Y4/1	粘土	酸化鉄粒を少量含む
5c	暗オリーブ灰色 5GY4/1	砂質粘土	

12トレ

層	土色	土性	備考
1a	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	現代作土
1b	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	酸化鉄集積層
1c	黄灰色 2.5Y4/1	粘土	マンガン粒を含む
1d	褐灰色 10YR5/1	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
3	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む
5	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	凝灰岩粒、酸化鉄粒を含む、河川？
5b	オリーブ黒色 5Y3/1	砂質シルト	
5c	暗オリーブ灰色 5GY4/1	砂	

14トレ

層	土色	土性	備考
1a	灰色 5Y4/1	砂質シルト	現代作土
1b	灰色 5Y4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
1c	黄灰色 2.5Y4/1	砂質シルト	マンガン粒を含む
1d	灰黄褐色 10YR4/2	粘土	マンガン粒、酸化鉄粒を含む
1e	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	マンガン粒、酸化鉄粒を含む
5	灰黄褐色 10YR6/2		マンガン粒、酸化鉄粒を含む

15トレ

層	土色	土性	備考
1a	褐灰色 10YR5/1	粘土	現代作土
1b	褐灰色 10YR4/1	粘土	酸化鉄土を含む
1c	褐灰色 10YR6/1	粘土	酸化鉄土、マンガン粒を含む
1d	黄灰色 2.5Y4/1	粘土	マンガン粒を含む
5	黄褐色 10YR5/6	粘土	マンガン粒を含む
①	黒褐色 10YR3/1	粘土	河川堆積土
②	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	河川堆積土、炭化物粒を少量含む

13トレ

層	土色	土性	備考
1a	褐灰色 10YR5/1	粘土	現代作土
1b	褐灰色 10YR4/1	粘土	酸化鉄粒を含む
1c	褐灰色 10YR6/1	粘土	酸化鉄粒を含む
1d	黄灰色 2.5Y4/1	粘土	マンガン粒を含む
①	黒褐色 10YR3/1	粘土	河川堆積土
②	黒色 10YR1.7/1	粘土	河川堆積土
③	黒褐色 10YR3/1	粘土	河川堆積土
④	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質粘土	河川堆積土
⑤a	灰黄褐色 10YR5/2	砂質粘土	河川堆積土、灰白色火山灰を少量含む
⑤b	灰黄褐色 10YR6/2	砂質粘土	河川堆積土

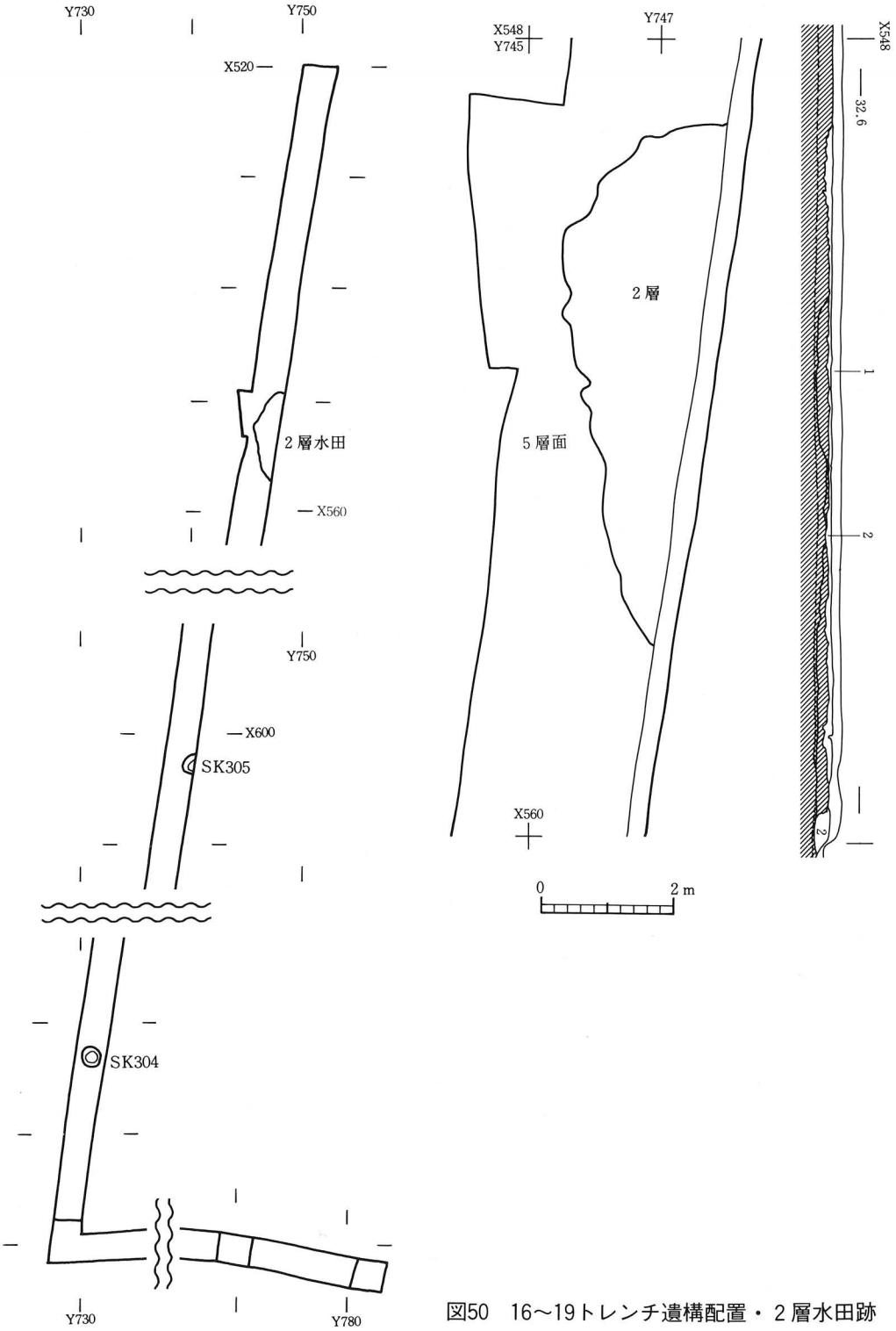


図50　16～19トレンチ遺構配置・2層水田跡

片が出土している。

【３ａ層中検出遺構】

３ｂ層水田跡＝東西方向に延びる畦畔を２条、南北方向のもの２条、計４条確認したが畦畔１は３ａ層の畦畔とほぼ同位置で畦畔２は南側のみの確認で段状となっている。水田面は５面検出したが区画は方形を呈すると考えられるが面積等詳細は不明である。畦畔は上端幅35～65cm、下端幅55～110cm、高さ５cm程を計る。畦畔１の方向はＮ－75°－Ｅ、畦畔２の方向はＮ－57°－Ｅ、畦畔３の方向はＥ－63°－Ｓ、畦畔４の方向はＥ－40°－Ｓである。畦畔１～４の比高差は10cm程である。遺物として縄文土器片がある。

【３ｂ層面検出遺構】

２ａ層水田跡＝Ｘ584～595Ｙ566地点で水路及び水田面と考えられる落ち込みを１箇所、４層面のＸ602～608Ｙ562地点で直線状に延びる段差を１条、Ｘ583Ｙ566地点で東西に延びる３ｂ層の盛り上がりを１条確認した。落ち込み及び段差には２ａ層が堆積しており、３ｂ層の盛り上がりは２ａ層での擬似畦畔Ｂと考えられ、２ａ層での水田跡の存在が判断された。擬似畦畔は上端幅70cm程遺存し、軸方向はＥ－８°－Ｓである。水路は幅40～60cm程で深さ５cm程を計る。水田面西側は水路から直線状に延び、北側はほぼ直角に屈曲している。層厚は２～６cm程である。西側軸の方向はＮ－３°－Ｗである。段差の方向はＮ－21°－Ｗである。層中より銅貨・土師器・須恵器が出土している。

【４層・５層面検出遺構】

ＳＤ１溝跡＝幅70～90cm、深さ30～40cm程で蛇行しながら南側へ延びている。水路跡とも考えられたが堆積土が砂を主体とし形状も不安定で蛇行する点から小河川と判断した。

倒木痕跡＝１基確認している。

○20トレンチのまとめ

調査区北側部は標高値が最も高い地点にあたり１～５層の基本層が良好に連続して認められたが、南側に向かうつれて１・２層が厚くみられ３層は薄くなっている。２ｂ層は調査区全域に認められ部分的に水田跡が確認されたが、耕作土中に５銭銅貨がみられ時期は明治末頃まで下るものと判断された。３ａ層及び３ｂ層水田跡耕作土中にはロクロ使用の土師器片や灰白色火山灰がみられ、時期は大きく平安時代頃が予想される。

⑤平成３年度調査のまとめ

遺構として水田跡・溝跡・土坑・河川跡・倒木痕跡が検出された。遺構出土の遺物はほとんど認められず大半は層中出土のものであるが絶対量は極めて少ない。基本層は大別で１～５層の５枚を確認したが、上層からの削平撹拌のため２・３層の遺存がわるく遺構は点的な確認となっている。各層より少量ではあるが土器類・陶磁器類・石器類・金属製品が出土したが図示

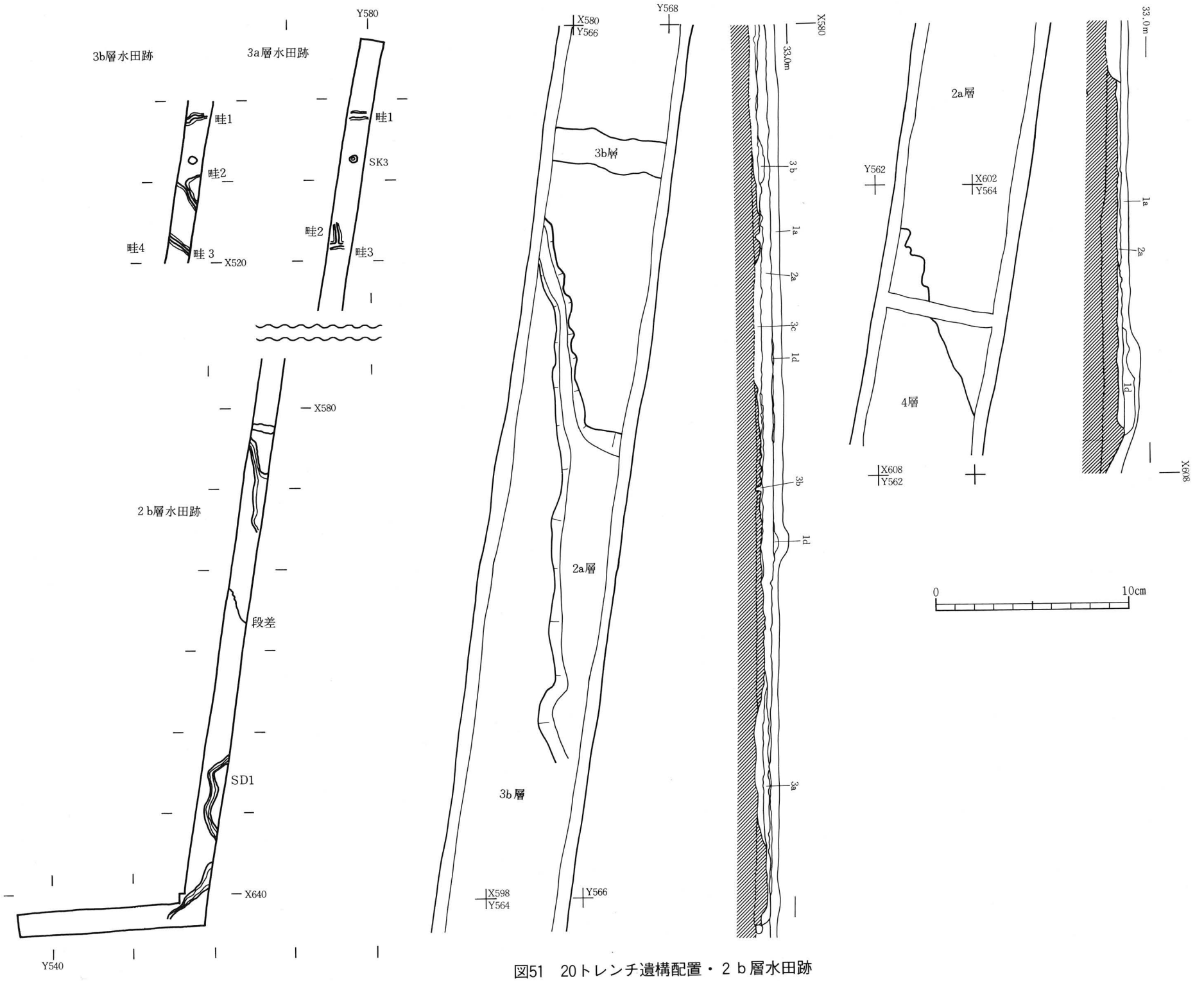


図51　20トレンチ遺構配置・２ｂ層水田跡

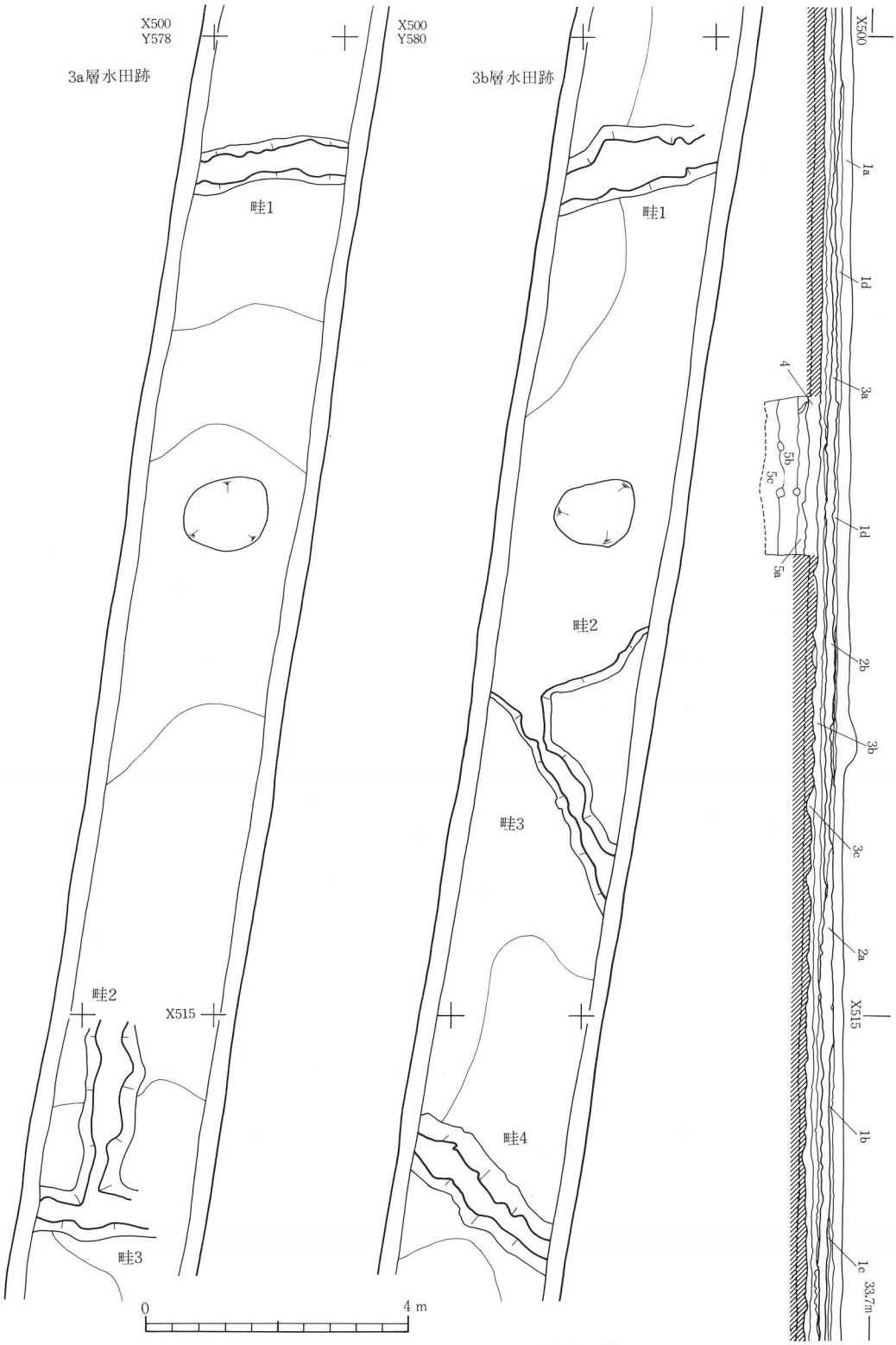


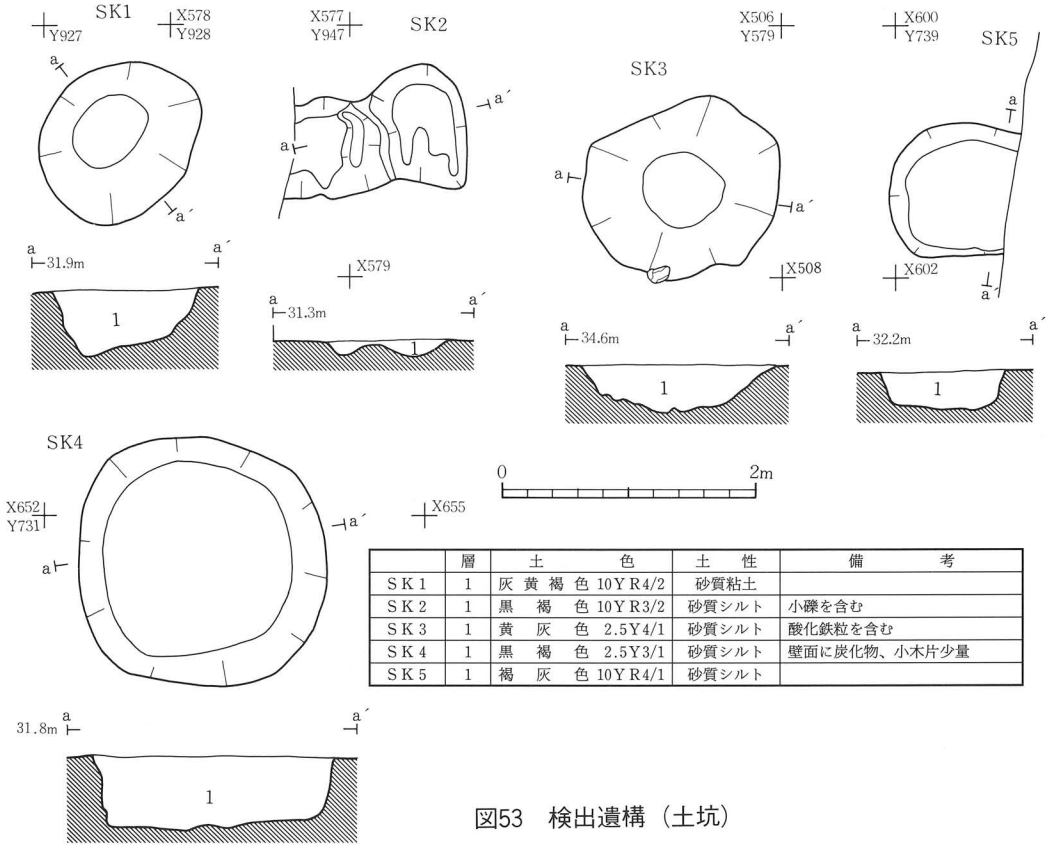
図52　20トレンチ３ａ・３ｂ層水田跡

できるものはほとんどない。

水田跡＝４地点で水田跡を確認した。検出層は２・3a・3b層である。遺存がわるく全容は不明であるが、土壌及び断面状況から各層の水田跡は広範囲に展開していたものと判断される。２層水田跡は先年度調査で近世頃の時期が予想されていたが明治期まで下ることが確認された。

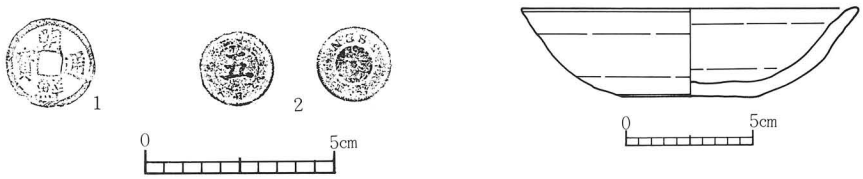
土坑＝計５基確認した。検出層は２ｂ・４・５層であるが確認面上層が１層であり、時期は極めて新しいものと考えられる。性格は不明である。

河川跡・倒木痕跡＝図示は省略した。河川跡は３条、倒木痕跡は１基確認している。



	層	土　　色	土　性	備　　考
ＳＫ１	1	灰黄褐色 10ＹＲ4/2	砂質粘土	
ＳＫ２	1	黒　褐　色 10ＹＲ3/2	砂質シルト	小礫を含む
ＳＫ３	1	黄　灰　色 2.5Ｙ4/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
ＳＫ４	1	黒　褐　色 2.5Ｙ3/1	砂質シルト	壁面に炭化物、小木片少量
ＳＫ５	1	褐　灰　色 10ＹＲ4/1	砂質シルト	

図53　検出遺構（土坑）



図・番	種　別	出土地点	特　　徴	写真図版
54－1	古　銭	19トレンチ	「朝鮮通宝」銅貨	49－17
54－2	古　銭	20トレンチ・２ｂ層水田	「菊５銭白銅貨」（明治22年）	

図・番	種別	器種	出土地点	口径	底径	器高	特　　徴	写真図版
54－3	須恵器	坏	19トレンチ　３ｂ層	133	54	35	底部－回転糸切り・無調整	－

（単位：mm）

図54　出土遺物

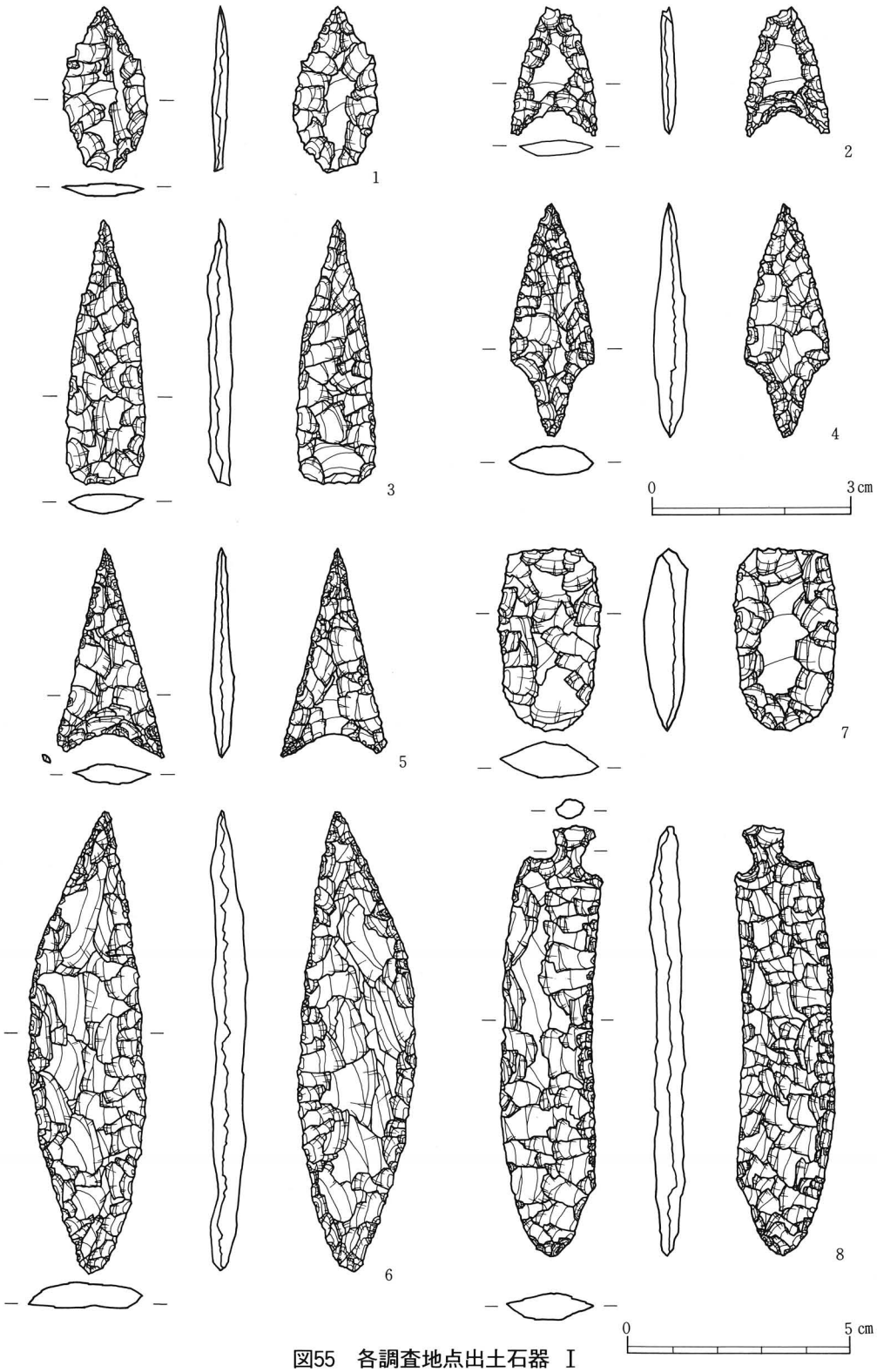


図55　各調査地点出土石器 Ⅰ

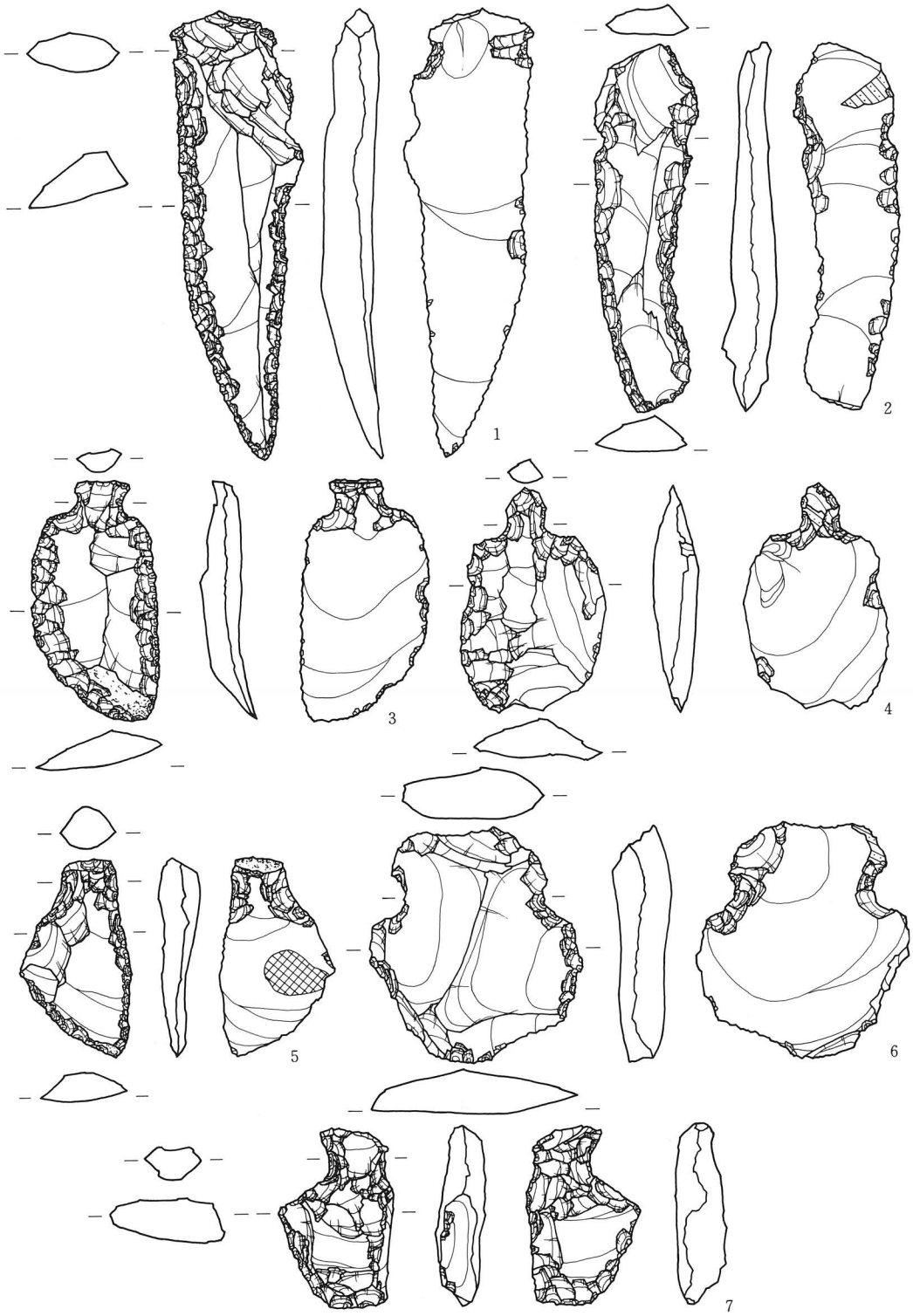


図56　各調査地点出土石器 Ⅱ

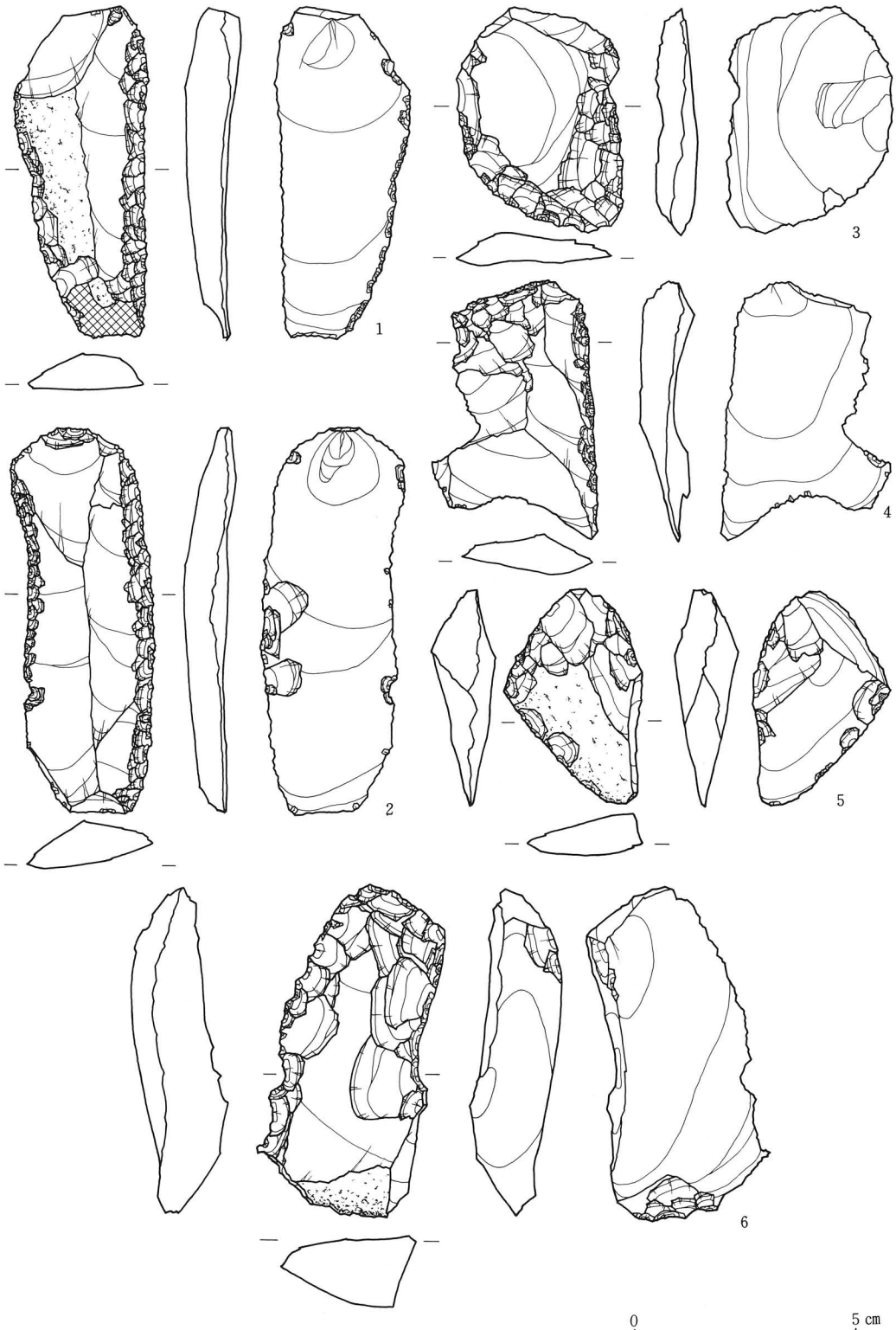


図57　各調査地点出土石器 Ⅲ

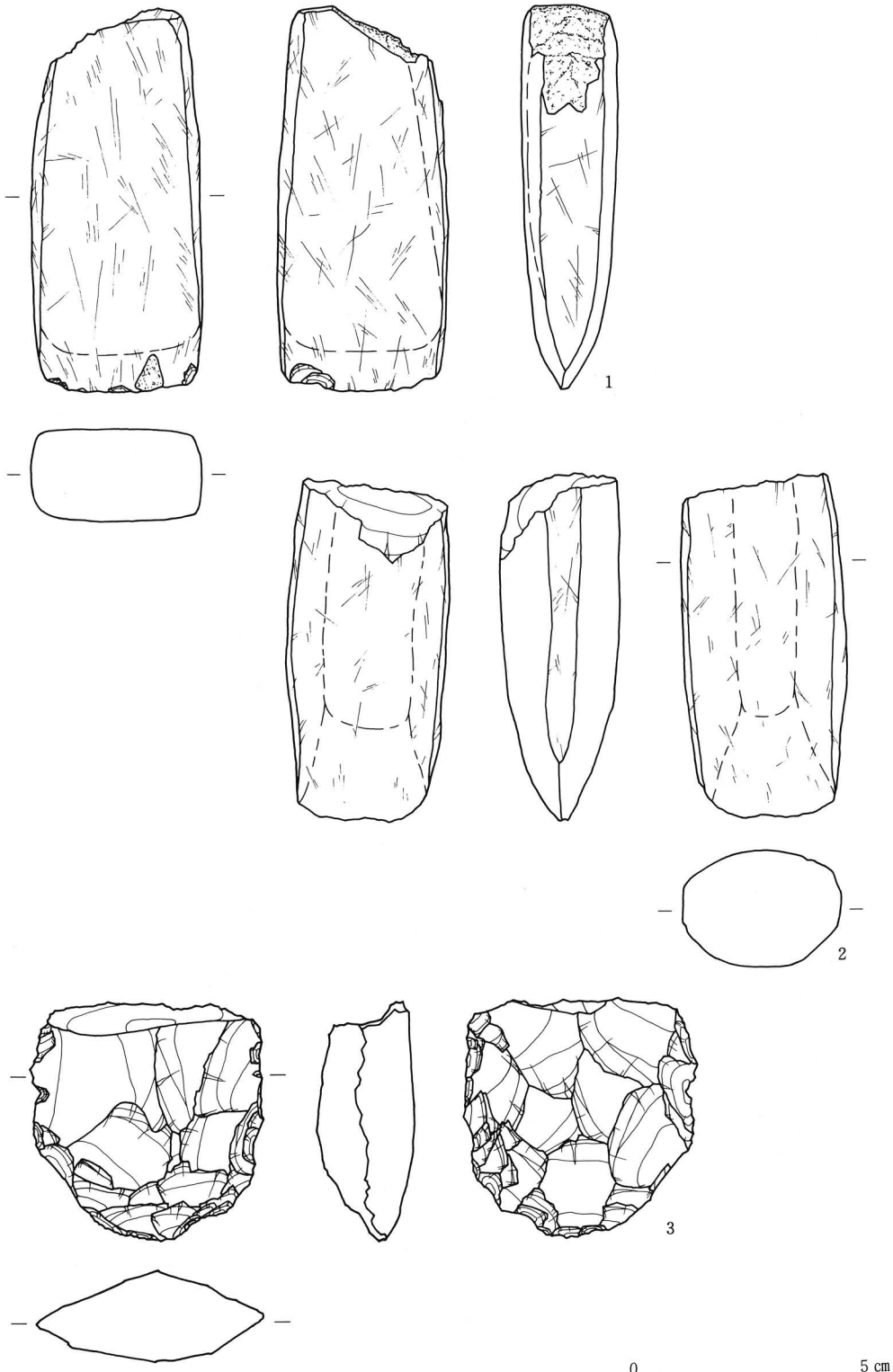


図58　各調査地点出土石器 Ⅳ

7．プラント・オパール分析

古環境研究所

1) はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、山田条里遺構における稲作跡の探査を試みたものである。

2) 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって容量50㎤の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。試料数は計55点である。<元年度－24点・２年度－23点・３年度－８点>

3) 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1)試料土の絶乾（105℃・24時間)、仮比重測定

(2)試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μｍ、約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)超音波による分散（300W・42KHz・10分間)

(5)沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

(6)封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03)、6.31、0.48である。(杉山・藤原、1987)。

4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表１・２に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。

5．考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行なわれていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

＜平成元年度分＞

Ｂ地点Ｘ42、Ｘ93、Ｉ地点Ｘ428地点では、現表土の１ａ層から約40cm深の３ｂ層まで連続的に試料が採取された。分析の結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、１ａ層～１ｂ層については、現在もしくは最近の稲作に由来するものと考えられる。その他の２、３ａ、３ｂ層では、密度は800～1,800/ｇと低い値である。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性はあるものの、上層や他所からプラント・オパールが混入した危険性も考えられる。調査区南端のＬ地点Ｘ580地点では、現表土のＩａ層から約50cm深のⅦ層まで連続的に試料が採取された。分析の結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ｉａ層については、現在もしくは最近の稲作に由来するものと考えられる。その他Ｉａ、IIｂ、IIａ、Ⅳ、Ｖａ、Ｖｂ、Ｖｃ、Ⅶ層では密度は800～2,900個/ｇと低い値である。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性はあるものの、上層や他所からプラント・オパールが混入した危険性も考えられる。

以上のように、採取されたすべての層からイネのプラント・オパールが検出されたが、現表土を除いては、稲作の可能性が高いと判断される層は見られなかった。

なお、その後の発掘調査の結果、Ｘ580地点のＶｂ層およびＶｃ層で平安時代の水田跡が検出されたが、プラント・オパール密度はそれぞれ900個/ｇと低い値である。その原因として、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③洪水などによって耕作土が流出したこと、④稲藁の大部分が水田外に持ち出されていたことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

＜平成二年度分＞

７トレンチ地点では、１ａ、１ｃ、２、３ａ、３ｂ層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、１ａ～１ｃ層については比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。２層および３ａ層では、プラント・オパール密度が6,900～7,600個/ｇと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。３ｂ層では密度が2,700個/ｇと比較的低いことから、稲作の可

能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

8トレンチ地点では、1a、1d、3a、3b層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1a～1d層については比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。3a層および3b層では、プラント・オパール密度が800～2,300個/gと比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

BトレンチB186地点では、1a、1b、2、3a、3a′、3b、4層について分析を行った。その結果、4層を除く各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1a～1b層については比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。2～3b層の各層では、プラント・オパール密度が900～3,700個/gと比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

DトレンチD-107地点では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅱa、Ⅱa′、Ⅱb、Ⅱb′、Ⅳa層について分析を行った。その結果、Ⅰ～Ⅱa′層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ⅰ層については比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。Ⅱ層では密度が4,900個/gと比較的高い値でありピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。Ⅱa層およびⅡa′層では、プラント・オパール密度が1,600～2,400個/gと比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

以上のように、7トレンチ、8トレンチ、BトレンチB186地点ではいずれも1a～3b層で、またDトレンチD-107地点ではⅠ～Ⅱa′層でイネのプラント・オパールが検出され、稲作の可能性が認められた。

なお、7トレンチ地点の1a～2層、8トレンチ地点の1d層と3a層、BトレンチB186地点の1b層と2層では、キビ族のプラント・オパールが検出された。同族には、ヒエやアワなどが含まれるが、現時点ではプラント・オパールの形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。

古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

調査区南部のBトレンチB186地点とDトレンチD-107地点では、全体的にタケ亜科（おもにネザサ節）が多く見られ、ヨシ族は比較的少量である。このことから、これらの地点周辺は、おおむねネザサ節などの生育するような比較的乾いた土壌条件で推移したものと推定される。

＜平成三年度分＞

20トレンチX513地点の１ａ～４層について分析を行った。その結果、１ａ～３ｃ層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、１ａ層（現表土）および１ｄ層で検出されたプラント・オパールは、現在もしくは比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。２ａ層では、密度が4,400個/ｇと比較的高い値であることから、稲作が行わわれていた可能性は高いと考えられる。３ａ層では、密度は2,300個/ｇとやや低い値であるが、ピークが認められることから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に同地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。２ｂ層、３ｂ層および３ｃ層は密度が600～1,400個/ｇと低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

以上のことから、同遺跡では水田耕作土と考えられていた１ａ、１ｄ、２ａ、３ａ層の各時期に稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、同じく水田耕作土と考えられていた２ｂ、３ｂ層では、稲作の可能性は低いと判断された。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告、10：281-298.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、９：15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（o.sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学、12：29-41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学、17：73-85.

B地点X42地点（平・元）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	16	1.00	18,800	30.82	0	27,300	900	0
1b	16	4	1.25	2,700	1.36	0	18,300	900	0
3a	20	12	1.14	1,700	2.35	0	23,600	1,700	0
3b	32	8	0.99	800	0.58	0	34,900	800	0

B地点X93地点（平・元）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	12	1.11	18,600	25.46	2,000	35,200	2,000	0
1a′	12	4	1.33	3,700	2.02	1,800	20,400	900	0
1b	16	8	1.13	900	0.82	900	17,100	900	0
2	24	6	1.09	1,500	0.99	700	19,900	700	0
3a	30	6	1.13	900	0.62	3,600	29,400	900	0
3b	36	10	1.05	1,800	1.85	0	28,900	1,800	0

I地点X428地点（平・元）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	18	1.04	18,600	35.78	800	16,800	1,700	0
1b	18	4	1.08	1,700	0.74	800	21,100	0	0
2	22	10	1.05	800	0.82	1,700	12,800	2,500	0
3a	32	4	0.98	800	0.29	0	15,700	1,700	0
3b	36	8	1.00	800	0.66	1,600	18,400	800	0

L地点X580地点（平・元）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	12	1.19	19,400	28.55	1,800	28,700	0	0
IIa	12	4	1.22	800	0.37	0	19,200	800	0
IIb	16	8	1.24	2,900	2.97	1,900	19,500	1,900	0
IIIa	24	6	1.20	800	0.56	800	9,600	800	0
IV	30	4	0.98	800	0.29	800	13,400	0	0
Vb	34	6	0.95	900	0.49	900	10,100	0	0
Vc	40	10	1.09	900	0.93	900	11,800	0	0
VII	50	4	1.32	1,600	0.87	0	16,900	800	0

L地点X580地点+6.4m西の地点（平・元）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Va	40	4	0.92	900	0.33	900	23,700	0	0

7トレンチ（平・2）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	16	1.14	25,900	48.45	0	53,600	0	800
1c	16	3	1.10	10,200	3.46	2,700	68,100	2,700	900
2	19	4	1.11	6,900	3.13	2,900	28,800	6,900	900
3a	23	3	1.13	7,600	2.63	4,700	62,900	7,600	0
3b	26	7	1.10	2,700	2.09	900	33,300	5,400	0

表1　プラント・オパール分析結果I

8トレンチ（平・2）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	16	1.14	22,700	42.52	0	11,800	4,500	0
1d	16	14	1.27	5.300	9.66	0	31,100	2,600	800
3a	30	5	1.10	2,300	1.29	2,300	28,500	700	1,500
3b	35	10	1.10	800	0.82	6,900	45,900	2,500	0

Bトレンチ B186地点（平・2）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	14	1.03	20,100	29.71	1,900	19,200	2,800	0
1b	14	4	1.11	8,900	4.04	900	13,800	900	900
2	18	4	1.03	3,700	1.52	900	25,000	900	900
3a	22	5	1.08	900	0.46	900	57,700	1,800	0
3a′	27	7	1.14	1,800	1.44	0	73,900	1,800	0
3b	34	5	0.99	900	0.41	1,900	93,500	3,900	0
4	39	-	0.94	0	-	800	77,500	4,300	0

Dトレンチ D-107地点（平・2）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
I	0	15	1.35	4,200	8,65	0	17,000	0	0
II	15	8	1.27	4,900	5.11	0	18,800	0	0
IIIa	23	24	1.18	1,600	4.45	0	15,400	0	0
IIIa′	47	18	1.15	2,400	5.01	0	29,300	0	0
IIIb	65	13	1.07	0	0.00	0	28,500	1,500	0
IIIb′	78	16	0.88	0	0.00	800	80,200	800	0
IVa	94	22	1.10	0	0.00	900	215,000	1,900	0

20トレンチ X513地点①（平・3）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1a	0	15	1.18	17,500	31.83	1,700	35,900	1,700	0
2b	15	13	0.94	1,400	1.74	0	17,900	0	0
3a	28	4	0.95	2,300	0.87	0	23,100	700	0
3b	32	12	1.09	600	0.74	600	16,400	600	0
3c	44	6	1.05	900	0.56	0	27,000	0	0
4	50	-	0.99	0	-	2,300	44,400	0	0

20トレンチ X513地点②（平・3）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1d	15	5	0.99	8,400	4.27	800	22,700	800	0

20トレンチ X513地点③（平・3）

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2a	15	5	1.03	4,400	2.32	700	20,800	2,200	0

表2　プラント・オパール分析結果II

図・番	種別	器種	出土地点	口径	底径	器高	特徴	産地	年代	写真図版
28－1	磁器	碗	SD209 2層	111	40	53	染付、飯碗	平清水？	明治	47－2
28－2	磁器	碗	SD209 3層	110	37	51	染付、摺絵、外－丸文・唐子、みのみ－松竹梅文	不明	明治	47－3
28－3	磁器	碗	SD209 検出	98	41	49	染付、くらわんか手	肥前	18世紀	47－4
28－4	磁器	碗	SD209 検出	112	50	61	蝙蝠文	切込	幕末	47－5
28－5	磁器	碗	SD209 1層	104	39	56	染付、草文	切込？	幕末	47－6
28－6	磁器	碗	SD209 検出	126	43	55	染付、鳥か蝶の文	切込？	幕末	
28－7	磁器	手塩皿	SD209 2層	82	33	25	見込桜花文、目跡4ケ	不明	幕末～明治	47－7
28－8	磁器	手塩皿	SD209 3層	82	38	22		不明	幕末～明治	47－8
28－9	磁器	手塩皿	SD209 2層	78	36	25	見込スズメ？文、目跡4ケ	切込？	幕末～明治	47－9
28－10	磁器	手塩皿	SD209 1層	84	38	25	見込菊花文、目跡4ケ	不明	幕末～明治	
28－11	磁器	小皿	SD209 1層	94	50	18	見込中華？文	瀬戸・美濃	幕末～明治	47－13
28－12	磁器	小皿	SD209 検出	94	50	14	見込中華？文	瀬戸・美濃	幕末～明治	47－12
28－13	磁器	小皿	SD209 2層	99	63	21	蛇ノ目凹形高台	肥前	18世紀後半～19世紀前半	47－15
28－14	磁器	小皿	SD209 2層	103	68	24	蛇ノ目凹形高台	肥前	18世紀後半～19世紀前半	
28－15	磁器	皿	SD209 1層	140	70	31	見込蛇ノ目釉ハギ	肥前	18世紀	
28－16	磁器	蓋	SD209 1層	106	59	30	染付笹文	肥前	幕末～明治	47－14
29－1	磁器	皿	SD209 検出	128	72	38	見込五弁花、高台内に渦福	肥前	18世紀	
29－2	磁器	皿	SD209 1層	140	80	35	染付山水文、タコ唐草文、外面－源氏香文	肥前	18世紀後半～19世紀前半	
29－3	磁器	皿	SD209 検出	132	72	28	見込五弁花	肥前	18世紀	
29－4	磁器	皿	SD209 1層	140	90	32	青磁上絵付の色絵花文	肥前	明治？	47－16
29－5	磁器	小坏	SD209 検出	68	30	48	染付	瀬戸・美濃？	明治以降	47－18
29－6	磁器	小坏	SD209 2層	68	30	48	染付	瀬戸・美濃？	明治以降	47－19
29－7	磁器	小坏	SD209 検出	66	24	41	染付	瀬戸・美濃？	明治以降	
29－8	磁器	碗	SD209 2層	72	32	45	染付	不明	幕末～明治	
29－9	磁器	碗	SD209 2層	84	32	34	染付、源氏香文	不明	明治	47－24
29－10	磁器	碗	SD209 検出	85	37	48	上絵付の色絵	不明	明治？	
29－11	磁器	小坏	SD209 2層	72	32	60	染付	瀬戸・美濃？	明治以降	
29－12	磁器	小坏	SD209 2層	69	32	45	染付	瀬戸・美濃？	明治以降	
29－13	磁器	仏飯具	SD209 1層	－	43	－	染付	不明	明治	
29－14	磁器	徳利	SD209 2層	34	66	195	染付、底部に㊐の墨書	不明	幕末～明治	47－17
30－1	陶器	小埦	SD209 1層	70	28	38	白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	
30－2	陶器	小埦	SD209 2層	64	28	37	白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	
30－3	陶器	小埦	SD209 2層	60	28	36	白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	48－4
30－4	陶器	小埦	SD209 2層	60	26	25	白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	
30－5	陶器	埦	SD209 3層	60	33	51	白濁釉、鉄絵の馬文	大堀相馬	幕末～明治	48－3
30－6	陶器	腕	SD209 2層	67	40	57	鉄釉・灰釉の淡青色の流しかけ、内側－白濁釉	大堀相馬？	明治	
30－7	陶器	埦	SD209 1層	100	37	58	白濁釉、端反	大堀相馬	幕末？	
30－8	陶器	埦	SD209 2層	98	33	52	灰釉、上絵付色絵、草花文、京焼系	不明	18世紀以降	48－1
30－9	陶器	埦	SD209 1層	110	40	58	灰釉、貫入あり	大堀相馬	18世紀後半	
30－10	陶器	埦	SD213 1層	113	43	71	灰釉	大堀相馬	18世紀後半	
30－11	陶器	埦	SD209 1層	100	35	57	灰釉と鉄釉（糸目）かけわけ	大堀相馬	18世紀後半	
30－12	陶器	皿	SD209 1層	130	55	36	呉須の絵	大堀相馬	幕末？	48－10
30－13	陶器	皿	SD209 1層	136	59	32	鉄絵と呉須絵	大堀相馬	幕末？	
30－14	陶器	皿	SD209 2層	126	49	27	鉄絵	大堀相馬	幕末？	48－9
30－15	陶器	皿	SD209 検出	133	42	34	鉄絵	大堀相馬	18世紀後半～19世紀前半	

（単位：mm）

表3　出土遺物観察表Ⅰ

図・番	種別	器種	出土地点	口径	底径	器高	特徴	産地	年代	写真図版
30－16	陶器	皿	SD209 1層	139	46	37	鉄絵	大堀相馬	18世紀後半～19世紀前半	
31－1	陶器	壺	SD209 検出	64	－	－	土灰釉	堤	江戸時代	
31－2	陶器	壺	SD209 1層	104	－	－	鉄釉	堤？	幕末～明治	
31－3	陶器	小甕	SD209 3層	112	－	－	鉄釉・黒色釉	堤？	幕末～明治	
31－4	陶器	鉢	SD209 2層	114	50	63	片口、白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	48－2
31－5	陶器	蓋	SD209 1層	86	－	－	土瓶蓋	大堀相馬	幕末～明治	
31－6	陶器	蓋	SD209 検出	82	60	23	土瓶蓋、土灰釉	大堀相馬	幕末～明治	48－8
31－7	陶器	土瓶	SD209 2層	68	73	83	山水文	大堀相馬	幕末～明治	48－11
31－8	陶器	土瓶	SD209 1層	58	－	－	白濁釉	大堀相馬	幕末～明治	
31－9	陶器	小型壺	SD209 1層	－	－	－	灰釉	堤？	幕末～明治	
31－10	陶器	油徳利	SD209 1層	－	－	－	土灰釉？	堤	幕末～明治	
31－11	陶器	徳利	SD209 1層	－	68	－	鉄絵、白濁釉	大堀相馬？	幕末～明治	
31－12	陶器	壺	SD209 2層	－	60	－	長石釉系	唐津	18世紀？	
31－13	陶器	徳利？	SD209 1層	－	60	－	鉄釉糸目文	大堀相馬？	幕末～明治	
31－14	土師質土器	燈明皿	SD209 2層	53	31	15	芯受有り（剝落）	不明	江戸時代	48－12
32－1	陶器	鉢	SD209 2層	199	80	114	淡青色の釉、見込に目跡4ケ	不明	幕末～明治	48－13
32－2	陶器	鉢	SD209 1層	218	100	101	なまこ釉	堤	幕末～明治	48－14
32－3	陶器	擂鉢	SD209 1層	－	－	－	片口	不明	江戸時代	
32－4	陶器	擂鉢	SD209 2層	－	－	－	鉄釉	堤	幕末～明治	
32－5	陶器	擂鉢	SD209 2層	－	－	－		不明	17世紀？	
32－6	陶器	擂鉢	SD209 1層	－	104	－		堤	幕末～明治	48－15
32－7	瓦質土器	鉢	SD209 1層	－	168	－		不明	江戸時代？	
32－8	陶器	埦	SD213 検出	－	55	－	灰釉	唐津	18世紀	
32－9	陶器	埦	SD209 検出	－	52	－	刷毛目文	唐津	18世紀	
32－10	陶器	鉢	SD209 検出	－	124	－	象嵌大鉢	唐津	17世紀後半～18世紀前半	
32－11	陶器	皿？	SD209 検出	－	33	－	鉄釉、仏供	瀬戸	15世紀？	
32－12	中世陶器	擂鉢	SD209 検出	－	－	－	おろし目	白石窯系	13～14世紀	
33－1	硯		SD209 1層	両端部・縁部欠損、幅72mm、磨面に「山田村大」「四」の刻線有り、粘板岩						
33－2	砥石		SD209 検出	127×38×34mm、1面のみ使用痕、紐穴1ケ有り						49－21
33－3	砥石		SD209 2層	113×49×39mm側面、4面に使用痕、上部がすりへり分銅型となる						49－23
33－4	棒状石製品		SD209 1層	両端部欠損、残存長30mm径7mm、長軸方向に研摩、石製の箸？、珪質凝灰岩						
33－5	棒状石製品		SD209 1層	両端部欠損、残存長43mm径6mm、33－4と同一のもの？						
33－6	砥石		SD209 1層	木製台付、台部＝289×68×26mm、台形型、砥石＝161×54mm						49－20
33－7	包丁		SD209 3層	刃先欠損、残存長319mm、刃部残存長223×48×0.5mm 柄部125×23×15mm断面楕円形						
33－8	鎌		SD209 2層	刃部欠損、柄部333×24×24mm、断面円形、留金・釘穴有り						
34－1	釘		SD209 1層	鉄製の釘、推定長105mm、断面四角形、頂部を曲げ頭とする						
34－2	筒状鉄製品		SD209 2層	全長139mm最大幅43mm厚さ2mmの鉄板使用、上部円形に折曲げ箇状 下部厚さ6mm程の板状、上部端鉄板折り返し留穴？2ケ所有り						
34－3	煙管		SD209 2層	雁首部、長さ60mm幅10mm厚さ0.8mm、真鍮製						
34－4	煙管		SD209 2層	水口部、長さ70mm幅10mm厚さ0.8mm、真鍮製						
34－5	煙管		SD209 1層	水口部、端部欠損、幅10mm厚さ0.5mm、断面六角形、銅製						
34－6	板状銅製品		SD209 検出	95×14×3mm、芯に木版をはさみ0.2m程の板でまいている、草花文の彫刻						
34－7	古銭		SD209 2層	「寛永通宝」銅貨						

（単位：mm）

表4　出土遺物観察表II

図・番	種別	出土地点	特徴	写真図版
34－8	古　銭	SD209　1層	「寛永通宝」銅貨	
34－9	古　銭	SD209　1層	「寛永通宝」銅貨	49－14
34－10	ガラス玉	SD209　2層	径13mm厚さ10mm、中央部に径2mmの貫通穴1ケ有り、かんざしの玉？	
34－11	漆　椀	SD209　検出	黒漆、推定口径93mm	
34－12	箸　？	SD209　2層	長さ193mm幅6mm程、断面四角形	49－1
34－13	棒状木製品	SD213　埋土	T型を呈す、長さ168mm上端部径25mm程、下端部径12mm程の円形品	49－2
34－14	箆状木製品	SD209　2層	先端部焼けており欠損、箆部幅98mm、柄部長さ146mm幅34mm厚さ13mm	48－18
35－1	下　駄	SD209　埋土	楕円形の連歯下駄、長さ178mm幅77mm、表に鏡文字の「古」の焼印	48－17
35－2	下　駄	SD213　埋土	長方形の連歯下駄、長さ229mm幅95mm	48－16
35－3	フ　ネ	SD209　2層	長さ145cm幅45cm高さ18cm、部分的な加工を施し、断面は逆台形状 上面長さ93cm幅30cm程深さ11cm、断面逆台形の凹をくり抜いている。	49－4
36－1	石　臼	SD209　肩部	粉挽き下臼径317mm高さ133mm、上面に刻目、中央部に径2.5cm程の芯棒孔有り、安山岩	49－19
36－2	石　臼	SD209　肩部	粉挽き上臼推定径35cm高さ97mm、上面に周縁、側面に挽き木孔有り、安山岩	49－18

	種別	出土地点	最大長	最大幅	厚さ	重量	材質	備考		
55－1	石　鏃	G X220～230　3a層	25	13	2.3	1	珪質頁岩	円基式	(平元)	50－1
55－2	石　鏃	G X210～220　3a層	21	16	2.2	1	珪質頁岩	凹基式	(平元)	50－2
55－3	石　鏃	F X197　3c層？	40.5	12	3.5	2	珪質頁岩	平基式	(平元)	50－3
55－4	石　鏃	G X220～230　3a層	36.5	13	4.2	1.5	珪質頁岩	有茎式	(平元)	50－4
55－5	尖頭器	H X372　4層上面	50	23.5	5	3.5	珪質頁岩	凹基式石器の大型のもの	(平元)	50－5
55－6	尖頭器		106	28	7.5	21.5	頁岩	槍矢形を呈する	(平2)	50－7
55－7	石　箆	K　表彩	42.5	25	9	9.5	珪化凝灰岩		(平元)	50－6
55－8	石　匙	L Y234　5層上面	98.5	23.5	6.4	17	頁岩	長幅指数　417	(平元)	50－8
56－1	石　匙	SD30	103	29.5	11.5	27.5	頁岩	長幅指数　353	(平元)	50－9
56－2	石　匙	B B20～30　2層	84	25	8.6	16.5	頁岩	長幅指数　355	(平2)	50－10
56－3	石　匙	C X150～160　3層上面	56	32	7.7	12.5	頁岩	長幅指数　189.6	(平2)	50－11
56－4	石　匙	B X90～100　3b層	52	32.5	9.6	13	珪化細粒凝灰岩	長幅指数　156	(平元)	50－12
56－5	石　匙	19トレンチ　2層	41	26	9.4	7	頁岩	長幅指数　175	(平3)	50－13
56－6	石　匙	B B180～190　3層	55	49	12.3	30	黒色頁岩	長幅指数　112.5	(平2)	50－15
56－7	石　匙	19トレンチ　1層	42	27	9.8	11.5	珪質頁岩	長幅指数　157.6	(平3)	50－14
57－1	不定形石器	C C79　5層上面	76	31	15	23	頁岩	スクレイパー	(平2)	50－16
57－2	不定形石器		90	36	10.3	28	頁岩	スクレイパー	(平2)	50－17
57－3	不定形石器	F X220～230　1層	55	41	8.7	19.5	珪化細粒凝灰岩	スクレイパー	(平2)	50－18
57－4	不定形石器	C X105　1b層	60	50	10.1	14	頁岩	スクレイパー	(平元)	
57－5	不定形石器	19トレンチ　2層	50.5	21.5	13.6	16	珪化凝灰岩	スクレイパー	(平3)	50－19
57－6	不定形石器	16トレンチ　1層	76	45	16.5	50.5	珪化凝灰岩	デンティキュレイト	(平2)	50－20
58－1	磨製石斧	B B180～190　3層	86	49.5	21	133	珪化凝灰岩		(平2)	50－22
58－2	磨製石斧	B X20　2層	77.5	47.5	26	108	石英安山岩質凝灰岩	頭部欠損	(平元)	50－23
58－3	打製石斧	B X100　表彩	59	56	21	56	珪化凝灰岩	頭部欠損	(平元)	50－21

(単位：mm・g)

長幅指数＝$\frac{最大長}{最大幅}\times100$

表5　出土遺物観察表Ⅲ

8．総括

3年間にわたる調査において多くの遺構・遺物を確認したが、遺跡の性格上水田跡に関するものが主体を占める。当遺跡は北西から南東方向へ緩やかに傾斜する段丘面に位置するが、細かくみると水田部分と微高地部分に分けられる。検出遺構からみると縄文時代の陥し穴・近世の建物跡及びヤシキ跡の堀跡等が微高地及び周辺部に位置しており、当然の帰結ではあるが地形的選択・使い分けが確認された。

基本層位として大別で1～5の5枚の層を確認した。層中に含まれる遺物から2層は近世～近代、3層は平安時代、4層は縄文時代の時期を想定することが可能と考えられる。

検出遺構として、水田跡・堀跡・建物跡・溝跡・炉跡・土坑・河川跡・倒木痕跡があるが、溝跡・土坑の多くは性格不明となっている。

水田跡は全体的に遺存状況が不良で畦畔・水路を明確に検出したものは数少なく、畦畔に関しても下層面での検出、擬似畦畔B、となるものが大半である。帰属する水田跡は2層及び3層となり、近世～近代・平安時代の大きく二時期の水田跡を検出した。

2層水田跡は元年度調査C地点、2年度地点B・C・D・12トレンチ、3年度調査19・20トレンチの計7地点で検出している。広大な面積を有する遺跡の中での点及び線的な確認であり全体像を想定・復元することはもとより無理があるが、畦畔の方向はC地点を除きおおむね真北方向を基軸とする傾向がみられる。これから現水田面の畦畔は2層水田の畦畔及び畦畔方向を踏襲しているものと考えられる。なお、2層水田跡では水路が確認されていないが現水路部分に位置していたものと判断される。

3層（3a・3b・Va・Vb・Ⅶ）水田跡は元年度調査E・I・L地点、2年度調査Bトレンチ、3年度調査11・20トレンチの計6地点で検出している。3a層水田跡がE地点・20トレンチの2ケ所での確認で、3b層水田跡がI地点・Bトレンチ・11トレンチ・20トレンチの4ケ所での確認となる。L地点では重層的に3枚の水田跡を確認したが、基本層3層に比定されるものと考えられるが土性に相違がみられ単独に層名を付している。2層同様に3層は当遺跡の広い範囲に分布し、断面観察・牛の足跡等から水田作土と考えられるが、遺存状況が不良で検出遺構は上述の地点のみである。区画が判明するものはないが検出状況から方形区画を呈するものと考えられる。なお、A・B地点の3a層面で計3条、Bトレンチ3b層面で2条の水路跡を単体で確認している。畦畔及び水路跡の方向は3a層水田跡では20トレンチの畦畔2・3がN－7°－E・E－2°－Sとほぼ真北を向く方格が認められるが、E地点の段差及びA・B地点の水路跡は真北に対し30～50度程西へ振れている。3b層水田跡はI地点の段差、Bトレンチの畦畔2及びSD211、11トレンチの畦畔がほぼ真北方向に沿うラインをもち、3a層水田跡に較べて方向性にまとまりはみられるが、検出遺構数も少なく統一的な基軸の存在につ

いては断言できない。Ｌ地点の３枚の水田跡は地形的に狭隘な部分に位置しており、広義の谷水田様の状況を呈する。畦畔は地形に沿うように東西に延び弧状を呈しており、地形的に制約された状況が確認された。

なお、各地点（７．参照）でプラント・オパール分析を実施しているが、低い数値が提示されている。水田跡が確認された地点でも同様の結果となっており、他の遺跡との比較においても極めて低い値である。原因に関する説明が付されているが、現状では不明である。

溝跡は各調査地点で計32条確認したが、堀跡及び水路跡の性格をもつもの以外は耕作に関するものとは考えたが不明となっている。ＳＤ209・213溝跡は位置・状況等から「絵図」に描かれている「ヤチヤシキ」の西側と南側の堀跡と判断した。建物跡と併せて絵図を傍証するかたちとなった。西側の堀は一辺90m程の規模をもち南辺部は不明であるが東進していると考えられる。ＳＤ209の南端部では多種多量の遺物が確認され、状況から廃棄されたものと判断した。主たる遺物は陶・磁器類で19世紀前後頃のものが多いが、中世陶器・中国の青磁なども含まれている。出土した硯に「山田村　大」と判読できる線刻があり、当地では大里姓が多く大は大里と考えられ、聞き取りの調査を行ったが「ヤチヤシキ」に関する詳しい事は確認できなかった。

建物跡は３棟確認している。すべて掘立柱のものである。基本層２層面での検出で時期は近世～近代頃と考えられる。柱穴が１ケ所に集中することから建物跡は単体で存在し、建て替えが繰替えされたものと判断した。「絵図」に描かれた「御堂」の跡の関するものと考えたが断定はし得なかった。

土坑は計49基確認している。平面形が円形と方形の２種類が認められる。多くのものは円形のもので堆積土も各層の混合層となり人為堆積と考えられた。時期はきわめて新しく耕作に関するものと考えられるが詳細は明らかではない。方形を呈する土坑で壁が焼けているものが２基（ＳＫ10・216）確認されている。焼土・炭化物がみられ焼成遺構と考えられ、ＳＫ10には灰白色火山灰がみられ、平安時代頃の年代が考えられた。なお、１・２トレンチは底面にピットを有する、所謂「陥し穴」が計３基確認されている。

出土遺物として、土器類・陶磁器類・石製品・木製品・金属製品・瓦等、多種多量のものがある。遺跡の性格上、細片となって出土したものが多く、図示可能な遺物でも紙面の都合上すべてを網羅していない。ここでは土器類・陶磁器類の説明のみにとどめる。

縄文土器＝１～４層中から出土している。ほとんどが小片で接合できず、掲載資料は１点である。地文のみのものが多く、文様の確認されるものは大木８式と考えられる。図46－11は外面に沈線・ヘラミガキが施されるもので器形的特徴から加曽利Ｂ式の深鉢と考えられる。

土師器・須恵器＝１～３層中より細片となって多量に出土している。掲載資料は須恵器坏１

点のみである。土師器はすべてロクロ使用である。底部切り離しが確認されるものはすべて回転糸切りである。器形的特徴はみいだせないが、３層中には灰白色火山灰が含まれ下層からの出土もなく、10世紀前半頃を上限とする土器と判断される。

陶器＝１・２層からも出土しているが、大半はＳＤ209溝跡出土のもので一括廃棄資料である。掲載資料は52点であるが、他に未掲載資料が数多くある。器種として椀・皿・土瓶・壺・油徳利・甕・擂鉢がある。産地として「大堀相馬」、「堤」、「瀬戸・美濃」、「唐津」が同定された。破片資料も含めて大堀相馬が圧倒的出土量で次に堤となる。16～18世紀の陶器も若干みられるが、主体となるものは19世紀前後、江戸時代末～明治時代初め頃である。

磁器＝陶器同様にＳＤ209溝跡出土のものが大半を占める。掲載資料は39点である。器種として碗・小坏・皿・手塩皿・小皿・徳利・土瓶がある。産地として「肥前」、「瀬戸・美濃」、「切込」、「平清水？」が同定された。破片資料も含めて肥前の出土量が最も多い。年代は17～19世紀頃と考えられる。表採資料ではあるが13～14世紀の年代が想定される龍泉窯系の青磁の鉢も１点出土している。

９．まとめ

○近世～近代、平安時代の２時期の水田跡を確認した。畦畔等の確認数も少なく、区画の判明するものはない。断面観察等からみて広い範囲に水田が分布していたことは推察される。

○近世～近代頃のヤシキ跡（堀跡）・建物跡を確認した。堀跡からは一括廃棄された多量の遺物が出土し、当時の生活状況を知る上での好資料となるものである。

○「条里制」に関する問題は今回の調査では明確にすることは出来なかった。調査区の制約等、遺構（畦畔・水路）は点及び線的な確認で方格地割さえ確認できず、ミクロ的な視点では解決しえないと考えられる。現条里型土地割は真北を基軸とする整然とした区割がみられるが、３層水田跡の畦畔は真北方向（正方向）を向くものもみられるが統一的なものはない。水路跡は畦畔と明確に組み合うものがなく不確定であるが、畦畔とは無関係に延びており今後の課題となる。

（渡部弘美）

《参考文献》

弥永貞三：「条里制の諸問題」日本の考古学Ⅶ河出書房新社　1973年

神　英雄：「辺境条里の分布と形態について」『条里制研究』第４号　条里制研究会　1988年

斎野裕彦：『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第98集　仙台市教育委員会　1987年

平間亮輔：「富沢遺跡とその周辺における条里型土地割について」『条里制研究』第５号　条里制研究会　1989年

庄子貞雄：山田一郎：「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡研究所　1980年

写　真　図　版

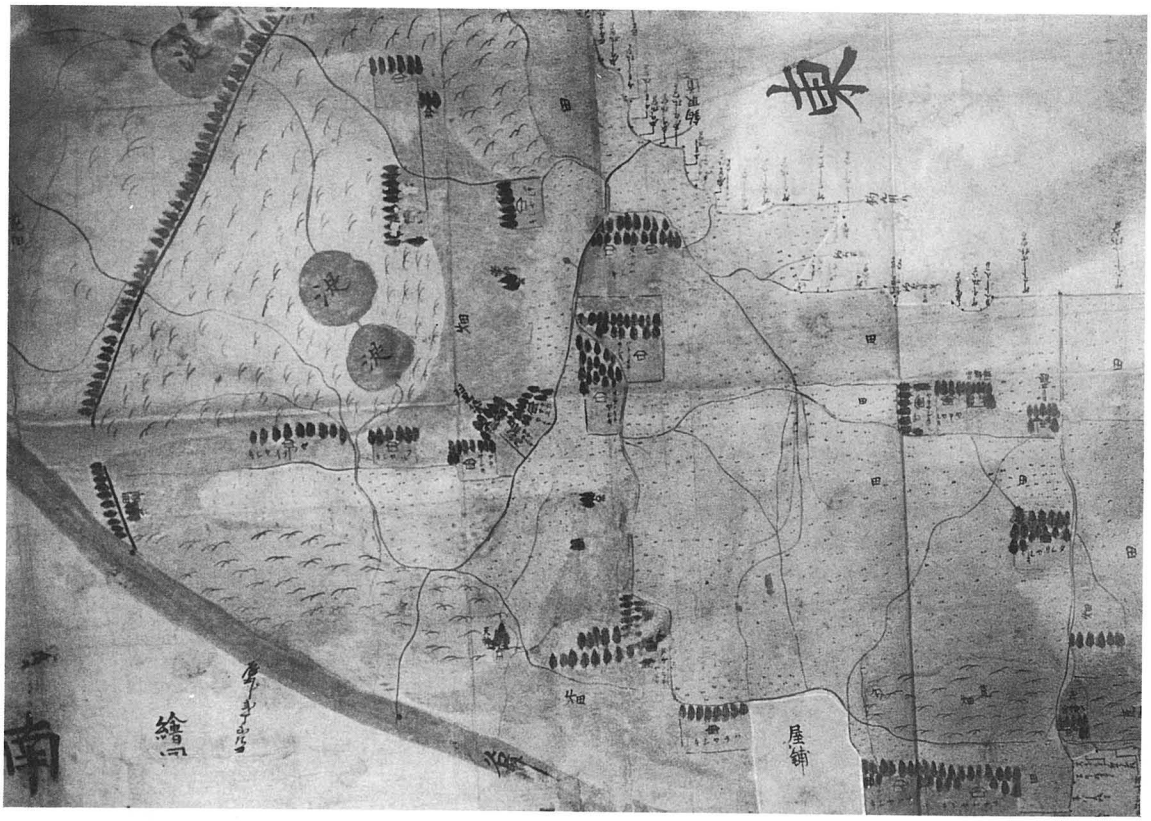


写真１　「名取郡北方山田邑」絵図（文政５年・1822年）
（仙台市博物館所蔵）

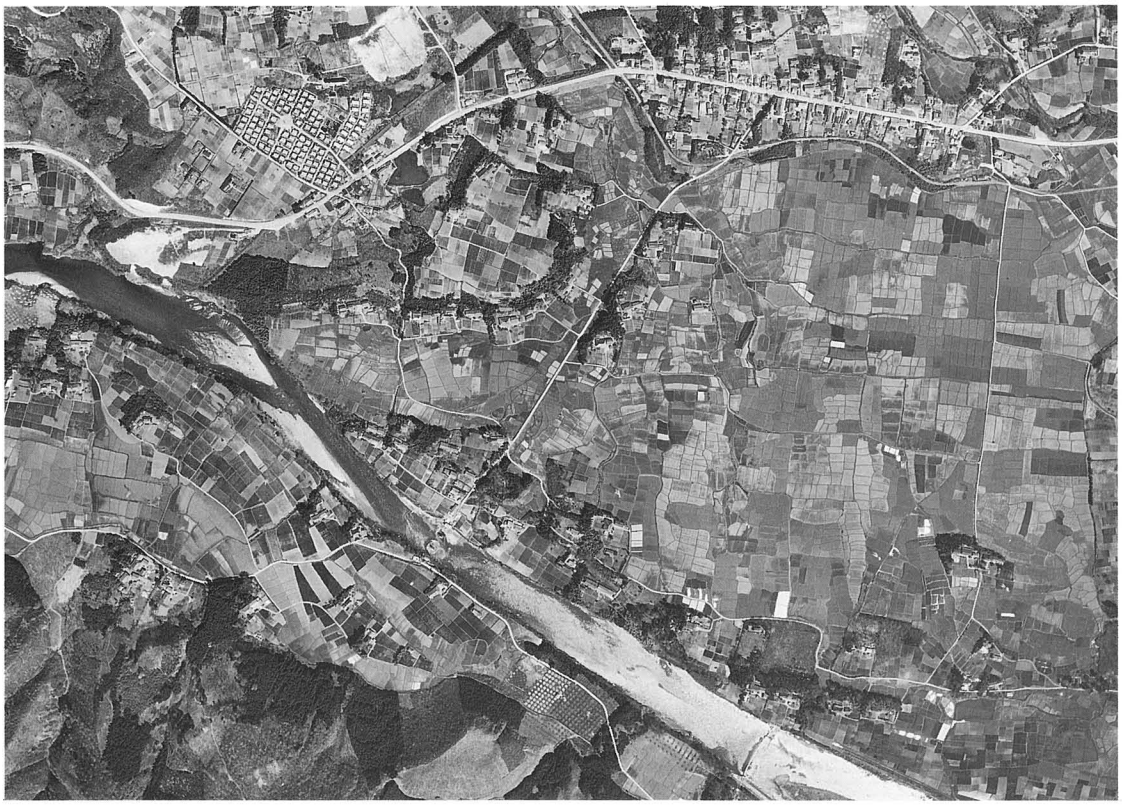


写真２　遺跡周辺航空写真（1961年）

写真３　遺跡周辺航空写真（1989年）

写真４　Ａ地点３ａ層検出溝跡群

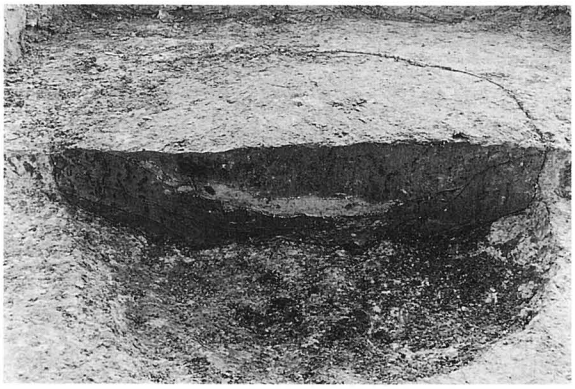


写真７　ＳＫ10土坑断面

写真５　ＳＤ24・25溝跡検出状況

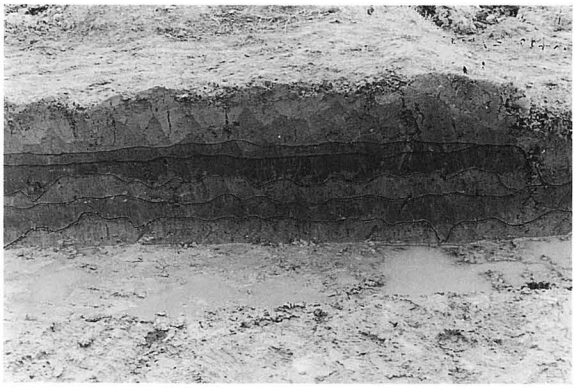


写真８　Ｘ430地点断面

写真６　ｃ地点２層水田跡

写真９　Ｘ430～440地点断面（段差）

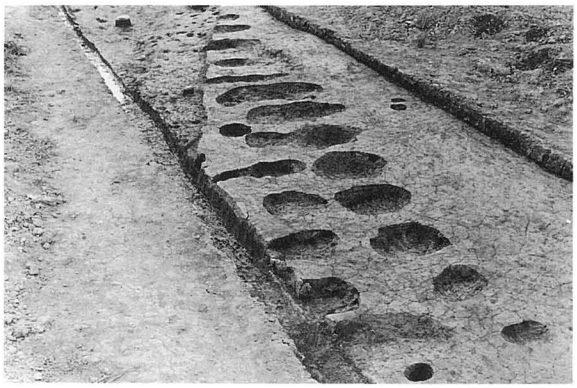


写真10　土坑群全景

写真11　ＳＤ７溝跡全景

写真12　ＳＤ12・13溝跡全景

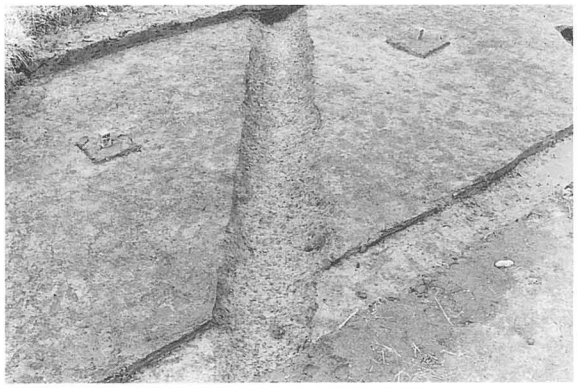


写真13　ＳＤ12溝跡全景

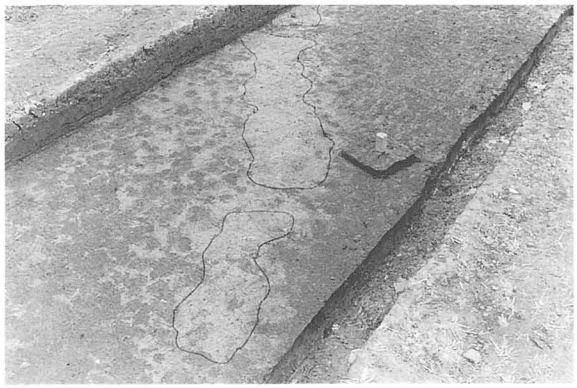


写真14　Ｖｂ層水田跡畦畔検出状況

写真15　Ｖｂ層水田跡検出状況

写真16　Ｖｃ層水田跡全景

写真17　Ⅴｂ層水田跡全景

写真18　ＳＤ６溝跡全景

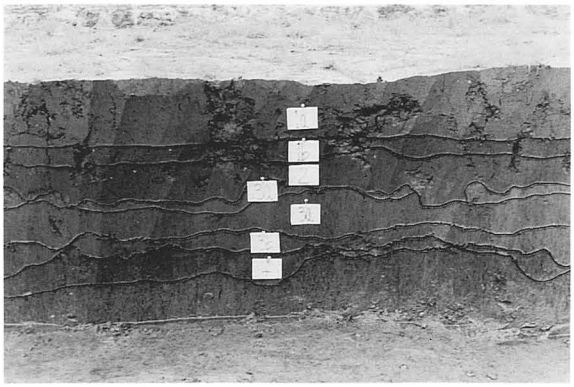


写真19　Ｂ187地点断面（平成２年度）

写真20　Ｂ50～90地点全景

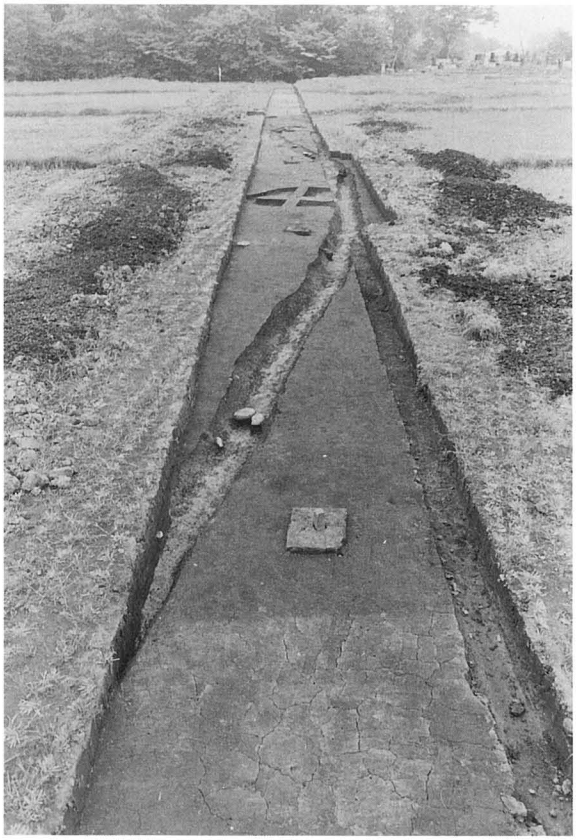


写真21　ＳＤ201溝跡全景

写真22　４トレンチ掘立柱検出状況

写真23　掘立柱柱穴断面

写真24　ＳＤ208溝跡全景

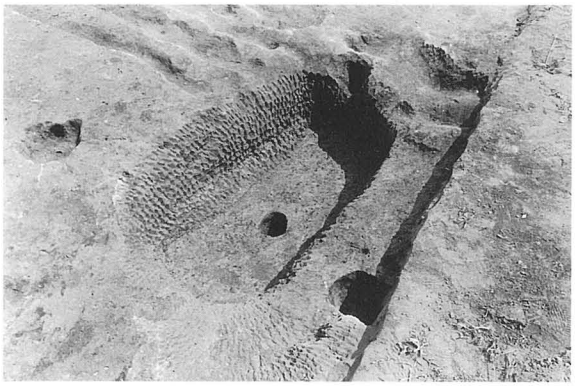


写真25　ＳＫ208土坑全景

写真26　７トレンチ南壁断面

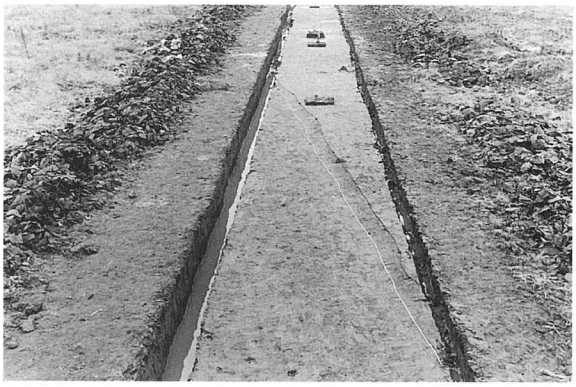


写真27　２層水田跡全景（Ｃトレンチ）

写真28　Ｂ地点２層水田跡全景

写真29　Ｂ地点２層水田跡全景

写真30　Ｂ150地点３ｂ層面牛足跡検出

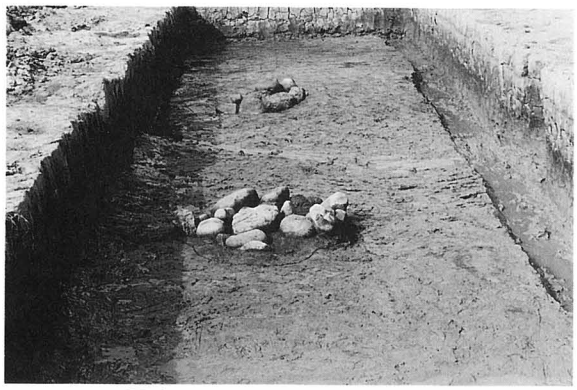


写真31　1・2号石組炉全景

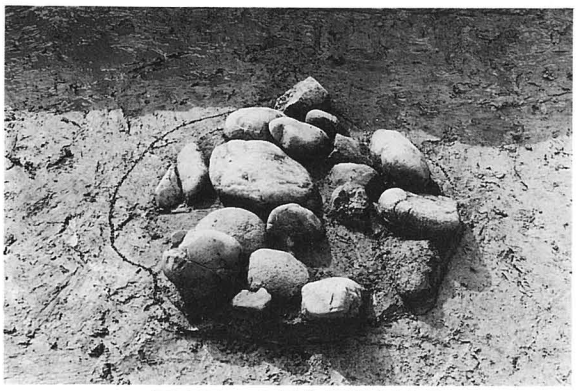


写真32　2号集石組炉全景

写真33　ＳＤ209 溝跡全景

写真34　ＳＤ209溝跡遺物出土状況

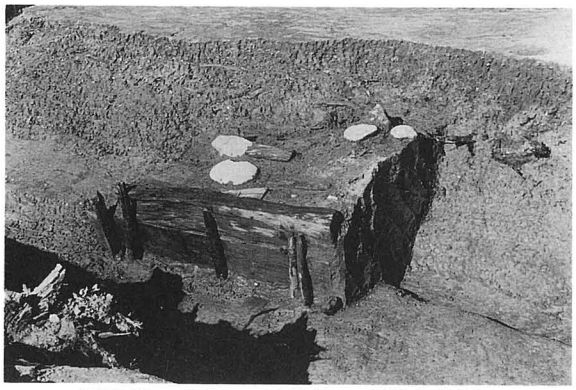


写真35　ＳＤ209溝跡洗い場検出状況

写真36　ＳＤ209溝跡堆積土状況

写真37　17トレンチＳＤ213溝跡全景

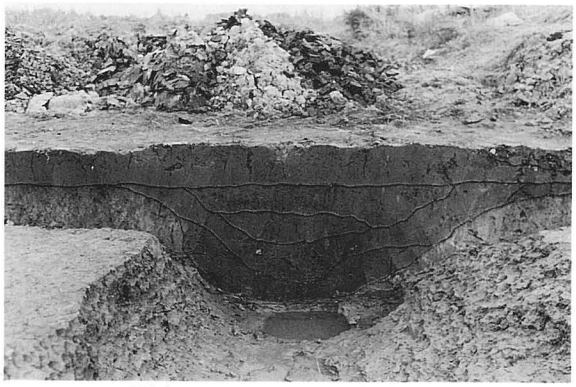


写真38　17トレンチ東壁断面

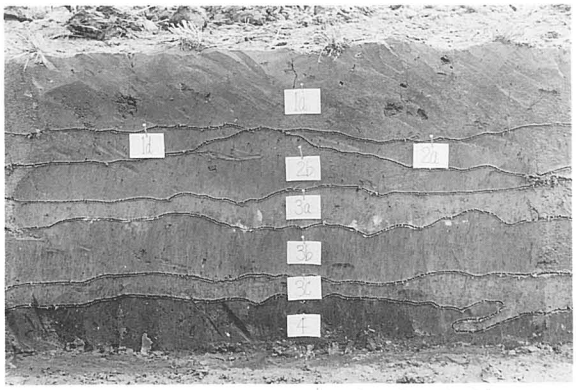


写真39　X512地点断面（平成３年度）

写真40　14トレンチ全景

写真41　X583地点断面（20トレンチ）

写真42　２ａ層水田跡全景（20トレンチ）

写真43　２ａ層水田跡南側全景（20トレンチ）

写真44　２層水田跡全景（19トレンチ）

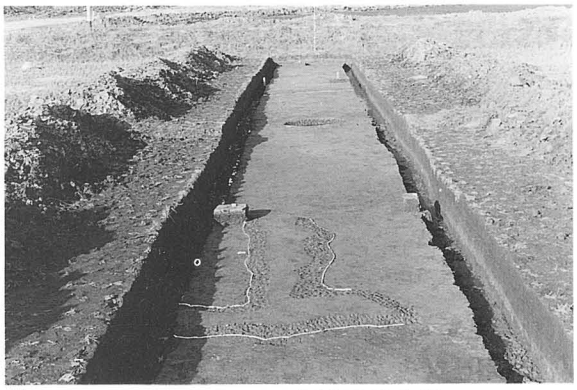


写真45　３ａ層水田跡全景

写真46　３ｂ層水田跡全景

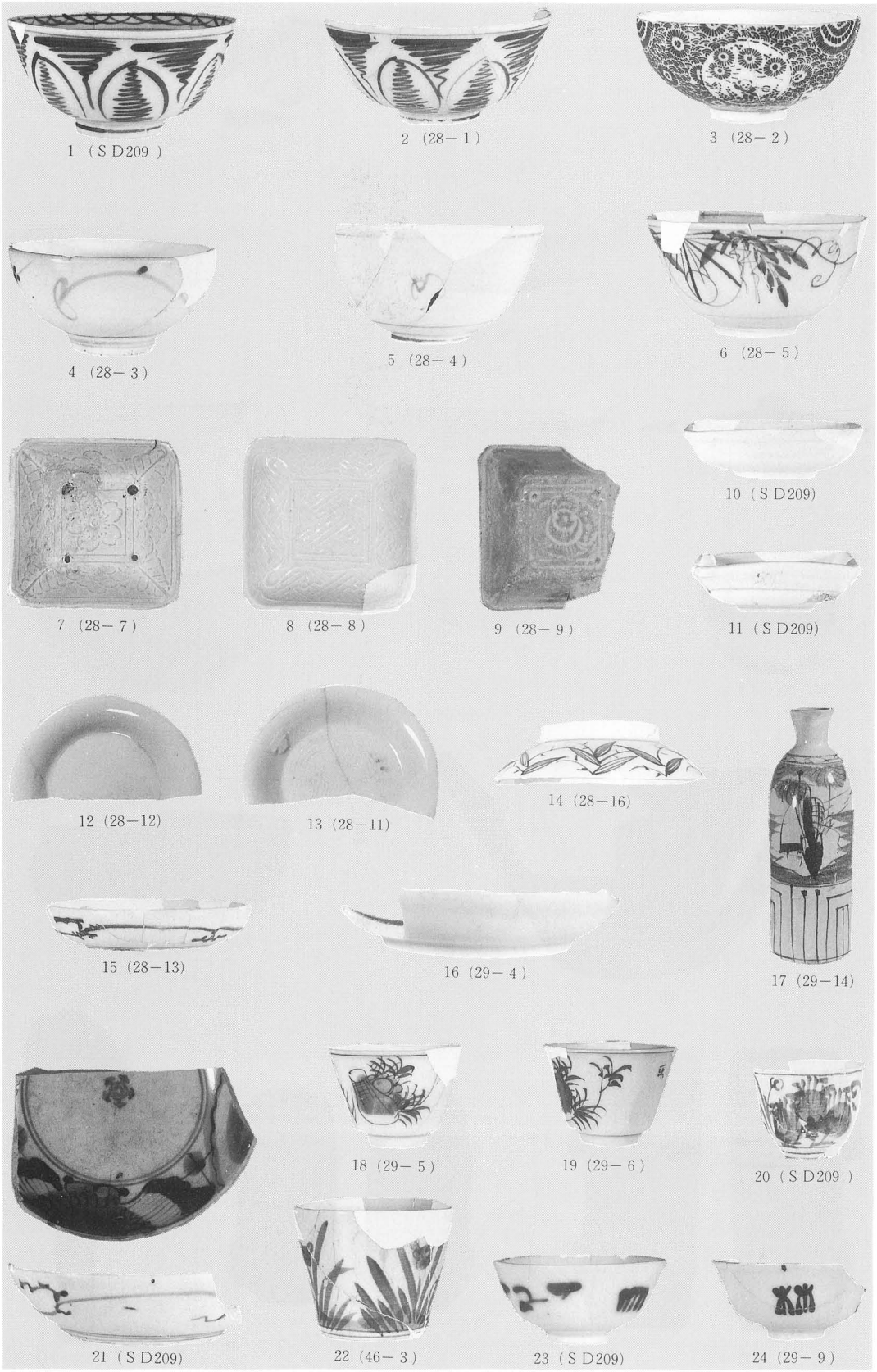


写真47　出土遺物Ⅰ（磁器）

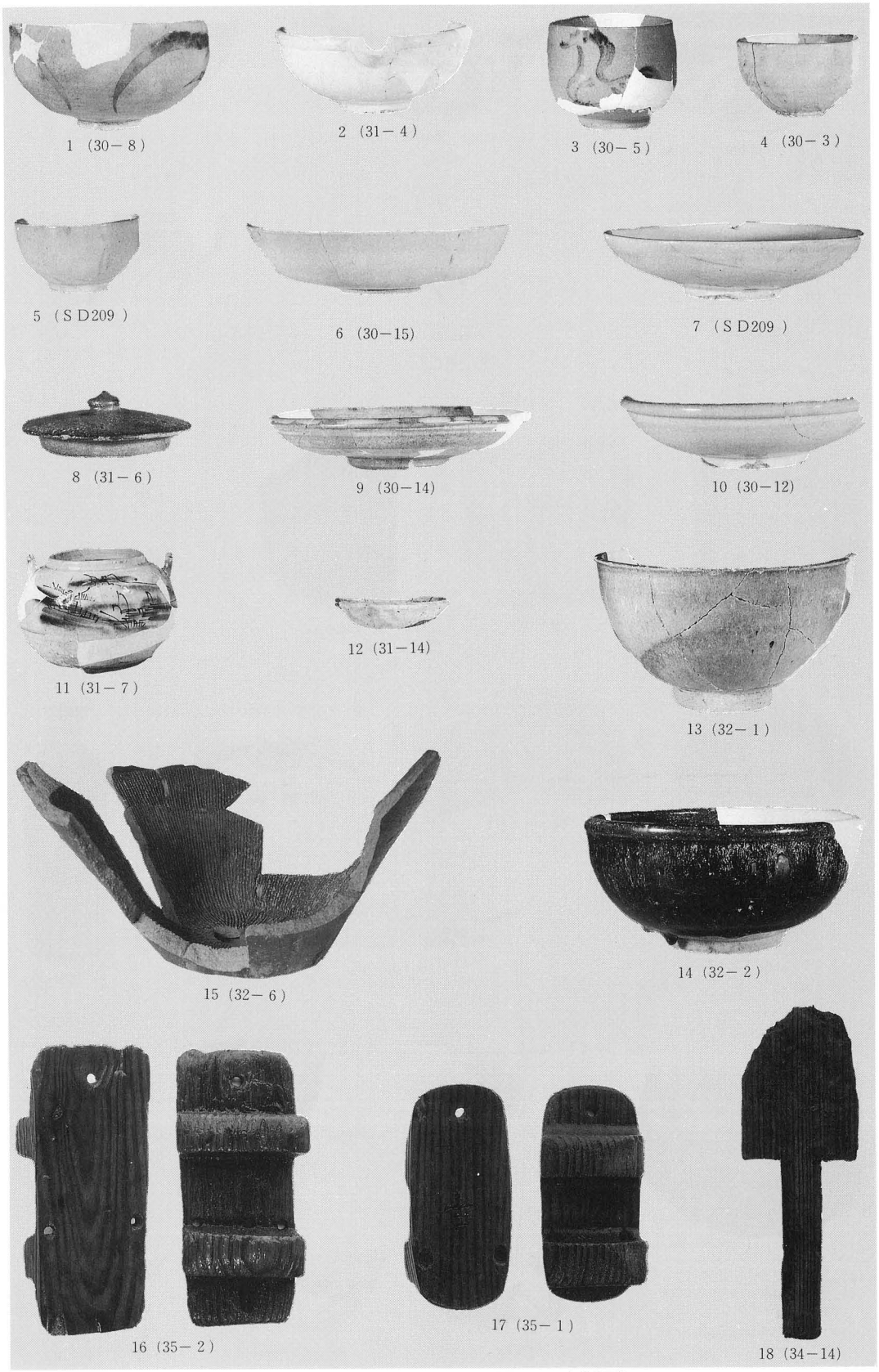


写真48　出土遺物Ⅱ（陶器・木製品）

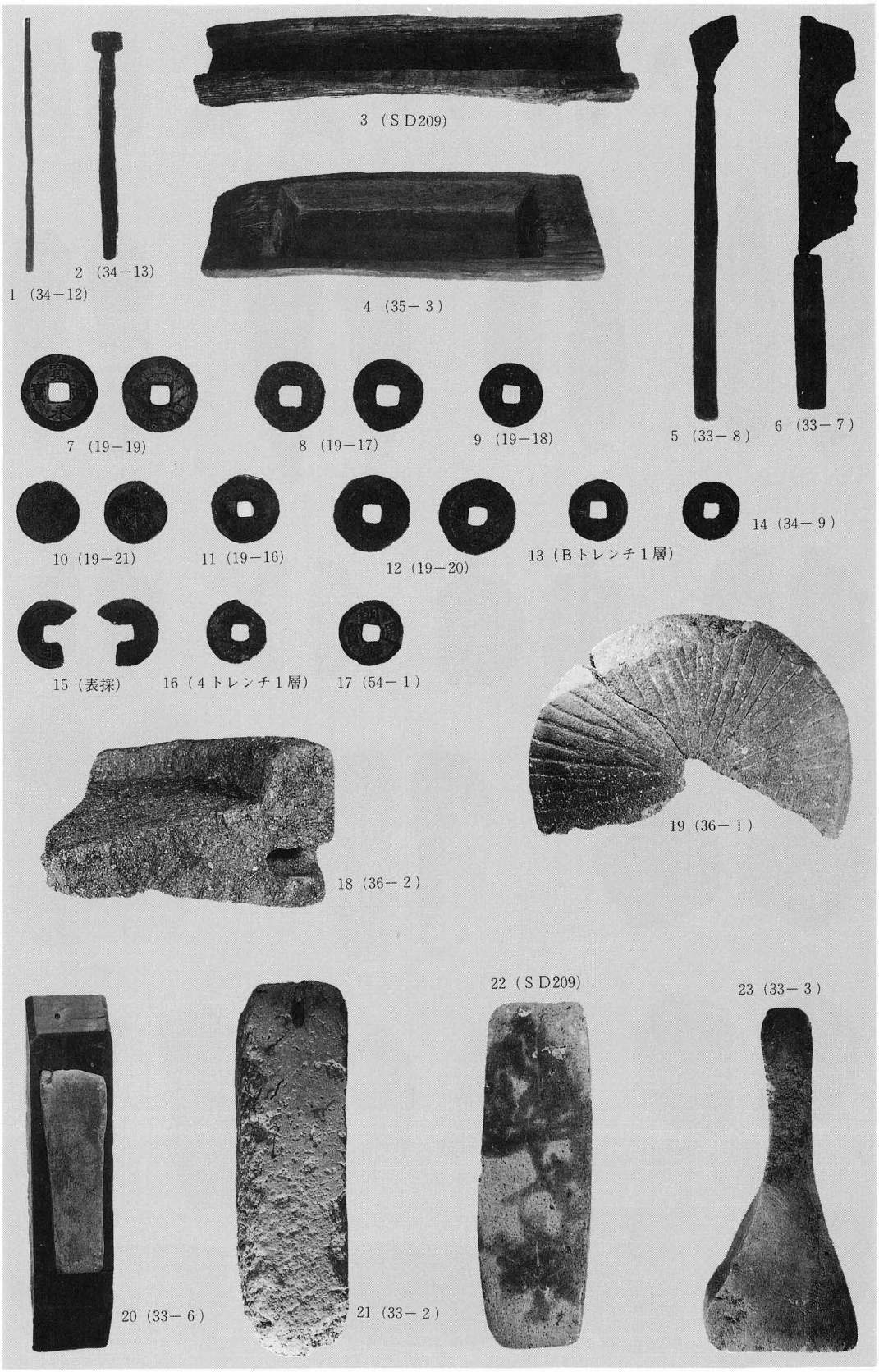


写真49　出土遺物Ⅲ（木製品・金属製品・石製品）

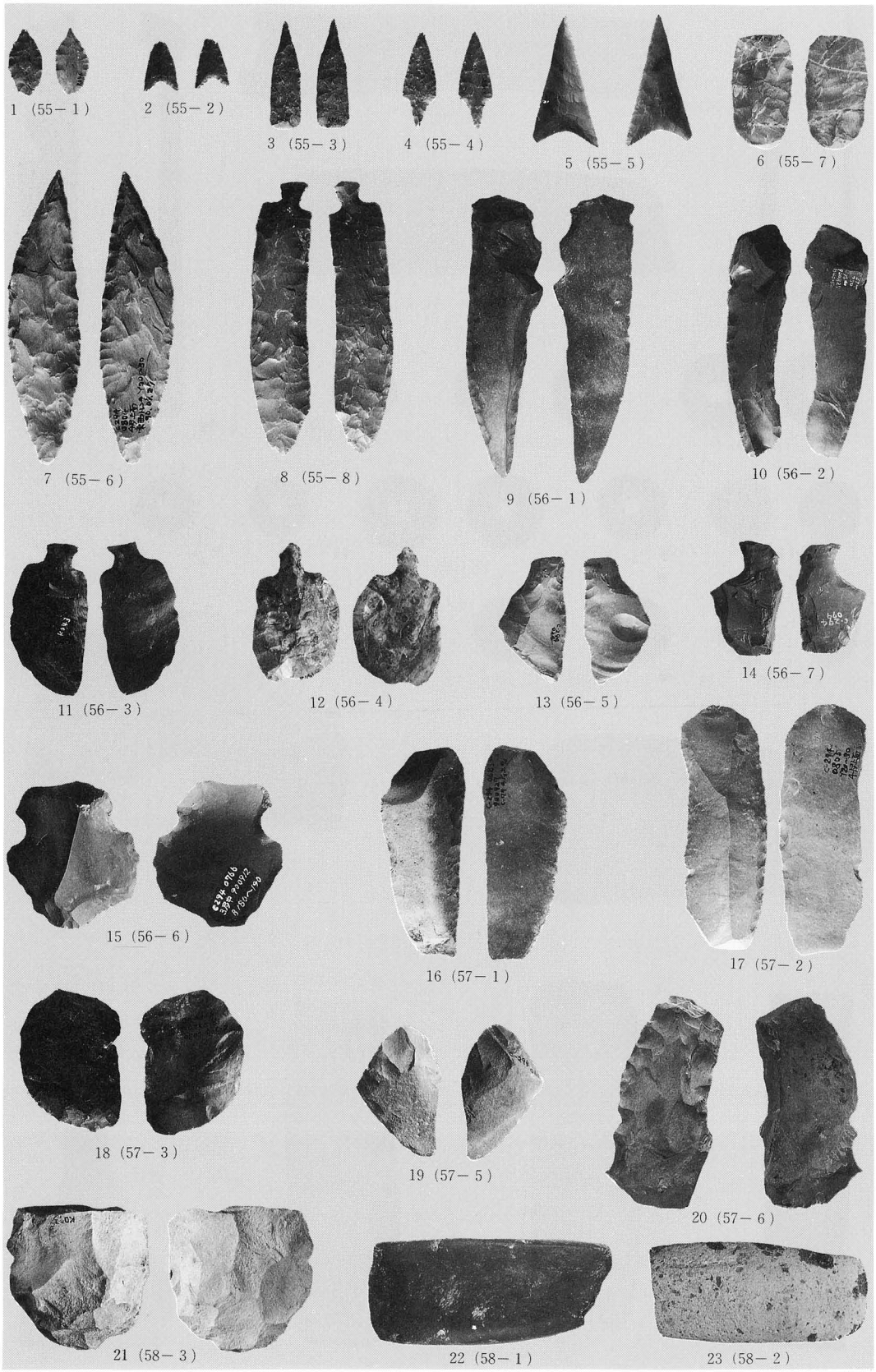
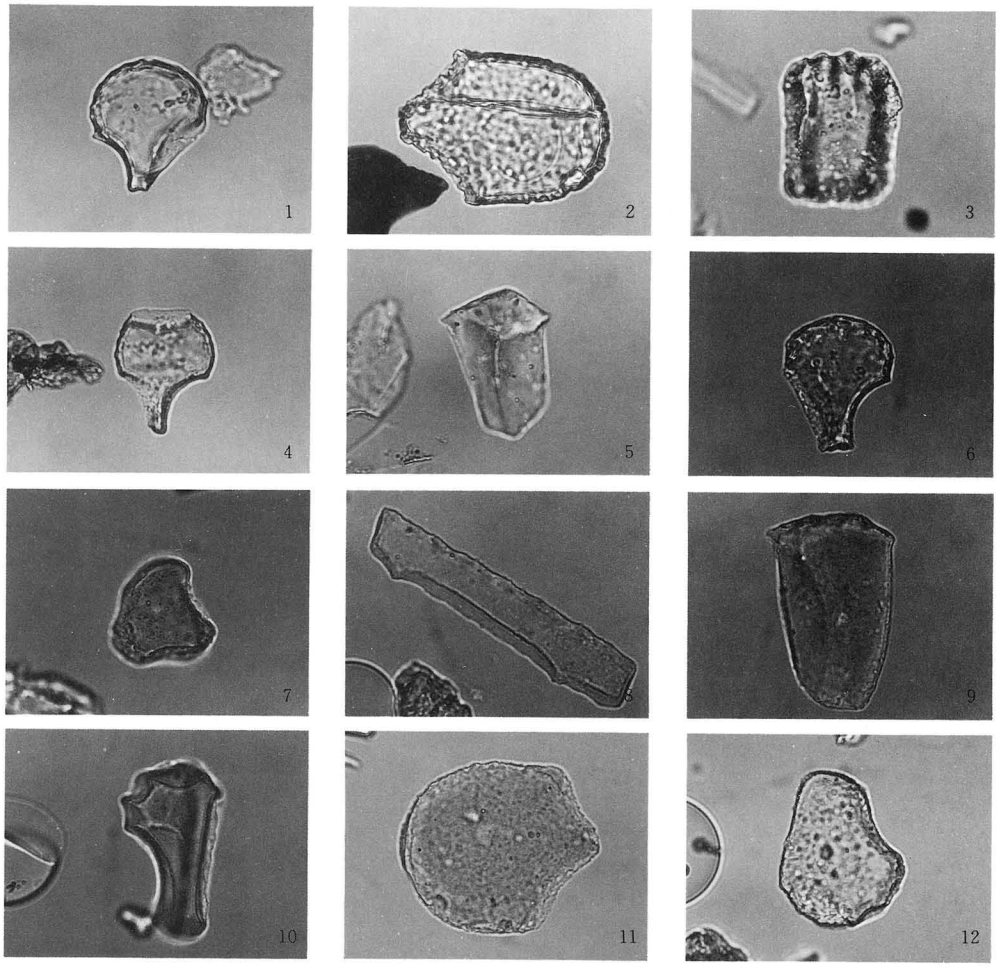


写真50　出土遺物Ⅳ（石器）



	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	B・X42 (平成元年)	1a層	400
2	ヨシ属	L・X580 (平成元年)	IIb層	400
3	タケ亜属	B・X93 (平成元年)	3a層	400
4	シバ属	B・X42 (平成元年)	1a層	400
5	不明	B・X42 (平成元年)	1a層	400
6	イネ	B・186 (平成2年)	3b層	400
7	ウシクサ属	B・186 (平成2年)	3a′層	400
8	不明(キビ属類似)	7トレンチ(平成2年)	1a層	400
9	不明(くさび型)	7トレンチ(平成2年)	3a層	400
10	不明	B・186 (平成2年)	3a′層	400
11	ヨシ属	20・X513 (平成3年)	4層	400
12	不明	20・X513 (平成3年)	2a層	400

写真53　プラント・オパール分析顕微鏡写真

文 化 財 課 職 員 録

課　長　　白鳥良一

管理係		調査第一係		調査第二係	
係　長	菅原澄雄	係　長	加藤正範	係　長	田中則和
主　任	村上道子	主　任	結城慎一	教　諭	太田昭夫
主　事	佐藤正幸	教　諭	佐藤好一	主　事	佐藤甲二
〃	高橋三也	主　任	篠原信彦	〃	渡部弘美
〃	庄子　厚	〃	木村浩二	〃	斎野裕彦
〃	佐藤寿江	〃	佐藤　洋	〃	荒井　格
		主　事	吉岡恭平	〃	中富　洋
		〃	金森安孝	〃	平間亮輔
		教　諭	小川淳一	教　諭	五十嵐康洋
		主　事	工藤哲司	〃	菅原裕樹
		〃	主浜光朗	主　事	渡部　紀
		〃	長島栄一	教　諭	熊谷裕行
		〃	工藤信一郎		
		教　諭	神成浩志		
		〃	竹田幸司		
		〃	稲葉俊一		
		主　事	佐藤　淳		
		教　諭	川名秀一		

仙台市文化財調査報告書第170集

仙台平野の遺跡群XII

平成5年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24-24　TEL　263-1166